

k-364

神矢田遺跡

—第3次・第4次・第5次発掘調査報告と考察—

昭和47年3月

山形県遊佐町教育委員会

神 矢 田 遺 跡

—第3次・第4次・第5次発掘調査報告と考察—

昭和47年3月

佐藤 禎 宏

佐藤 鎮 雄

序

遊佐町教育長 菅 原 傳 作

第3次第4次第5次の調査も完了し、今回神矢田遺跡調査の最終報告書をだすはこびになったことについては、関係者の皆さんと共に、喜ぶたいと思う。

3月現地の埋戻し作業をなし、田圃に復元した神矢田にたつて、この発掘の推進役をつとめた村上孝之助さんは、涙がでてしょうなかったと、述懐している。おそらく、ここで、炎天にさらされ、或いは、雨の中で、作業したものは、ひとしく、同じ感慨をもつに違いない。第1次第2次で完了の予定が、第5次まで、おし進められたことは、この遺跡が、充分、世に向う程の価値を蔵するものであると共に、これに当つた方々の、この遺跡に対する愛情と学問に対する追求の熱意によるものと、心から感謝いたすものである。

昨46年3月町文化財保護条例が設定されたが、この年に、この報告書を、世に問うことのできることは、実に大きな意義のあることであると思う。郷土の先住の民の生活を遺跡と遺物を通して、明らかにすることは、その開発の労に対する我々のできるせめてもの、報恩ではあるまいか。そして、その貴重な遺品の数々と、その調査報告書を、将来の人達の為に、のこすことも我々の大きなつとめである。

茲に、この報告書作成に、直接あたってくれた佐藤禎宏氏、佐藤鎮雄氏、団長の村上孝之助氏、山大のみなさん、酒田中央高の大ぜいのみなさん、田圃を快く提供してくれ、物心両面に亘つて協力してくれた菅原克郎氏、上戸のみなさん、町教委のみなさんに、万腔の感謝の意を表し、心からこの調査報告書の完成を喜ぶものである。

序

山形大学名誉教授 柏倉亮吉

秀峰鳥海の裾、噴き出た泥流が庄内平野と接するところ、斜面と平坦面と交錯して、その接点は幾折れの屈曲をなしている。この屈曲にしたがって幾折れの小道を辿りながら、私は神矢田遺跡へ近づいていた。昭和45年春、5月のことである。とある曲りを曲ったとき、一瞬、私の眼を打ったのは、山の斜面に点々とある椿の花の紅色であった。一株、二株ではない、次から次へと続くのである。つややかな照り葉、紅い花。立ち止って見ていたら、何とそのほとりの、とあるなだりに、赤・青の華やかなヤッケをつけた一群が発掘を行なっていた。この遺跡が神矢田遺跡であった。赤青の群は酒田中央高校の考古学研究部の乙女達であった。つらつら椿の花咲く遺跡！これが神矢田遺跡についての私の強い印象である。

この緩かななだりに圃場整備事業が計画され、その作業が実施されたのは昭和43年10月である。ブルドーザーが動き出したとなれば、その地下に眠る遺跡は痕形もなく壊滅してしまうのが常の例である。しかし神矢田遺跡はその点では幸運であった。作業中、片鱗を現わしたその時点で、光らせていた眼にあたり、ひいては手ぐすねにつかまったからである。すなわち、文化財保護条例を作って、大いに為すあらんとしていた遊佐町教育委員会当局、考古愛好の血を引いて町内に自適する村上孝之助氏、庄内考古学研究会の推進役を勤める禎宏・鎮雄の両佐藤氏、禎宏君の指導の下に遺跡調査の実績を累ねてきた酒田中央高校の考古学研究部、これだけの役者が時を措かず活動を始めて、壊滅寸前に遺跡を見究めようとしたのであった。天の時といおうか、地の利といおうか、はたまた人の和というべきか。

その発掘調査の途上、調査団は周辺の遺跡を探索しながら、一見、小さな発見をした。遊佐町中藤崎の砂丘上にある遺跡が神矢道と呼ばれていたことを見つけたのである。著者が本文に記しているように、この神矢道遺跡こそ日本三代実録に記されている飽海郡西浜であろうことを思わせる。仁和元年(885)の夏6月、石製の鎌が現われて、地方・中央の行政当局を興奮させ、翌年4月にその興奮を再びさせた「出羽国飽海郡西浜」こそが砂丘上の神矢道遺跡であろう。神矢田の本遺跡も、距離的にはその遺跡と圏を同じうし、時代的には一環のものと思われる。

関係者の努力によって、この意味ある遺跡、椿咲く遺跡がその性格を明らかにされ、遺物が丹念に報告されることはこの上ない喜びである。千百年前の出羽国行政当局はともかく、三世紀前以来、この遺跡に注目してきた先人もまたこの喜びを頒って下さることと思う。

序

山形大学講師 加藤稔

東北地方に生を享けたわれわれにとって、亀ヶ岡文化の研究はもっとも魅力ある考古学上の研究主題である。私もまた、『神矢田遺跡』の著者たちと、ある時は共に、ある時は別に羽黒町玉川遺跡、東根市蟹沢遺跡、河北町花ノ木遺跡、寒河江市石田遺跡など、最上川流域の縄文時代晩期に属する遺跡の調査にしたがってきた。しかしながら、それぞれの遺跡での莫大な資料の整理は実に至難の業なのである。40,000点にも及ぶ遺品の整理を短期間に完了し、ここに再び、第3～5次の発掘調査の報告書を完成された、佐藤禎宏、佐藤鎮雄の両氏の努力に敬意を表する。

明治期の奥羽人類学会の遺鉢を継ぐべく活動を続けている庄内考古学研究会の中核的存在である著者たちによる雑誌『庄内考古学』の続刊と、発掘調査報告書『神矢田遺跡』の刊行とは、最近における山形県考古学界に大きな影響を与えている。同じく庄内の羽黒町玉川遺跡の報告書もわれわれの手で近く上梓される予定であるが、『神矢田遺跡』と並んでこの地方の亀ヶ岡文化の内容が解明されることが期待されている。これも、精密な調査と迅速な整理、そして深い考察に裏づけられての報告をいち早く世に問われた著者たちに触発されたものといわなければならない。

神矢田遺跡は、幾度かその片鱗を地上にのぞかせてきた。その中で、鈴木盾三氏と樋口清之氏による有孔磨製石斧の発見と紹介は、この遺跡が、弥生文化に関係するものであることを暗示していたのである。第5次までの調査によって遺跡の南西部に仙台湾地方の福浦島下層式に対比できる弥生式土器群が発見されたことは、庄内の歴史を解明する上に画期的な資料を提供したものである。庄内平野の低地には弥生時代遺跡の発見が皆無にちかい現状であった。今後の、この方面の研究の進展を祈ること大である。

最後に、この遺跡の調査と保存に大きな力となってきた村上孝之助氏に感謝するとともに、5次にわたる調査期間中、山形大学の学生諸君をご教導いただいた、村上、両佐藤氏および遊佐町教育委員会当局にお礼を申し上げ、共に『神矢田遺跡』の発行を喜ぶものである。

昭和47年10月11日

序（1つの提言）

調査団長 村上孝之助

昭和四十五年この調査を始めてから二年間、前後五回に亘って発掘調査をすすめてその報告書を出版する事が出来る事を喜びとする所である。この調査で気付いた事を二・三述べて序文に代えたい。この遺跡はその名に恥ぢない石鏃の多産地である。発掘されたものと表採を合せたら、千本をこえるであろう。其形も多彩である。次に凹石の多い事であり百個に余る数である。発火器具の凹石とは考えられない凹み方で、小石器製作台と考えられるのである。凹痕は殆どウスイ刃痕が残っている。凹みが深くなると又別の所を使っているし石鏃製作用の台石と考えられるのである。発火用と見られるものも出ているが形が人為的に整えられ凹みも円くやや深くきれいに作られているのである。

次に第1次に発掘された高環形土器、第四次に発掘された小形の深鉢は変形工字文が施文せられ、或いは弥生原初の土器ではないかと言われ、この遺跡の評価も変わってくるのではないか。石冠の表採一ヶ、第四次発掘一ヶと第一次発掘のスタンプ状土器は陶拍子でないだろうかと言う事である。須恵器の青海波文も陶拍子の文であろう。先に三崎山から出土した青銅刀子は殷刀と言われ、これを模したと思われる反りのある石剣が永泉寺に保存されていると言う事実を考慮に入れ、更に殷虚の鄭州製陶遺構の中からの出土品に陶印模陶拍子があり、この陶拍子は特にスタンプ状土器と同形のものである事を注目すべきである。同様に大洞BC式に突然に出てくる羊歯状文も原型を殷初期の青銅器に施文せられている横連続文様と酷似している点に求められるのではないだろうか。殷の甲骨文字に舟の原字もある所から考えると舟航の技術も持っていたと考えられるのである。暦法、測天の術もあったのである、殷が周に亡ぼされても殷人の技術は温存され、青銅文化は永くつづいていたのである。高松塚古墳に伝えられている仏教文化の経路も旧殷都洛陽（東郊に中国最初の仏寺白馬寺がある）に源を発している事を考えると誠に永いお付き合いである事を思わずにいられない。この殷文化が日本の縄文後晩期に強い影響を与えていると考察されると思うのである。日本人は古代から文化の吸収の術に仗けていたと考えて然る可きであろう。石斧砥石も数個採集したが土中に埋ってる時は、軟く黄色砂としか考えられない状態である。殆んど表採である。又漆を採った形跡がある容器と刃器である。塗料としたか、接着に使用したかは判然としない接着剤としてアスファルトが使われている。アスファルトは近くの湯之台に自然湧出地があり以前に、石鏃がアスファルト中から採取された記録がある。石鏃の着装には殆んどアスファルトであるが、中には漆と見られるものも二・三点はある様に見受けられる。ここからアスファルトの小塊とこれをかきまわしたと見られる石筥が出土している。以上特記したい事を抜き書きにしたがその声価は当事者としては甚だ大きいものがあつたと考えている次第である。終りにこの発掘についての関係各位に対して深甚の謝意を表するものである。

例 言

1. 本書は山形県飽海郡遊佐町教育委員会が実施した神矢田遺跡発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は次のように実施された。
 - 第1次発掘調査 昭和45年5月2日～5日
 - 第2次発掘調査 昭和45年8月6日～12日
 - 第3次発掘調査 昭和46年5月2日～5日
 - 第4次発掘調査 昭和46年8月5日～11日
 - 第5次発掘調査 昭和46年10月30日～11月3日
3. 本書の第2章第3節と第4章第1節は佐藤鎮雄、他は佐藤禎宏が執筆した。
4. 本書の執筆以前に資料の整理、検討を完全に終了していない。出土遺物も本書に完全に網羅できず、土器と石器は代表的な典型を抽出して提示する方法をとった。しかし神矢田遺跡の全容に迫っている。もし不備な点があるとすればその責任は筆者らにある。
5. 遺物の整備と拓影、実測図作成の一部は酒田中央高等学校考古学研究部員の協力による。写真は佐藤禎宏が担当し、図版は第1～5次発掘調査で出土したものから選出した。
6. 出土遺物は遊佐町中央公民館資料室に保管する。
7. 題字は遊佐町町長佐藤政雄氏の揮毫による。

発掘調査参加者

村上孝之助 佐藤禎宏 佐藤鎮雄

柏倉亮吉、加藤稔、酒井忠一、川崎利夫、長沢正機、伊藤忍、佐藤庄一、小形利彦
遊佐町教育委員会 菅原伝作、藤原及定、遠田実、阿部亮蔵、佐藤富佐雄、菅原洋一

村上良一、阿部幸治、村上とき子、村井仁、菅原英子、菅原千和子、梶原俊夫
佐藤彦治、高橋栄、池田信喜、坂野大鳳、阿部文夫、藤原孝子

山形大学考古学研究会 名和達朗、海野丈芳、保角里志、松野陽一、安彦政信、東海林次男
酒井功、三部美津子、剣持みどり

酒田中央高等学校考古学研究部 伊藤みき、斎藤粧子、青山千明、池田アキコ、守屋圭子
深沢由美子、藤原幸子、土井喜美子、渡辺和子、鎌田浄子、桜田ゆみ、伊藤みさ子

後藤真理子、住石りつ子、尾崎美保子、奥山恵子、斎藤孝子、清野寛子、長南敏子
相馬美和子、風間雅子、富樫陽子、長谷部広子、阿部弘子、猪俣慶、阿部百合子

高橋咲子、高橋日女子、本田裕子、斎藤由美子、石井みつ子、太田貞子、庄司恵美子

遊佐高等学校社会研究部 樋口トシ、菅原みわ、佐藤ゆき子、今野俊子、菅原麗子、阿蘇則子
地元関係協力者 梅津恒夫、木崎嘉太司、小松昌一、池田純子、狩野長一郎

菅原克郎（土地所有者）

目 次

はしがき	1
第1章 遺跡	2
第2章 第1次・第2次発掘調査の概要	5
第3章 第3次・第4次・第5次発掘調査	7
第1節 発掘調査の経過と層序	7
第2節 遺構	11
第3節 遺物	14
1. 土器	14
2. 石器	44
3. 土偶	54
4. 装身具	55
5. その他の遺物	57
6. アスファルトの附着した石器	59
第4章 考察	60
第1節 神矢田遺跡出土の土器編年について	60
第2節 石鏃について	75
あとがき	84

挿 図 目 次

第1図 神矢田遺跡と周辺の遺跡	2
第2図 神矢田遺跡附近地形測量図	3
第3図 神矢田遺跡発掘地点測量図	8
第4図 第6・7トレンチ地層断面図	9
第5図 第2号住居跡実測図	11
第6図 第7トレンチ南部拡張区実測図	12
第7図 第7トレンチ北部第2号石組実測図	13
第8図 土器拓影(1)―第1・3群土器	15
第9図 土器拓影(2)―第3・4群土器	17
第10図 土器拓影(3)―第4・5群土器	18
第11図 土器拓影(4)―第5群土器	20
第12図 土器拓影(5)―第5・6群土器	21
第13図 土器拓影(6)―第6・7・8群土器	24
第14図 土器拓影(7)―第9・10群土器	25
第15群 土器拓影(8)―第10・11群土器	27
第16図 土器拓影(9)―第11群土器	29
第17図 土器拓影(10)―第12・13・14群土器	30
第18図 土器拓影(11)―第14・15・16群土器	33
第19図 土器実測図(1)―第3・5・10・11群土器	34
第20図 土器実測図(2)―第12・13・14群土器	35
第21図 土器実測図(3)―第14・15・16・17群土器	36
第22図 土器実測図(4)―粗製土器	37
第23図 石器実測図―石鏃	46
第24図 石器実測図―石錐・石匕・尖頭石器	48
第25図 石器実測図―石べら・不定形石形器・打製石斧	50
第26図 石器実測図―磨製石斧・円盤状石製品・凹石・石刀・石剣・石棒 石冠・浮子石	51
第27図 石器実測図―石皿・石棒・石錘	53
第28図 土製品実測図―土偶・土版・土器口縁部装飾	54
第29図 装身具実測図	56
第30図 添採集具実測図	57
第31図 アスファルト附着の石器実測図	58
第32図 県内各地の後期初頭の土器群	62

第33図	県内各地の後期中葉の土器群	65
第34図	県内各地の後期後葉の土器群	67
第35図	神矢田遺跡出土の石鏃形態分類	76
第36図	山形県出土の石鏃	78
第37図	室谷洞穴出土の石鏃の変遷	80

付 表 目 次

第1表	精製土器の分類と出土量	39
第2表	粗製土器（半粗製）の分類と出土量	43
第3表	出土石器の種類と出土数	44
第4表	神矢田出土の土器分類と同タイプの土器を出土する県内各地方の 代表的遺跡	71
第5表	神矢田遺跡の土器群別と関東・東北地方における後、晩期縄文式 土器の形式編年対比表	73
第6表	山形県出土の石鏃の類型と出土数	79

図 版 目 次

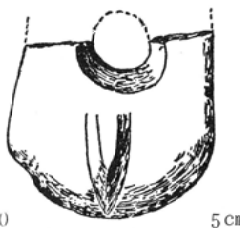
図版1	1. 神矢田遺跡の全景 2. 神矢田遺跡の近景 3. 神矢田遺跡の近景
図版2	4. 第6・7トレンチ南部の発掘状況 5. 第6トレンチ8区東壁の地層
図版3	6. 第1号住居跡 7. 第2号住居跡
図版4	8. 第2号石組 9. 第2号炉跡
図版5	10. 中期末葉の土器片 11. 後期初頭の土器片 12. 後期初頭の土器片
図版6	13. 後期初頭の土器片 14. 後期中葉の土器片 15. 後期中葉の土器片
図版7	16. 後期中葉の土器片

	17. 後期中葉の土器片 18. 後期後葉の土器片
図版8	19. 後期後葉の土器片 20. 後期後葉の土器片 21. 後期後葉の土器片
図版9	22. 後期初頭の壺 23. 晩期中葉の小鉢
図版10	24. 後期後葉の注口土器 25. 晩期初頭の注口土器
図版11	26. 後期中葉の粗製土器 27. 後期後葉の粗製土器
図版12	28. 晩期中葉の小鉢 29. 晩期中葉の小鉢
図版13	30. 晩期初頭の埴 31. 晩期後葉の壺と小鉢 32. 晩期初頭の鉢
図版14	33. 晩期中葉の浅鉢 34. 晩期後葉の壺
図版15	35. 晩期中葉の小鉢 36. 晩期中葉の小壺
図版16	37. 晩期後期の高台坏 38. 晩期末葉の高台坏
図版17	39. 晩期末葉の壺 40. 弥生初頭の鉢
図版18	41. 石鏃 42. アスファルト附着の石器
図版19	43. 石べらと石ヒ 44. 土錘と石錘 45. 石棒
図版20	46. 磨製石斧 47. 凹石 48. 円盤状の土製品と石製品
図版21	49. 土偶 50. 装身具

は し が き

神矢田遺跡の第1、2次発掘調査の結果は、その概況を昭和46年3月に報告している。それによって神矢田の性格はほぼ明らかにされたといえる。その後、第3～5次まで発掘調査を継続し、新たな資料を加えることができた。そこでここに継続調査による結果の報告を中心にしながら、前報告書において不完全もしくは誤記した点を補正し、考察を加えて前報告書と多少重複する点もあるが、神矢田遺跡発掘調査の総括的な報告としたい。

遊佐町の周辺では石鏃を神矢石（かみやいし）とよんでいる。同町中藤崎の西に庄内砂丘を横断する道路があり、神矢道とよばれている。この道附近から佐藤藤蔵翁が植林の際に発見したという石鏃・石槍・石匕・石棒・磨製石斧などが、今でも同家に伝えられている。時は「延享（1744～48）の昔」とあり、所は「西浜砂山」「神矢根道」とある。特に石鏃の数はおびただしく、時期が下ってから明治天皇へ献上している。その際桐箱10個と献上の石鏃452点が撮影されて残っている。これらの中にアメリカ型石鏃があり注目される。飽海郡内の庄内砂丘地で今のところ石鏃出土でもっとも注意される遺跡で、『日本三代実録』に見る記録はこの神矢道附近である可能性が強い。

神矢田もまた石鏃を多出する水田という意味の地名である。調査団の村上孝之助が所蔵する石棒には「正徳元年（1711）北目堰より採集」と記されている。北目堰は神矢田遺跡を南北に2分して西流する灌漑用水路である。開田とともに用水路が切り通されたのは江戸時代の中頃といわれ、この石棒がその時期を明示している。その時多くの石鏃(1)  5 cm
が出土して神矢田と名づけられたことであろう。伴出した遺物とともに 有孔石斧（樋口1931）
に今は散逸している。昭和6年、樋口清之氏が「有孔石斧の一例」（上図）という報告を「史前学雑誌」に掲載している。その出土地は「羽後国飽海郡高瀬村富山字神矢田」となっており、所蔵者は東田川郡東栄村添川の鈴木盾三氏とある。頭部を欠失したハマグリ形両刃の磨製石斧で、中央に約1.5cmの円錐孔が貫通している。この出土例は弥生文化の発達に結びつけて考えることもできる。昭和10年に中谷治宇二郎氏は『日本先史学序史』を著わし、神矢田の遺跡名が記されているが、樋口氏の出土例によるのであろうか。

その後、遺跡は深く地中に忘れられてきた。ところが昭和45年2月畑地区圃場整備事業によって遺跡の一部が破壊され、無数の遺物とともに再び地上に姿を現わした。この情報が村上孝之助、致道博物館の酒井忠一氏、山形大学の柏倉亮吉名誉教授と筆者に伝えられ、同年4月3日、6日、19日と現地調査が実施された。その結果遺跡の重要性和発掘調査の必要性が確認され、以後5次にわたる調査が行われている。したがって緊急調査といえるが、発掘の主体となった遊佐町教育委員会の埋蔵文化財に対する高い意識と、地主菅原克郎氏のあたたかい好意によって、かなり満足のいく調査ができた。遺跡は今、水田下で再び眠りにつこうとしている。

第1章 遺 跡

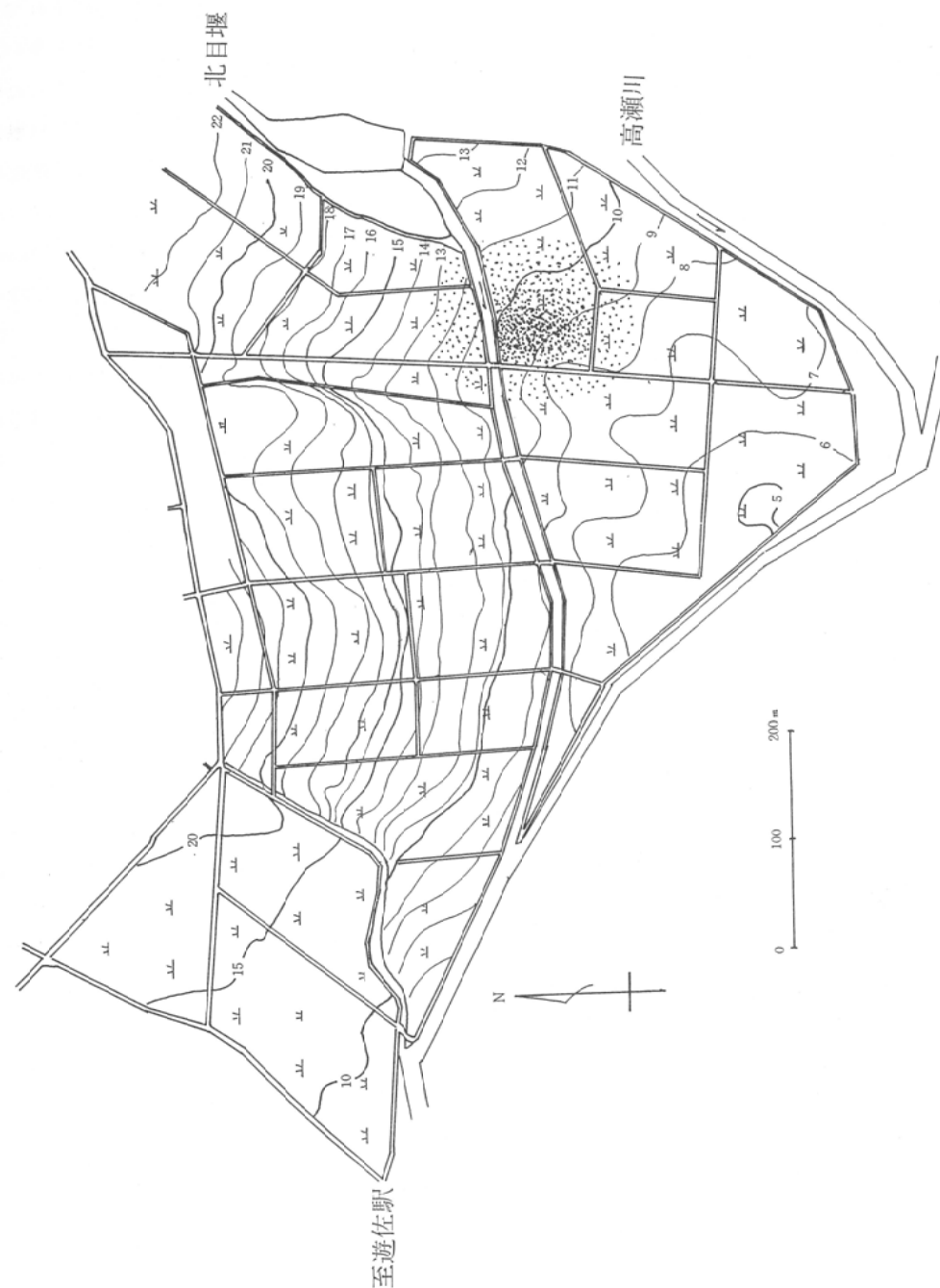
神矢田遺跡は山形県飽海郡遊佐町大字北目字神矢田にあり、調査地点は1番地と1番地の1である(今回の調査期間中に正式地番を調べたところ前報告の記載は誤りであった)。

遊佐町は山形県の西北端にあり、出羽富士と呼称される秀峰烏海山(2229.9m)の南西山麓



第1図 神矢田遺跡と周辺の遺跡(×印・神矢田遺跡、▲印・神矢道遺跡)

— 吹浦(五万分の一)図幅の部分 —



第2図 神矢田遺跡附近地形測量図(数字は標高)

部と庄内平野・庄内砂丘の北端にひらけた町である。この町には93ヶ所の遺跡が確認されているが、先史時代の遺跡は山麓部に集中している。すでに広く紹介され注目された遺跡も多い。古代における「石鏃雨降」の西浜はその位置が未明である。また杉久保形ナイフを出土した臂曲遺跡、縄文時代早期の円形住居跡の発見された金俣遺跡、前期の円筒と大木文化圏の接触地点とされた吹浦遺跡、晩期の遮光土偶を出土した杉沢遺跡、青銅刀を出土した三崎山遺跡などはいずれも神矢田遺跡から8km以内の鳥海山麓にある。

さて神矢田遺跡は鳥海山の西南山麓部が将に庄内平野に接しようとする地点にあり、標高は9mを数える。西に松の緑もあざやかな庄内砂丘を越えて日本海が浮び、北東に鳥海の霊峰が聳え、南に穀倉庄内平野が眺望される。鳥海に源を発した高瀬川は遺跡を迂回するかのようその東側を南流し、方向を転じて南側を西流する。この清流は古くより鮭の上る川として知られ、現在でも孵化施設と漁獲高は裏日本第一を誇っている。遺跡を南北に断ち切る北目堰は高瀬川の水を求め、遺跡のやや北東で寒冷な水を一度貯めこんで権厩に使用している。遺跡の北方約400mの畑部落内には清らかな湧水が絶えることがない。日本海の汀線までは5.3kmである。附近の遺跡は第1図に示した通りである。

遺跡の基盤をなす地質は安山岩質火山碎屑物である。鳥海山は江戸時代まで爆発を起した火山であり、千年単位ではかなりの地形的な変動を想定できるが、裾野ではことに河川による運搬、堆積の活動が激しい。沖積層はこうした地層の上に比較的薄く堆積している。

現在遺跡は水田として利用されている。南向きのなだらかな斜面に位置する。第2図に示した地形測量図はすでに圃場整備事業が進行し旧地形面が大きく変化していたため、圃場整備計画のために計測された旧水田面の標高をもとにして作成したものである。農道は新規のものを記入した。遺物の散布している状態をドット分布で示したが、その広がりには約200mの円形を呈する。高瀬川の右岸にあたり遺跡からの距離は200mに満たない。遺跡の北端と南端の比高は5mで緩斜面を形成しているが、高い地点に古い遺物が低い地点に新しい遺物が見られた。つまり北目堰の縁辺には縄文時代中期末～後期前半の土器片が多く、遺跡の南半には後期後半～晩期の土器片が多かった。

第2章 第1次・第2次発掘調査の概要

昭和45年度に行なわれた第1次・第2次発掘調査の面積は延べ224.5㎡に及んでいる。調査地は圃場整備事業から破壊を免れた地点、つまりブルドーザーが土を削った所を避けて、なるべく盛土を運んだ所を選んだ。多少の試掘によって北目堰の南部にほぼ南北の方向に長い5本のトレンチを設定した。その調査の結果前報告のようなことが明らかになったのであるが、ここにその概要を記しておきたい。

遺跡の地層は第3・4トレンチの西壁の計測によって、下記のような基本的な層序を確認することができた。

第1層	暗灰色腐植土層	(15～40cm)
第2層	茶褐色砂質土層	(7～35cm)
第3層	黒色腐植土層	(0～40cm)
第4層	黄色粘土層	

前報告書では第4層を第3層Aと仮称しておいたが、全く異質の層位であるので改めておきたい。遺物は第1～3層に包含されていた。第4層には原則として包含されていないが、直上部に突き刺ったような状態で稀には発見されている。遺構は主として第4層の上面に形成されていたものが明瞭に確められた。第1層は耕土である。第2層は大小の河原石を含んでおり、高瀬川の運搬、堆積によるものと考えられる。また第1層から第3層へ漸移的な状態をもなしていた。したがって第1、2層の出土遺物は自然と人力による攪乱を受けていたものである。遺物の第一次的な包含は第3層にあるものと考えられた。しかしこの地層もレンズ状に錯綜しており、内部や下部に河原石が多量に認められたり、新旧の遺物が上下に逆転していたりするので、やはり河川によって攪乱されていることが知られた。第4層は火山灰の堆積によって形成された地層である。基盤となっている鳥海山の火山碎屑物の上部をなしているものと考えられる。なおこれらの地層は第3次以後の調査によってさらに細分された。また第1層の上にブルドーザーの運んだ盛土が0～50cm程度堆積して現地表面を形成していた。

発見された遺構は炉跡1ヶ所、住居跡2ヶ所、石組1ヶ所である。それらをそれぞれ発見順に名づけていった。第1号炉跡は第1トレンチ中央の拡張区の真中に出土したものである。第3層の上部に作られていたもので、楕円形を呈していた。北東をさす長軸は102cm、南西端の

幅は92cm、9～22cmの大小13個の河原石によって囲まれていたものである。木炭片がわずかに検出されたが、石の焼け方はそれほどひどくなく、短期間の使用と考えられた。この炉跡をめぐる住居跡を発見することはできなかった。後期末葉の時期と思われた。第1号住居跡は第1号炉跡を得た第1トレンチ中央拡張区の、第3層の下部から発見したものである。直径6～7mの円形に17本の柱穴がやや不規則に配列されていた。柱穴は直径14～42cmで深さは10～22cmであった。第4層に掘り下げて作られたもので、8本が根固め石を備えていた。中央部に木炭片が散乱して直径94cmの円形に河原石で簡単に囲んだ炉跡があった。この炉跡の1.2m北西に長径65cm、短径40cmの楕円形の石皿が設置されていた。扁平な自然石を利用しているが上面の凹みは直径16cmの円形を呈するものである。後期末葉の平地式住居である。第2号住居跡は後述する。第1号石組は第4、5トレンチの北部、第3層の下部に出土したものである。長径が1.45m、短径が0.55mの楕円形をしたもので、30cm前後の17個の自然石で囲み、石は第4層にしっかり埋め込まれていた。この石組は第2号住居跡の南西部に接近して発見されたものであるが、住居跡に関連する遺構とは考えられない。石組の東側から土偶の胸部が出土している。石組内部より特別な出土品はなかった。後期前半の石組であり、埋葬遺構かと思われる。

出土した遺物は第3章、第4章でも触れるので前報告書に紹介した状況を簡単に要約しておきたい。土器は完形品は3点であるが、破片は約15,000点に達している。完形品は小形のものばかりであり、河川の氾濫を受けたため復元の可能な土器が少なかったためである。これらは縄文時代後期～晩期にわたるもので、わずかに中期のものを含んでいた。精製土器と粗製土器に大別され、その数量比は1:3であった。さらに土器の形態的特徴によって分類した結果精製土器は21類、粗製土器は9類に類別された。それらを既知の土器型式を参考にして群別すると16群となった。第1群は大木10式、第2～10群は袖蓑式、宮戸Ⅰ式、大湯式、宮戸Ⅱa式、宮戸Ⅱb式、西ノ浜式、宮戸Ⅲa式、斎藤良治氏の第3類、宮戸Ⅲb式、第11～16群は大洞B式からA'式にそれぞれ比定することができた。縄文時代中期最末葉より後期、晩期にわたるほとんどの土器型式が網羅されるような状態で発見されたことになる。土器のほかにはまず572点の石器類が出土した。162点の石鏃をはじめとして石錐、石匕、石べら、打製石斧、不定形石器、磨製石斧、石錘、石剣、石棒、凹石、円盤状石製品、浮子石、磨石、石皿などである。石鏃は4つに、石匕は3つに分類することができた。さらに7点の土偶と柱状耳飾、スタンプ形土製品、有孔円柱形土製品、玉と垂飾品、土錘や円盤状土製品も出土している。自然遺物としては骨片、植物の種子、朱の原料らしい鉱物などが発見された。以上の出土品はいずれも上記の土器型式によって示される時期にあると思われるが、土偶などの特殊な例を除いて、伴出土器の決定ができないので詳細な検討が不可能であった。

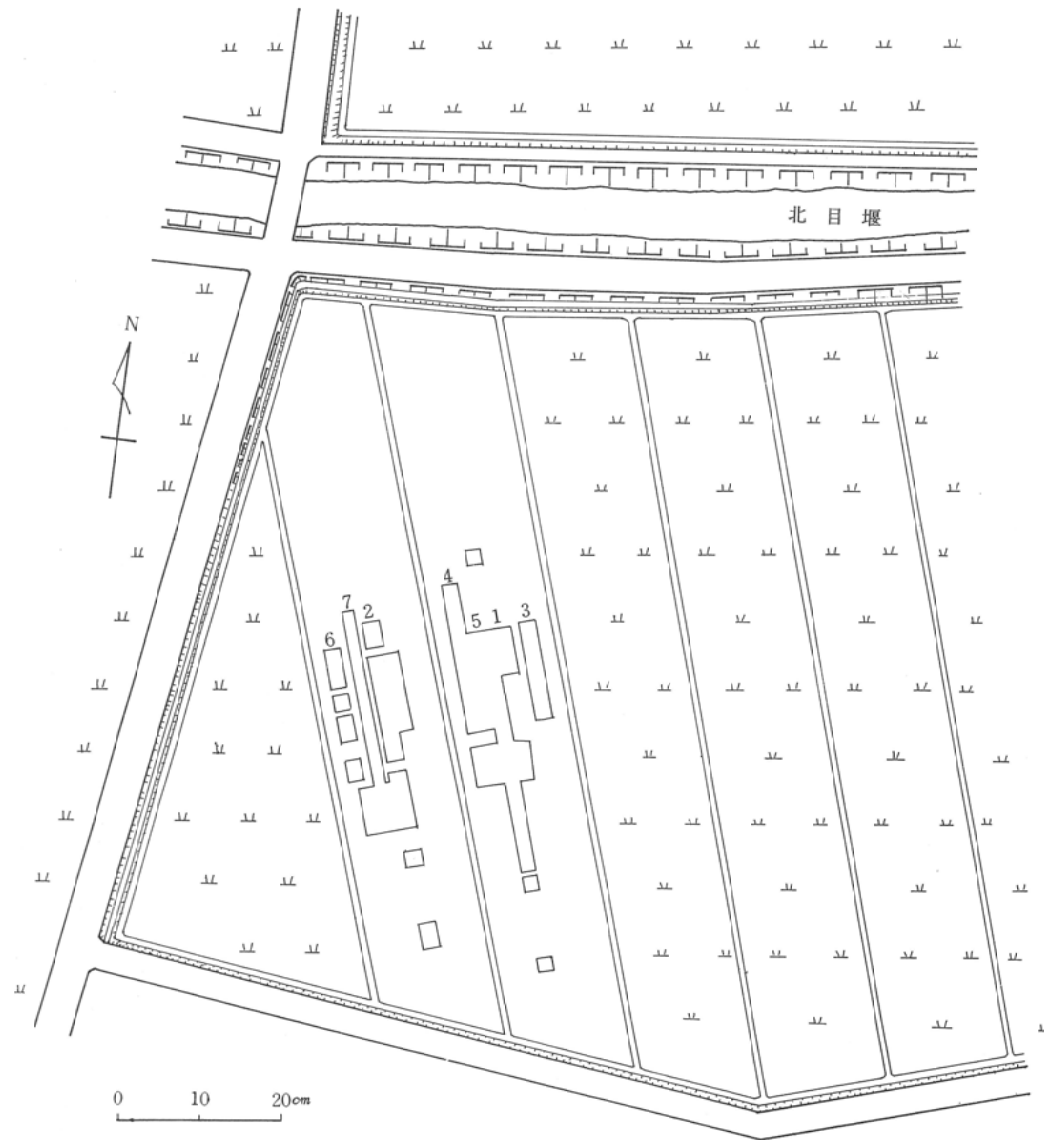
第1次・第2次調査によっておおよそ以上のような成果を得たのであったが、いろんな問題を提起したまま昭和46年度の調査を俟つこととなった訳である。

第3章 第3次・第4次・第5次発掘調査

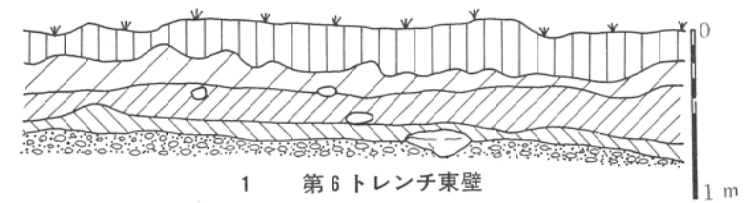
第1節 発掘調査の経過と層序

第3次から第4次・第5次にわたる発掘調査はそれぞれの調査が別個の特別な目的をもって実施された訳ではない。以前の2次にわたる調査で不備であったこと、問題として残されたこととさらに充実した資料を得るために継続して行なわれたのである。すなわち第2号住居跡を完掘して記録すること、より豊富な遺物を層位的な分析をすすめながら検討してみること、土器編年研究上の有力な資料を得ると同時に土器以外の遺物を伴出土器によって編年づけてみることに、せめて休耕してくれた限られた範囲内ではあるがその部分の全容に迫ってみることなどが大きな目標事項であった。しかしこれらが完全に達成されたとはいえない。むしろ目標達成率は5割程度といえようか。発掘期間中に雨天の多かったこともあるが、周囲の水田耕作が開始されているために湧水が激しく調査は困難を極めた。

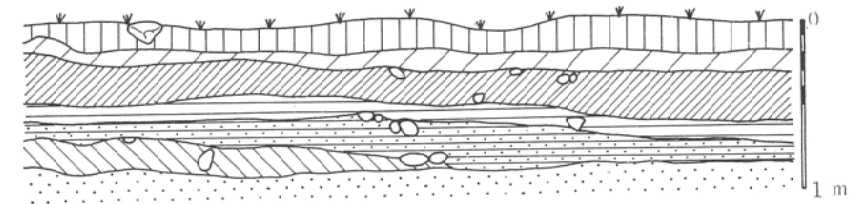
昭和46年度の調査では第3次に第6トレンチ、第4次に第7号トレンチとその南部拡張区が設けられた。この新たに設けられ調査された面積は81.9㎡になるので、神矢田遺跡の調査面積は合計で306.4㎡ということになる。まず第3次調査は第2号住居跡の全貌を明らかにし、第2号トレンチ拡張区を完掘することになった。そこで第2号住居跡の西半分を究明するために第1トレンチ北部の西側を東北に2m、南北に5m拡張したところ、その全貌が姿を見せ記録することができた。一方第2トレンチは以前の調査で遺物の包含状態が非常に良好であったのだが、出水がひどく水が抜け切らず結局深さ3cm程度剥いで終わった。遺構を破壊する心配から第2トレンチが調査できないので設けたのが第6トレンチである。第6トレンチは第2トレンチと平行してその西側3mの地点に設定したものである。南北24m、東西1.5mのトレンチで北より2mづつ区分して1～12区とした。このうち1、3、4、5、6、7、8、10区が掘った部分である。第3次調査では7、8区を除いた区を調査したのであるが、遺物包含層が思ったより深く、基盤の黄色粘土層は1mを越える深さをもっていた。6区の北壁に柱穴の断面が1本出土した。直径15cm、深さ25cm程で第3層中から黄色粘土層へ達していた。第4次調査では第7トレンチを設定した。これは第2トレンチと第6トレンチの間に平行して設けたものである。南北24m、東西1.5mで北より2mづつ区分して1～12区とした。このトレンチは1、2区を除いてはすべて掘っているが、時間的に包含層を完全に掘り上げることはできなかった。3、4、5区からは大小の河原石が環状に配石された一部であるかのように出土したので、西へ幅6mで1m拡張している。12区の南端からは地床炉らしい焼土が出土したので、その部分を中心にして南北6m、東西6mの拡張区を設定して調査が進められた。完形品を含めた遺物



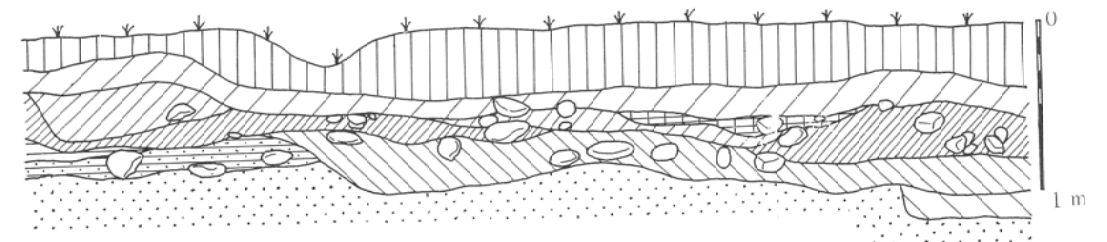
第3図 神矢田遺跡発掘地点測量図 (数字はトレンチ名)



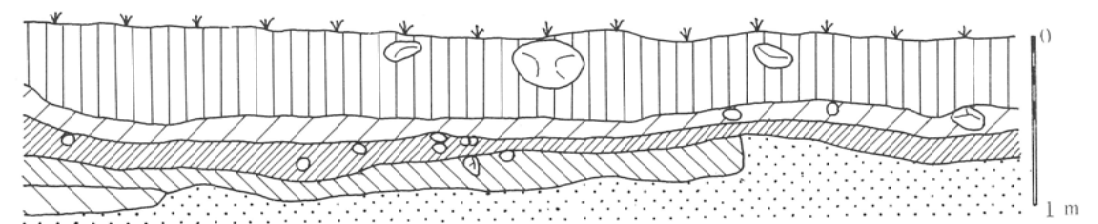
1 第6トレンチ東壁



2 第7トレンチ東壁



3 第7トレンチ南壁



4 第7トレンチ西壁

- | | | | |
|--|-------------|--|-------------|
| | 第1層 暗灰褐色腐植土 | | 第6層 暗茶褐色腐植土 |
| | 第2層 茶褐色腐植土 | | 第7層 灰褐色砂質土 |
| | 第3層 黒褐色腐植土 | | 第8層 黄褐色砂質土 |
| | 第4層 黒色腐植土 | | 第9層 砂礫 |
| | 焼土 | | 第10層 黄色粘土 |
| | 第5層 暗褐色腐植土 | | |

第4図 第6、7トレンチ地層断面図

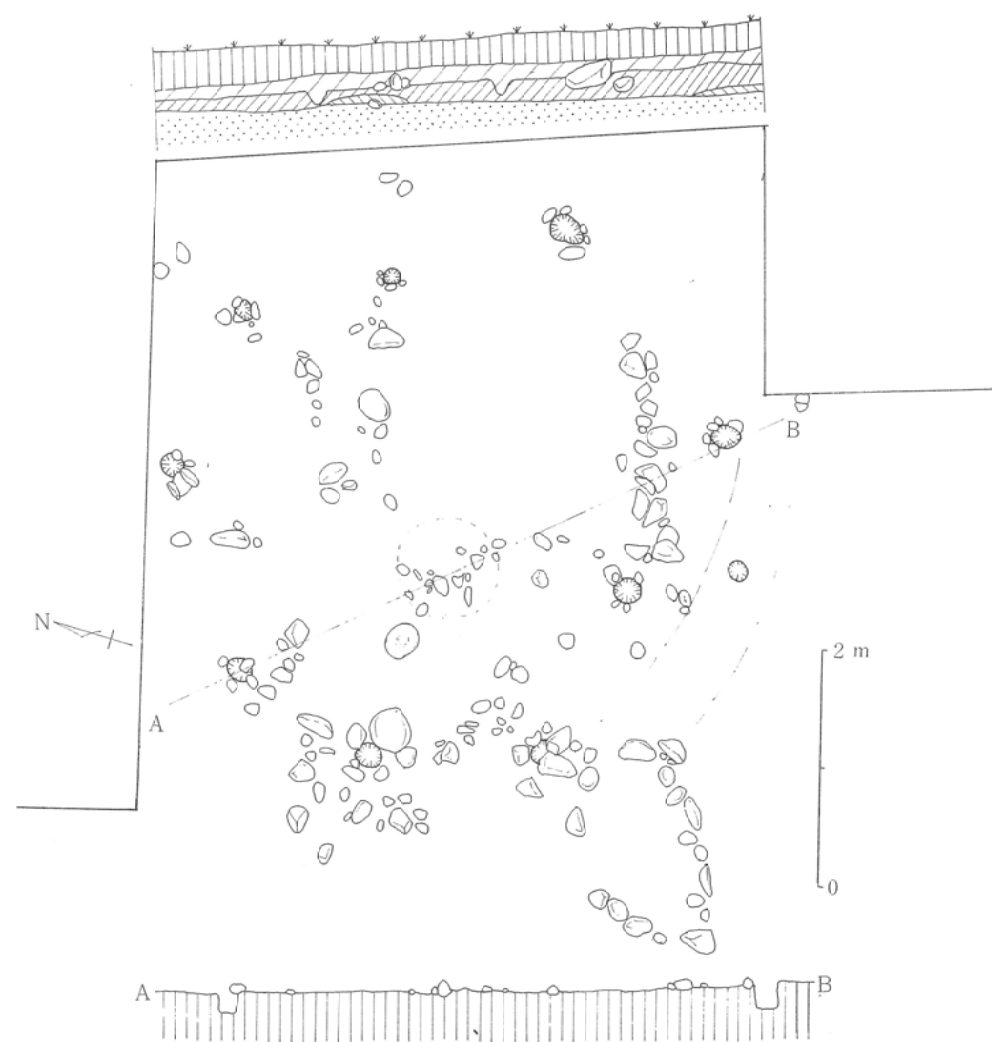
の最も多かったのがこの拡張区である。しかし湧水も最も多い所で真夏の炎天下でもトレンチ内に排水溝や、水溜め穴を作らねばならず排水ポンプが常時唸り続けた。調査は将に水と泥との闘いであった。そのため掘り下げるなかで土色の変化が把握できなかった。第6トレンチの7、8区は第2層より砂礫層にいたるまでの約40cmを5cmぐらいずつ7回に分けて、一枚ずつ剥ぎ取るように調査を試みた。結果は思ったより良好とはいえない。下部になるほど晩期の古い時期の土器片が多くなっていく傾向がうかがわれたが、後期の土器は少なく、他の遺物の時期を断言できるような出土状態とはいえなかった。第5次調査では第7トレンチ南部拡張区が基盤まで達していなかったため、包含層を全部調査するために計画したものである。だがあいにくの悪天候で以前にも増して水のため調査は難航した。その結果炉跡、柱穴などを発見し、最下包含層に加曾利BⅡ式や堀之内Ⅱ式などがあることを確認して発掘調査を終了した。

第2次調査までで発掘地点東部の地層を明らかにしておいた。今回西部の第6、7トレンチを調査したところ、その層序が基本的にはちがっていない。しかし南西部へ北東部から傾斜するうちで低い部分にあたることもあって、若干相違を見せている。また以前より包含層が厚くてよく観察すると色と土質に変化があり、細分することが可能であった。第4図に示したのは第6トレンチ7、8区東壁、第7トレンチ南部拡張区の東、南、西壁の層序である。このほか第5図石組遺構出土地の東、南壁、第6図第7トレンチ炉跡断面図、第7図第2号住居跡の東壁なども図示しておいた。いずれもブルドーザーによる盛土は削除しておいたが、第7トレンチの8区で46cm、12区で53cm堆積していた。層位の名称はその下部にある旧地表面から呼称していったものである。第1層は暗灰褐色腐植土層で9～57cmであり、これは耕土である。第2層は茶褐色腐植土層で5～23cmである。第1層と第3あるいは4層との漸移層であり、オレンジ色の鉄分を含んだ薄い直線が横に入っている。第3層は黒褐色腐色土層で0～44cmである。第4層は黒色腐植土層で7～32cmである。第5層は暗褐色腐植土層で0～21cmである。第6層は暗茶褐色腐植土層で0～29cmである。第7層は灰褐色砂質土層で0～33cmである。第8層は黄褐色砂質土層で0～17cmである。第9層は砂礫層であり、第10層は黄色粘土層である。第9層と第10層の厚さは確認できなかった。以上のように主として第7トレンチを標準として10層に区分することができたが、複雑に入り組んで堆積しており、他の地点とは第7トレンチ拡張区が様相を異にしている。第7トレンチ内でも東側と西側では錯綜した状態にあり、遺跡の複雑さを示している。東部が割合単純な層序であるのと対比的であった。遺物は第1～9層に含まれており、かなりの出土数を示しているが、第1、2層は人為的な攪乱が考えられる。第3～9層は河川による攪乱が認められた。第7トレンチ南部拡張区は結果として複雑な層位関係をとらえることができたのだが、調査中は出水のため泥の中に遺物をさがすような状態で土色変化を判断できず、地層別に遺物を整理検討することができなかった。今回調査した地区は上部攪乱層の中に後期の土器があり、下部の包含層は晩期の土器が多かった。これは遺跡の北東部に古い時期、南西部は新しい時期の居住地であったことを示している。ただ第7トレンチでも第8層以下は後期の土器が出土している。

第2節 遺構

新たに発見された遺構は住居跡1ヶ所、炉跡1ヶ所、石組1ヶ所である。これらをそれぞれ第3号住居跡、第2号炉跡、第2号石組と呼ぶ。なお第2号住居跡は西半分が前回未発掘であったが、第3次調査で完全な姿を見せたので再び説明を加えておきたい。

第2号住居跡（第5図） 第2号住居跡は第1、5トレンチ北部から出土しはじめ、東側を10m拡張した結果全容が確められたものである。10本の柱穴が直径4.6mの円形に配置されている。この柱穴は9本が根固め石を備えている。柱穴の直径は18～32cmであり、深さは20～30cmである。第3層から直下の第10層とした黄色粘土層を掘りくぼめて作っている。柱穴の間隔は1.20～2.15mである。柱穴列の南側に幅60cm程のベルト状に白色に近い粘土が発見された。



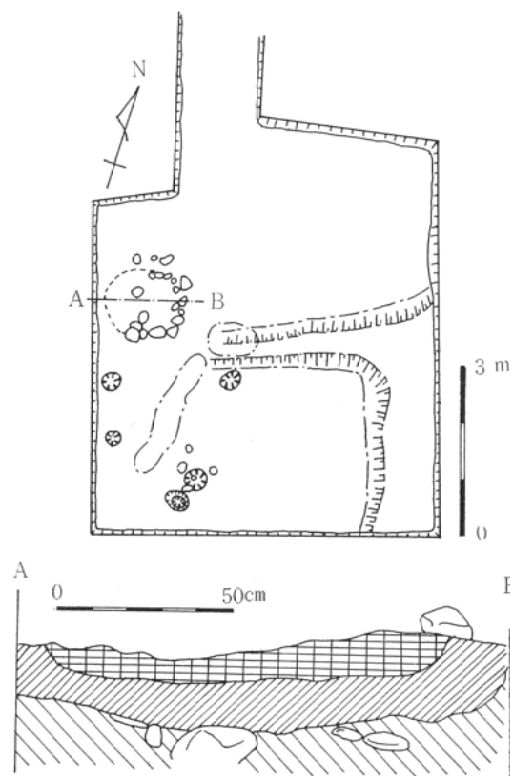
第5図 第2号住居跡実測図（右下第1号石組）

わずかに薄く検出されたのであるが、周壁の一隅かと思われる。この周壁は柱穴列のすぐ外側に形成されたもので、この周壁内を屋内と考えれば住居跡の内部は直径 6.2m の円形をしたものと考えられる。屋内の中央部やや西寄りに炉が作られている。真赤に焼けた土が直径90cm程の円形に広がっており、その中に焼けた河原石がいくつかころがっている地床炉の形式である。この炉跡の北西に石皿がある。長軸が28.2cm、短軸が22.7cmの扁平な楕円形の安山岩を原材として、上面に直径15cm、深さ 1.8cmの凹みが作られているものである。この住居跡の近辺から出土した土器は圧倒的に後期が多い。しかし柱穴内から大洞C₂式併行の土器片が出土したり、床面にへばりついた最も新しい土器を考えれば晩期後半期のものと考えられる。第2号住居跡は晩期後半期の平地式住居跡である。

第2号住居跡の南西部に出土しているのが第1号石組である。また東壁の地層図作成のため壁面を整理中2本の柱穴のようなものが発見された。第2層から第3層へ掘り下げた状態で1.55mの間隔で直径17cmと18cmである。深さは12cmと14cmである。稲杭とも考えられるのだが、第1層が落ち込んでいるものではなかった。住居跡の一部であった可能性もある。

第2号炉跡 (第6図) この炉跡は第7トレンチ12区に焼土が発見されたので、拡張し掘り下げた結果出土したものである。最初発見された焼土は第2層の直下に出現し、それは南西部にかけてかなりの広がりを見せた。厚さも15cmを越えていた。第6図はその一部を記したものである。この焼土の西側に焼石が半円状に配置されて発見された。直径1.15mで第2層と第4層に挟まれて設置されていたものである。同じ面で関連する遺構は発見できなかった。炉跡の南側に直線とカギ形の掘り込みが出ている。東側の深い部分で比高が30cm程度で、西側になるほど浅くなり消失してしまうものであった。炉跡のすぐ南側から、遮光器土偶の顔面が出土している。比較的大きな丸玉が出土し、土器は大洞C式が多かった。

第3号住居跡 (第6図) 第7トレンチ南部拡張区の南西部に発見されたものである。第4層の下部から5本

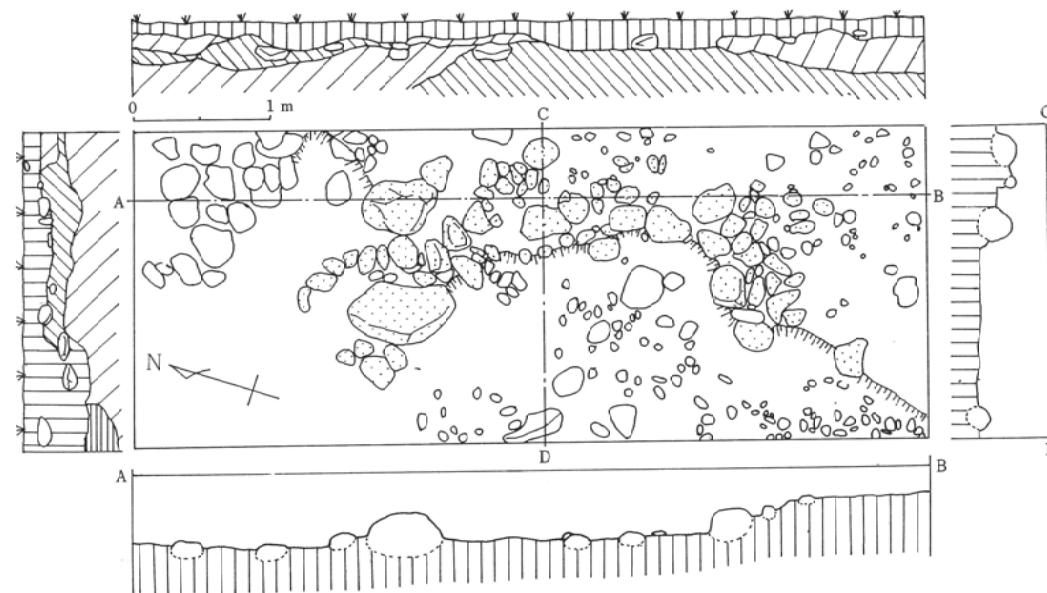


第6図 第7トレンチ南部拡張区実測図

の柱穴が不規則な配置で出土したのである。直径28~40cmの円形の柱穴で、深さは30cmを越えるものもあった。この柱穴がどんな形態の住居跡をしていたものか調査できなかったのだが、第2号炉跡の下層から発見されたのでこれと結びつけて考えることはできない。拡張区のさらに西、南部に住居跡は広がり、発見した部分は北東部の一隅ではないかと思われる。地層断面図の西壁、南壁の第7層が第10層へ掘り込んだ様子があるが、柱穴と直接結びつく遺構であるかどうか不明である。柱穴の中から大洞B式の土器が2片出土しているので、第3号住居跡は晩期初頭と考えられる。

第2号石組 (第7図) 第7トレンチの北部3、4、5区から出土したものである。第1層を掘り下げていくうちに頭大から一抱えもある自然石が続出し、その配置が環状の一部とされたので記録に残したものである。図の点を打った石が同水準にあったもので、自然石が約1mの幅で西部に開く円弧状を呈していた。開口部は2.45mであった。石の内側には落ち込みが見られ比高20cmであった。この遺構らしいものは第7層の上部に形成されていたもので、石の間から出た土器片により後期後半と思われる。西側への継続はなかったがこの部分だけ農道のため残されたい。周囲の地層にも人為的に動いた形跡があるので意図的な配石と思われるのだが、切断して調査することができなかった。性格的にも不審点が多い。

以上が今回の調査で判明した遺構である。このほか第6トレンチ7区、第3層上部より、幅47cmで比高13cmの粘土を含んだ円弧状の帯が発見されている。これも追求できずに終わった。



第7図 第7トレンチ北部第2号石組実測図

第3節 遺物

1 土器

発掘された土器は、第1次～第2次調査のときよりも多く、完形品20点、破片約23,000点におよぶ。第1次～第2次調査のときは縄文時代中期末より晩期末にいたる各時期の土器であったが、第3次～第5次調査では、さらに弥生時代にかかると思われるものを加えている。また、第1次～第2次調査のときは、縄文後期のものと縄文晩期のものが圧倒的に多くみられ、両者とも大体同じ位の数量であったが、第3次～第5次調査では後者の比が圧倒的に多くなっている。以上の二つの点は、土器の分布傾向を示している。第1次から第5次にわたる調査で試みたトレンチは南北に長く、それを第1次～第2次調査では北東の部分掘り、第3次～第5次では西南に掘ってきたわけであるが、北目堰に近い方に後期の地点があり、北目堰から南下したところに晩期の地点があり、さらに南下すれば弥生の地点があるのでないと思われる。このように地点のちがいがあっても加味して層位的に遺物を採集したが、地層の撓乱、発掘中の湧水等の諸条件が悪く、分類の基準にはなり得なかった。したがって、土器の特徴に従って分類を行なった。その分類にしたがってこれらの土器の特徴を述べたい。

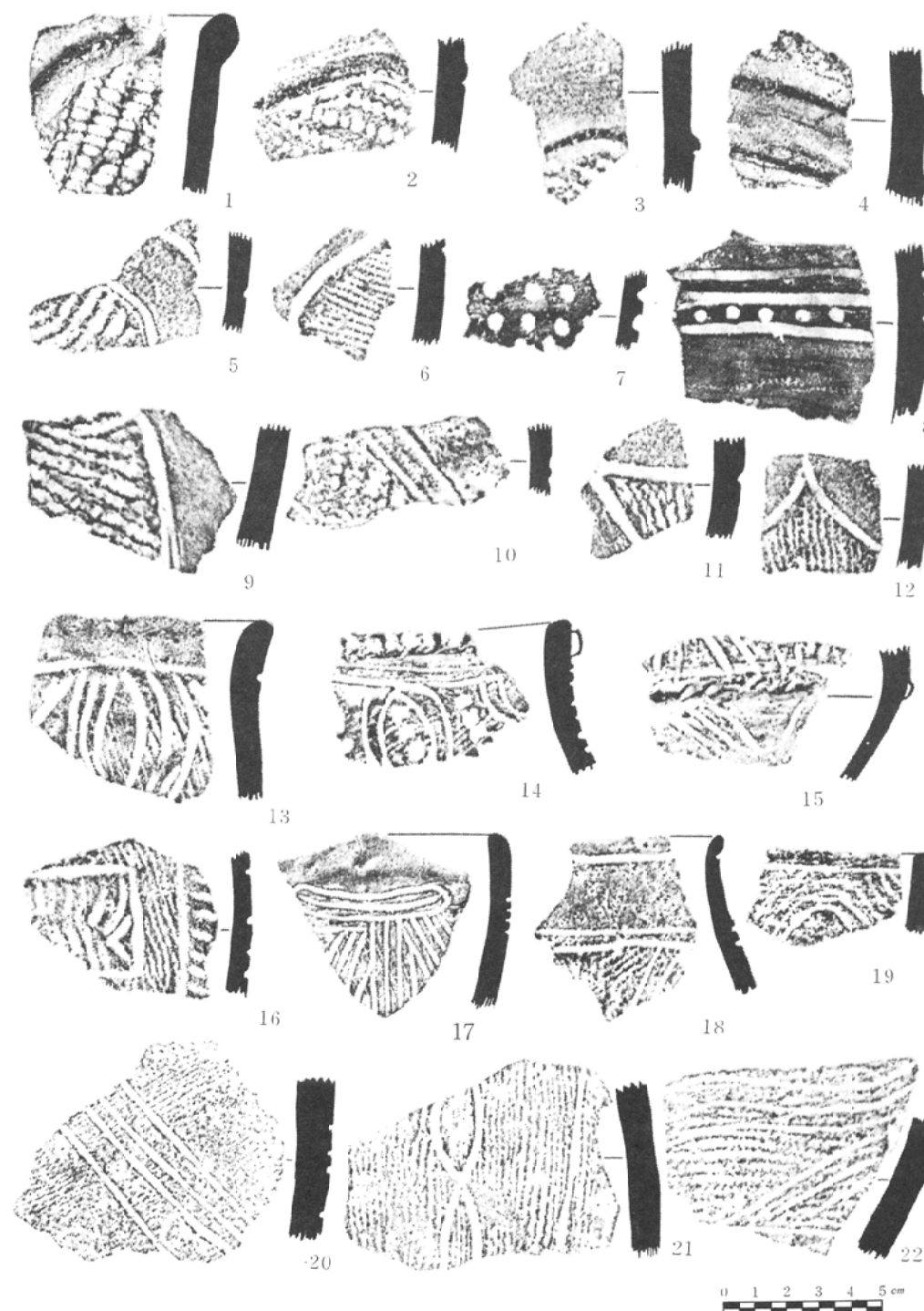
精製土器

第1群土器 (第8図1～6、9～12) 非常に厚手の磨消縄文のある土器である。

a 類土器 (第8図1～6、9、10) 太い大粒の縄文を用いた、厚手の磨消縄文土器である。器形は、良好な資料がなく明らかでない。口縁が直上もしくは外反する深鉢とみられる。器壁にさらに粘土を貼付して厚くした複合口縁もみられる。体部上半には磨消縄文による曲線に富んだ文様が展開される。縄文は、LRの太い原体を縦位、斜位、横位に回転施文して磨消縄文のあり方に二種類あって、複合口縁と同じく粘土を加えて無文部分をつかったもので稜線に縄文を囲むもの(1～4)と、太い沈線を加えてすりけしたもの(5～6、9、10)とがある。稜線は末端で鱗状の形態をとるものが多い。割と質の良い土器である。

b 類土器 (第8図11、12) 資料が少なく、全体が明らかでないが、あげておく。器形は、口縁がわずかに外反、外傾する長胴の深鉢であるとみられる。口縁に稜線による鱗状突起が耳のように施されるものもある。縦位に回転施文された撚糸文を地文とする磨消縄文を有する。用いられた沈線は太く、大きく曲線を描いて施文される。

第2群土器 量的に極めて少なく、小破片のみで、全体を知るにあまりに希薄であるが、第1次～第2次調査の出土品も加味すれば一つのタイプとして考えられる。平縁および波状口縁の深鉢らしい。体部上半に、縦横に隆線を走らせ、稜線による“窓ワク”のような文様区画を構成しているのが特徴的である。地文は斜縄文であり、片方の“窓”だけ全面すり消すものと両方の“窓”の縄文の傾きを反対にして羽状にするものとがある。縄文は細かなLR撚りが多い。また、あるものは稜線に縦の刻みを加えたものもある。第1群土器に比べてや



第8図 土器拓影(1) — 第1群土器(1～6、9～12)、第3群土器(13～22)

や薄手である。

第3群土器 (第8図13~22、第9図23~39、第19図214) 地文の撚糸文に独特な曲線的な沈線文を加えて文様とする土器である。

a 類土器 (第8図13、17~22、第9図23~29、第19図214) 器形はいくつかみられる。口縁の外反する深鉢、口縁の直上する鉢、口縁がやや内口する甕など。口縁は平縁もしくはゆるやかに波うつ大波状口縁であり、5つの波頂をもつものもある。口縁の波頂が、3つか4つぐらいのものが多いようである。舌状に上に張り出す形のものが多い。いずれも口縁部に沈線を施して、上部を磨消して一種の磨消縄文をつくっている。口縁から何条かの垂線をおろしたり、8の字を重ね続けたような連鎖文をおろしたりして、それに同心円状の、あるいは渦巻状の沈線文を加えて文様を展開させている。214のように縦のモチーフをもちつつ展開するのであろう。口唇部に一条の沈線を加え、溝状にしているものもある。木の葉痕、網代状痕を有する底部もある。撚糸文は縦位、斜位に回転施文している。

b 類土器 (第8図14~16) 口縁が内彎気味に直上する。口縁部の大きい甕形土器である。

文様構成はa類と同じであるが、口唇部近くおよび胴部上半にかけて隆線を貼付し、窓ワクのような稜線を構成し、その上に円様による刺突や斜めの刻みを加えている。また、文様内部に刺突文を加えたものもみられる(14)。さらに隆線は貼付されないが、刻みを加えるなど似た施文をしているものもみられる(16)。

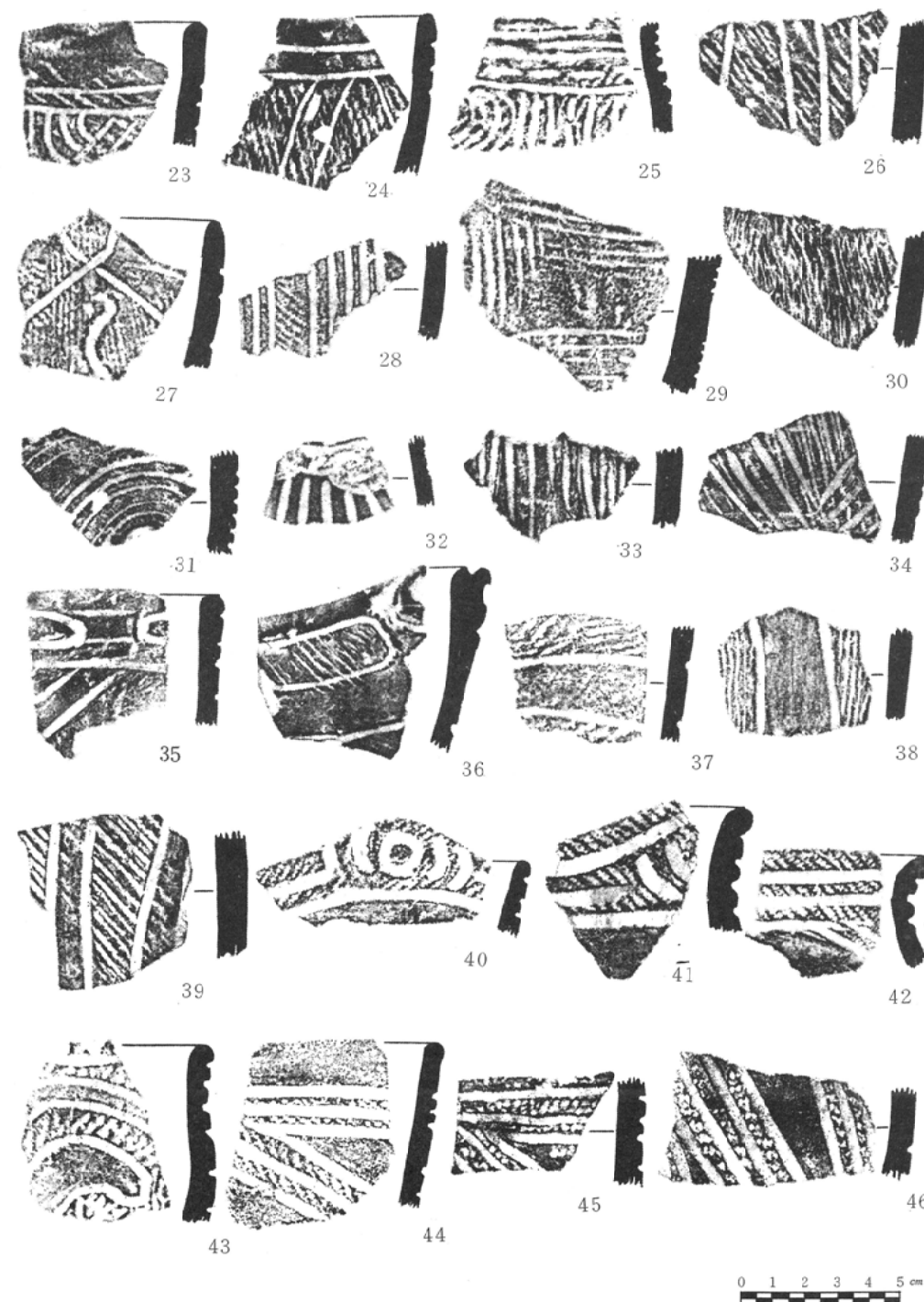
c 類土器 (第9図31) 器形は不明確であるが、鉢形と思われる。器面を無文のままで、その上に目のあらい櫛歯状の工具で円状などの曲線文を施している。

d 類土器 (第9図32~34) 器形は深鉢形であるとみられるが、詳細不明。器面一面にヘラ状工具による沈線文を施している。ヘラ状工具というよりもむしろ細めの棒状工具を束ねたようなもので施文したかもしれない。殆んど縦に上下にひっかいたような文様となっている。

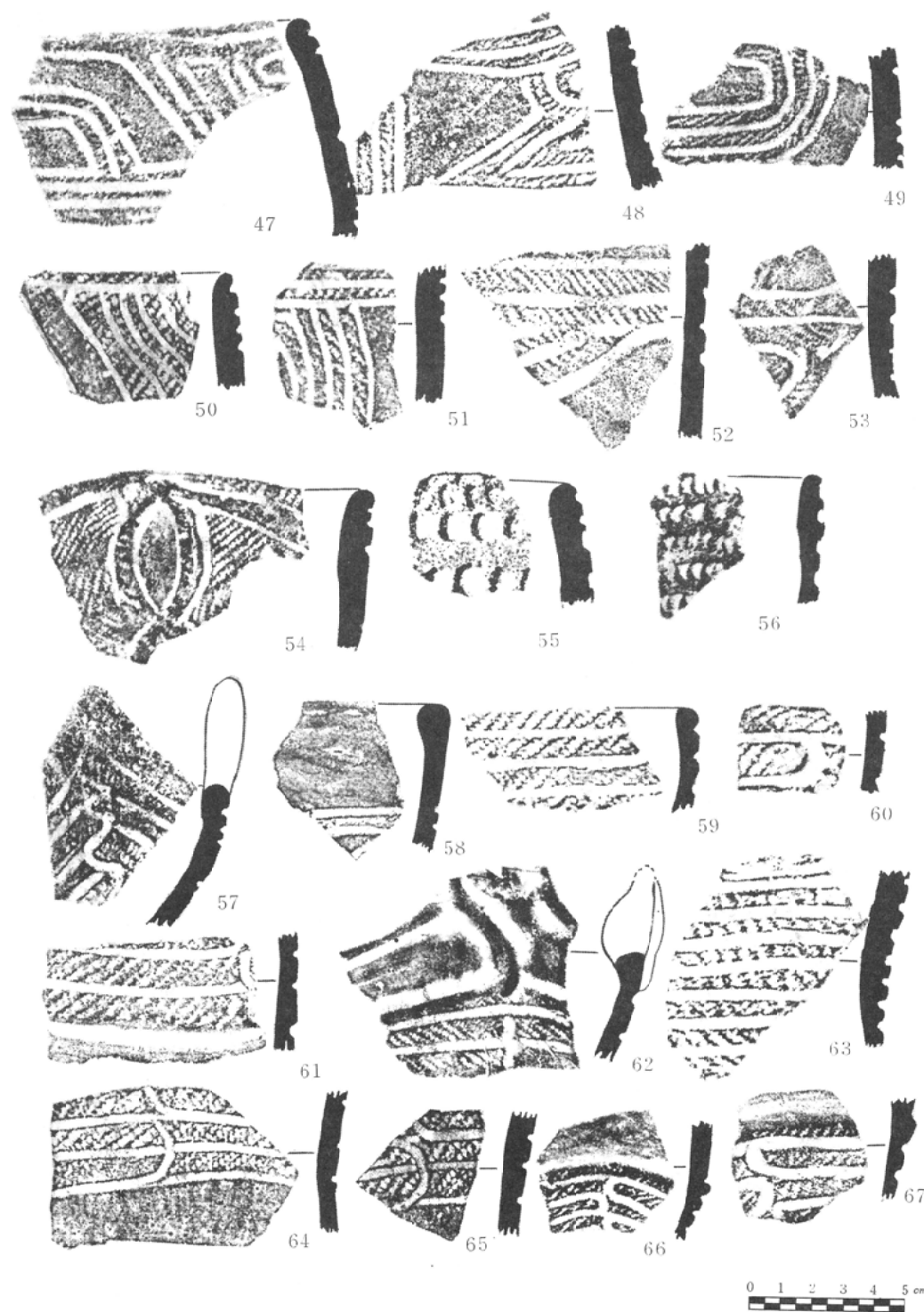
e 類土器 (第9図35~39) 器形は平縁または大波状口縁の鉢とみられる。口縁は直上、やや外傾し、そのまま下降して底部へすばまる。口唇部に沈線をもつ(36)ものがある。地文は細い原体の撚糸文で、縦位、斜位に施文し、帯状の磨消縄文がみられる。器面に沈線を施してから撚糸文を加えたのか、無文面にも撚糸文がつくなど、磨り消しは不完全である。文様は口縁部周辺では横に展開し、体部では縦に展開するものが多い。沈線はa類とほぼ同じ位の太さである。

第4群土器 (第9図40~46、第10図47~53、55、56) 太い2~3条の沈線によってできる磨消縄文手法による紐線文を有する土器を中心とする土器群である。

a 類土器 (第9図40~46、第10図47~53) 器形はいくつかある。平らな口縁がやや外傾もしくは外反する深鉢および鉢、ゆるやかに波をうつ大波状口縁のやや外反する甕形に近い深鉢、平らな口縁が内反する甕(47、48)、さらに中間報告書で前述したようなトックリ形に近い壺などがみられる。壺・甕はともかく、鉢形土器は全般にバケツ形に逆「八」の字状に



第9図 土器拓影(2) — 第3群土器(23~39)、第4群土器(40~46)



第10図 土器拓影(3)―第4群土器(47~53、55、56) 第5群土器(57~67)

開いた器形が多いようである。文様は、磨消縄文の縄文帯にさらに2~3条の沈線を加えて、あたかも縄文の紐を器面に貼付したようにみえる紐線文によって構成されている。文様帯がきちんとつくられ、口縁と胴部の紐線文の内部を、いろいろ変化する紐線文や花芯状の同心円文で構成している。紐線文はLR捻り単節の斜縄文を施し、それに沈線を加えて磨消縄文と、その縄文帯をさらに加えて(2~3条)縄文の紐のような文様をつくる。縄文原体はLRが多いが、RLもある。短い原体を回転施文したものが多くようである。なお、紐線文の結節部とか口縁の波頂の下あたりの要所要所には同心円文、渦巻文や円棒状の工具による刺突文(52、53)を加えることが多い。器厚は割と厚手である。

b類土器 (第10図55、56) 半粗製の甕形土器で、平らな口縁が内反し、肩部でかるく張りだす厚手の土器である。56は薄手で器形も若干異なってくるようであるが、胎土、焼成、色調がb類土器に共通している。文様は器面いっばいに連続刺突文を横走させており、太い円棒のような工具を斜めに刺突して、工具をおこすことによって盛り上がった胎土が瘤状を呈するものである。わずかなので詳細はわからない。

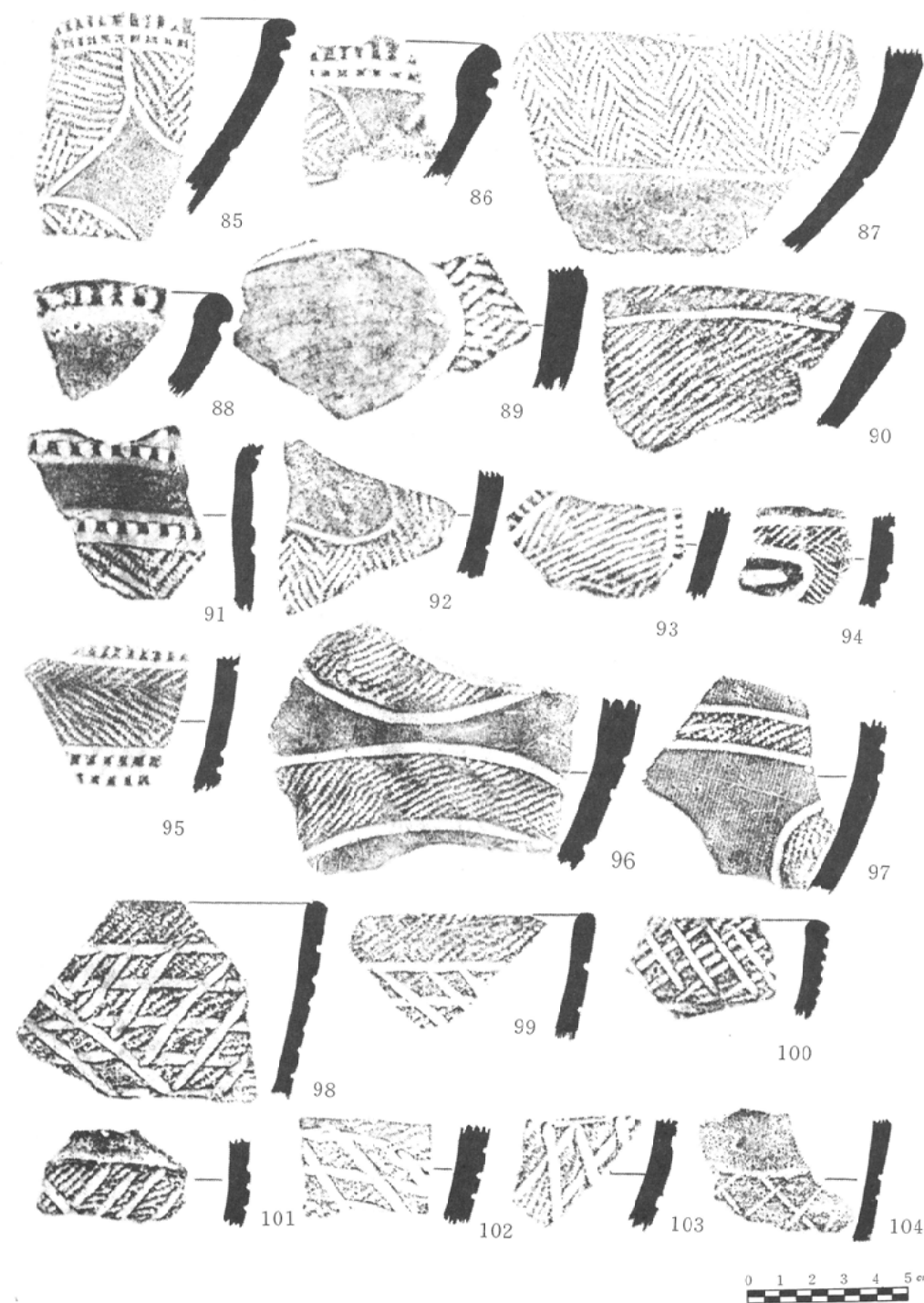
第5群土器 (第10図57~67、第11図69~84、第12図98~104、第19図215、216) 肥厚した口縁が外彎する鉢形土器を中心とするものである。

a類土器 (第10図57~67) いわゆる「S字状沈線文」を有する土器である。肥厚した、平らな、あるいは大波状の口縁が外彎する鉢形土器が多い。壺形土器もあるようであるが小さな小破片からは何ともいえない。器形に非常に特色があり、大波状口縁の鉢などは、あたかも五弁花状を呈するものとみられる。即ち、それだけ口縁が上にむかって大きく開いた器形になるのである。小さな鉢は平縁が多く、盃状になると思われるものもある。次に口縁が内側に肥厚しているのも顕著である。文様は、独特な磨消縄文であり、数本の縄文帯を口縁部~頸部に横走させ、他は全面きれいに磨り消してしまう。沈線は太く深く施されるものが多く、口縁部から頸部にかけて「ハチマキ」か「ホウタイ」のようにめぐる縄文帯を一定間隔をおいてS字状の沈線で切っている部分などは目立っている。このS字状沈線文にはいろいろ種類がある。クランク形のような切った部分が直線的で離れているもの、十字形のような切った部分が直線的でくっついたもの(62)、S字を横にくっつけたように切った部分が円弧を描きながらも離れているもの(64~67)、蛇行状にS字をたて連結したもの(57)などがある。さらに細かくわけることができ、今のところ器形等との関連は明確になっていない。縄文はLRの原体を短かくしたような施文法が多く、横位に回転施文している。底部は、第4群までのものとちがひ、きれいにみがかれたものがあるなど、ていねいに手を加えたものが多い。底部のスソが外へはりだし気味のものが多くようである。口縁突起がつくものも多いようであるが、良好なものが少ないので詳細はわからない。胎土、焼成のとても良い土器である。

b類土器 (第11図68~84) この土器は第1次~第2次調査のときは少量であったので、第4群土器に関連が強いと考えられたが、以後の調査でa類土器とともにかなり出土したの



第11図 土器拓影(4) — 第5群土器(68~84)



第12図 土器拓影(5) — 第5群土器(98~104)、第6群土器(85~97)

で特徴がはっきりしてきたものである。器形は鉢形土器である。平縁もあるが、大波状口縁が多い。口縁には口縁突起がつき、その形状も様々である。半割した小突起(68)、動物の耳のような大突起(69)、テーブルのような大突起(70)の他に、円柱のようにそそりたつ大突起や一見して土偶のような感じのする得体の知れない形状のものまである。口縁部は内側に肥厚し、極端なもの(73)までみられる。口縁は全体として大きく上に開くが、口唇に近い部分がたつので外彎した形態をしめしている。頸部でかるくしまり、胴部でふくらみ下降する器形とみられる。文様は体部上半に独特な文様を展開させている。口縁部および胴部に縄文帯を走らせ、その間に非常に曲線に富んだ磨消縄文を展開させている。磨消縄文はLRの撚のきつい短かい原体を太い沈線で区画した内部に転がし、その上に沈線に沿って連続刺突文を加えている。連続刺突文は殆んど工具を真上から突き刺して施文している。時には一列に施文する原則を破って三列に施文したりもする(83)。磨消縄文の磨消部分はていねいにみがかれている。口唇に沈線が加えられ、一条の溝をなすものもあるが少ない。胎土・焼成ともにa類と同じく大変良い。

c類土器 (第19図215) 1片のみであるが器形・文様を知るのに一応十分なのであげておく。器形は、口縁が内側に肥厚する、平縁の口の開いた鉢である。外面は一面に無文研磨化され、一条の太い沈線が口縁に施されている。文様の主体は内側にあり、口唇を内側に刻み、その下に稜線や沈線内に連続刺突文を施したり、LRの単節斜縄文を施したりしている。器内面に文様を施すことに大きな特色をもっている。

d類土器 (第12図98～104、第19図216) これもこの第5群に加えるべきか否か迷った土器であるが、器質や一部の文様から一応この仲間に加えたものである。量的にもあまり多くない。やや内側に肥厚気味の平らかな口縁がかかる外彎して大きく開く鉢形土器である。やや薄手である。文様は、口縁に磨消縄文手法による幅の広い縄文帯をめぐらし、その上に太い沈線で、横位・斜位の平行沈線文を加えて格子状となしたものである。216のような格子状をなさないものもある。縄文はLRの短かい原体(しかも撚りのきつい)横位、ときには斜位に回転施文している。胎土・焼成良く、かたくひきしまった土器である。

第6群土器 (第12図85～97、第13図105～107) 羽状縄文を有する土器を主とする一群である。

a群土器 (第12図85～89、91～93、95) 器形は第5群土器と共通する。口縁が内側に肥厚する、大波状口縁が花卉のように上に開く鉢である。壺や注口らしい破片もあるが、器形を確認するには不十分である。文様は口頸部を走る連続刻目文と、その間に展開される非常に曲線に富んだ磨消縄文である。磨消縄文は太い沈線で区画された内部に縄文を残すように行なわれるが、その縄文は殆んどLRの単節の短かい、撚りのきつい原体を縦位・横位に回転施文させて羽状となした羽状縄文である。連続刻目文は口縁に施される場合をのぞいて単独で文様とはならず、磨消縄文の磨消部分と縄文部分の境線のように施文されている。刻目の施文法は、沈線を施した際に用いたヘラ状工具を器面に直角にあてて刻んでいるものであ

る。胎土・焼成ともに第5群土器と同じく大変良好な、かたくひきしまった土器である。

b類土器 (第12図90) 一見して粗製土器とまちがしやすい土器であるが、胎土・焼成もよく、深鉢形にはならない。器形は、肥厚した口縁が大きく開く鉢形である。文様は斜縄文に一条の沈線を加えたもの(90)、磨消の帯縄文がある。後者の場合は口唇近いところに一条の沈線を施し、沈線の上下いずれか一方を磨り消して、帯縄文を横に走らせるだけである。沈線の上を磨り消した場合は頸部近くにもう一条の沈線を加えて幅の広い帯縄文とし、沈線の下を磨り消した場合は下の方にもう一本の帯縄文を施すこともある。縄文はLRの原体(短かいもの)を横位、斜位に回転施文している。

c類土器 (第12図96、97、第13図105～107) このタイプの土器はこの第6群の中に加えべきかどうか迷った土器であるが、器質の上から(胎土・焼成)この第6群に一応加えたものである。資料が少ないためである。器形は口縁の内側に肥厚する、口が開き頸部でかるくしまり、胴部でふくらむ深鉢であろう。文様はきれいに仕上げた磨消縄文であるが、縄文部があたかもテープをまきつけたかのように、同じ幅の縄文の帯が曲線的に展開される。縄文はやはり短かいLRの原体を用い、横位・斜位に回転施文している。胎土・焼成ともに大変良好で、かたくひきしまったいい土器である。

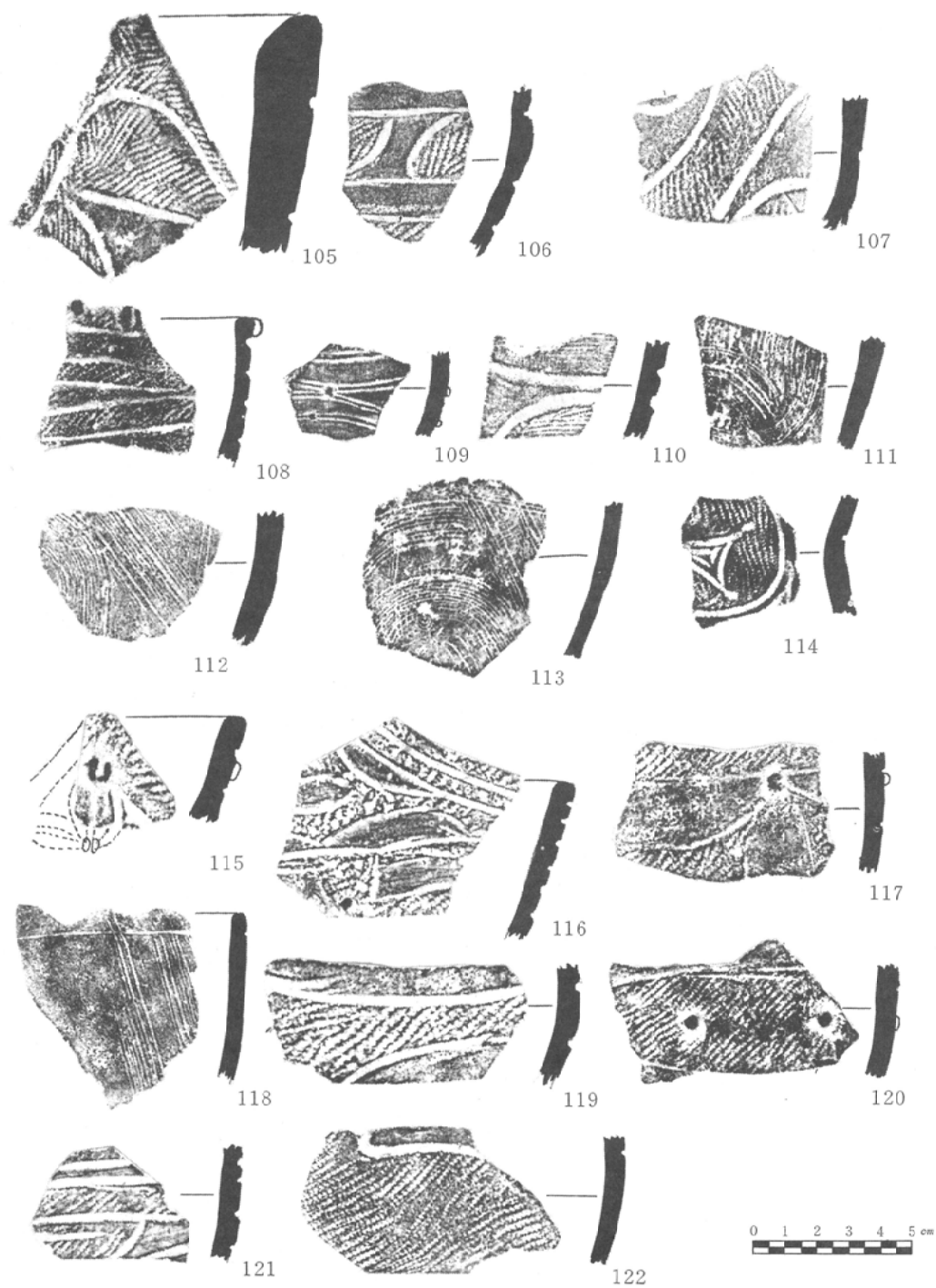
第7群土器 (第13図108～114) いわゆる入組磨消縄文のうち曲線に富んだ文様をもつ土器を中心とする一群である。

a類土器 (第13図108、114) 器形は、内側に肥厚する波状口縁が外彎して上に開き、頸部で軽くしまり、胴部でふくらむ深鉢形であろう。縦に半割した張瘤小突起が口縁につくとみられる(108)。文様は磨消縄文による入組文であるが、第6群にみられたテープをまきつけたような帯縄文(108)と極めて曲線に富むコの字形にもどる入組文の二種類ある。破片も少なく、保存状態のよくないものばかりなので、不明な点が多い。縄文はやはり短かい単節の原体を横位・斜位に施文している。原体はかなり細くきつく撚られたものであり、細かな縄文が施されている。

b類土器 (第13図109) 器形は注口もしくは壺であろう。全面研磨無文化された器面に細い半載竹管状の工具で入組文を描いた文様に小さな張瘤小突起を貼付している。この文様は皮膚をつめのようなものでひっかいたときはれ上がってくる、「みみずっ張れ」のような感じのするものである。小さな彎曲の大きい器形の土器に多く用いられるようである。量的に少ない。薄手で器質が良い。灰褐色を呈する。

c類土器 (第13図110) 器形は、資料が少なくはっきりしたことはいえないが、a類土器と同じであろう。文様は、磨消縄文手法による「すりけし刷毛目文」であり、全体として入組文を構成するとみられる。薄手で器質も良い。

d類土器 (第13図111～113) 器形は資料が少なく、不明であるが、おそらく平らかな口縁が外彎気味に直上し、全体が半割卵状の器形になる深鉢と思われる。文様は刷毛目文であるが、111のように入組文を構成するものがある。ここにあげた三片は胎土・焼成の上でも共



第13図 土器拓影(6) — 第6群土器 (105~107)、第7群土器 (108~114)、第8群土器 (115~122)



第14図 土器拓影(7) — 第9群土器 (124、126~130、132)、第10群土器 (133~143)

通している。器質はa類・b類ほどではないが、比較的良いほうである。

第8群土器 (第13図115~122) いわゆる弧線連結文を有する土器を中心とする一群である。

a類土器 (第13図 115~ 117、118) 器形は大波状口縁が上に開いた、頸部で軽くしめる胴張りの深鉢である。文様は磨消縄文手法による「弧線連結文」である。縄文はLRの短かな原体を横位・斜位に回転施文したもので、細かい縄文である。磨消部分が弧線の外にくるものと、弧線の内にくるものと両方ある。沈線は比較的細いが、太いものと細いものの両方ある。弧線と弧線の結節部などに張瘤小突起を貼付したものが多く、器質は普通である。

b類土器 (第13図 120~ 122) 器形はa類と同じような器形である。文様は磨消縄文による入組文であり、縄文部分に張瘤小突起を貼付するものが多く、縄文は短かな細かいLRの原体を横位に回転施文している。器質はやはり普通である。

第9類土器 (第14図 124~ 132) いわゆる刻目文を有する土器群である。

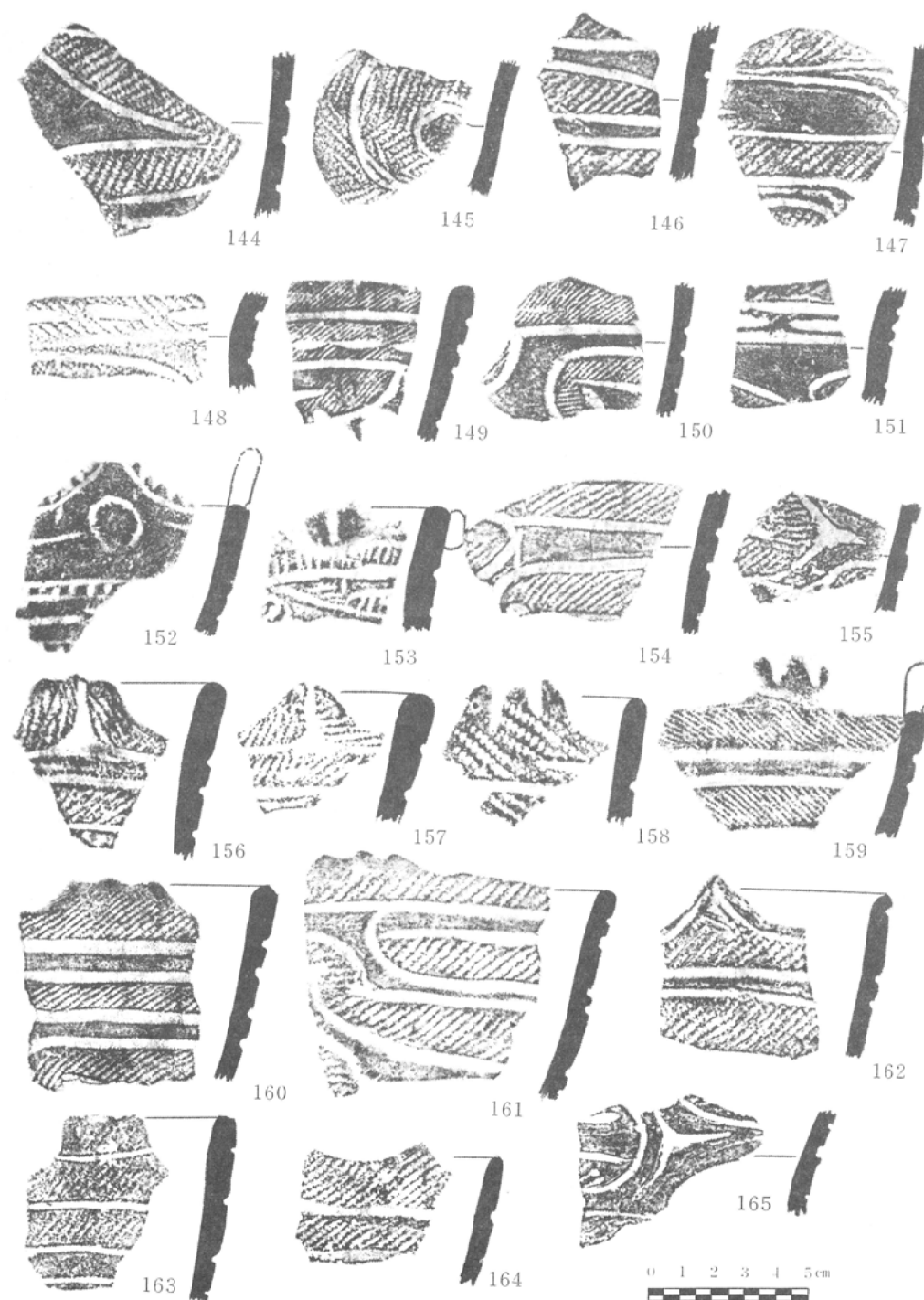
a類土器 (第14図 124、126、129、130) 器形は平縁か、平縁に張瘤小起突、とした小波状口縁の、わずかに外彎気味に直上する、半割卵形の深鉢である。文様は口縁部に施こされた平行沈線の間に連続刻目文を加えたものである。連続刻目文は比較的間隔をおいて刺突して施文したものである。

b類土器 (第14図 125、127、128、131、132) 器形はゆるやかに波をうつ大波状口縁の頸部でしめる胴張りの深鉢とみられる。文様は、磨消縄文手法による入組刻目文であり、二線間にa類と同様な刺突風の連続刻目文が加えられる。128のように弧線連結文とも入組文とも区別がつけられないような文様を伴うものが多い。127のように入組の結節に張瘤小突起を加えるものもある。

第10群土器 (第14図 133~143、第15図 144~157、第19図 218) 磨消縄文による入組文土器のうち、三叉状陰刻や張瘤小突起を有する土器を中心とする一群である。

a類土器 (第14図 133~ 137、第15図 152、153) 第9群土器と大差ないような特色をもつ土器である。器形は、大波状口縁・平縁の外傾もしくはやや外反気味に口の開く、頸部で軽くしめる胴張りの深鉢である。磨消縄文手法の入組文内部に連続刻目文を施している。刻目文は第9群のものとはちがい、刺突されたものではなく刻んだもの、刷毛目を加えたようなものである。入組文はかなり扁平化している。153のように大形の半割された張瘤小突起を施したものもある。152のように外彎する口縁や刺突風の刻目文をも第9群の要素を強くもちながらも新らしく、円文とそれに続く沈線のような要素を加えたものもある。

b類土器 (第14図 138~ 143、第15図 144~ 151、154~ 157、第19図218) 器形は、外反もしくは外傾する口縁が上にむかってやや開く、頸部で軽くしまり胴張りとなる深鉢である。口縁は、わずかに肥厚し、張瘤小突起を口縁突起としてたくさん配置している。口縁小突起は大小交互に配置している。どちらかといえば上に尖がっているのが、疣状といってもよい。大きいほうの突起は二つに分割される。口縁から胴部にかけて縄文帯によって区画された文



第15図 土器拓影(8) - 第10群土器(144~157)、第11群土器(158~165)

様帯があり、磨消縄文による入組文が施されている。縄文は殆んどLR撚り単節の原体を横位に回転施文したものである。口縁突起の下部（156～157）や入組文の結節部などに三叉状の陰刻を疾のように加えたものや、入組文の結節部など比較的大きな張瘤小突起を貼付したものが多く、張瘤大突起は縦長のもの（143）、丸く大きいものに刺突を加えてドーナツ状にしたもの（141～142）などがある。また刺突を一つづつ加えたもの（140）や円文を縄文でまいて魚眼風にしたもの（145）などもみられる。さらに第8群・第9群的な要素を残しているもの（218）もみられる。頸部文様帯に点線文を施したものもある（148～151）。

第11群土器（第15図 158～165、第16図 166～181、第19図 217、219～223） “三叉状入組文、を有する土器を中心とする一群である。

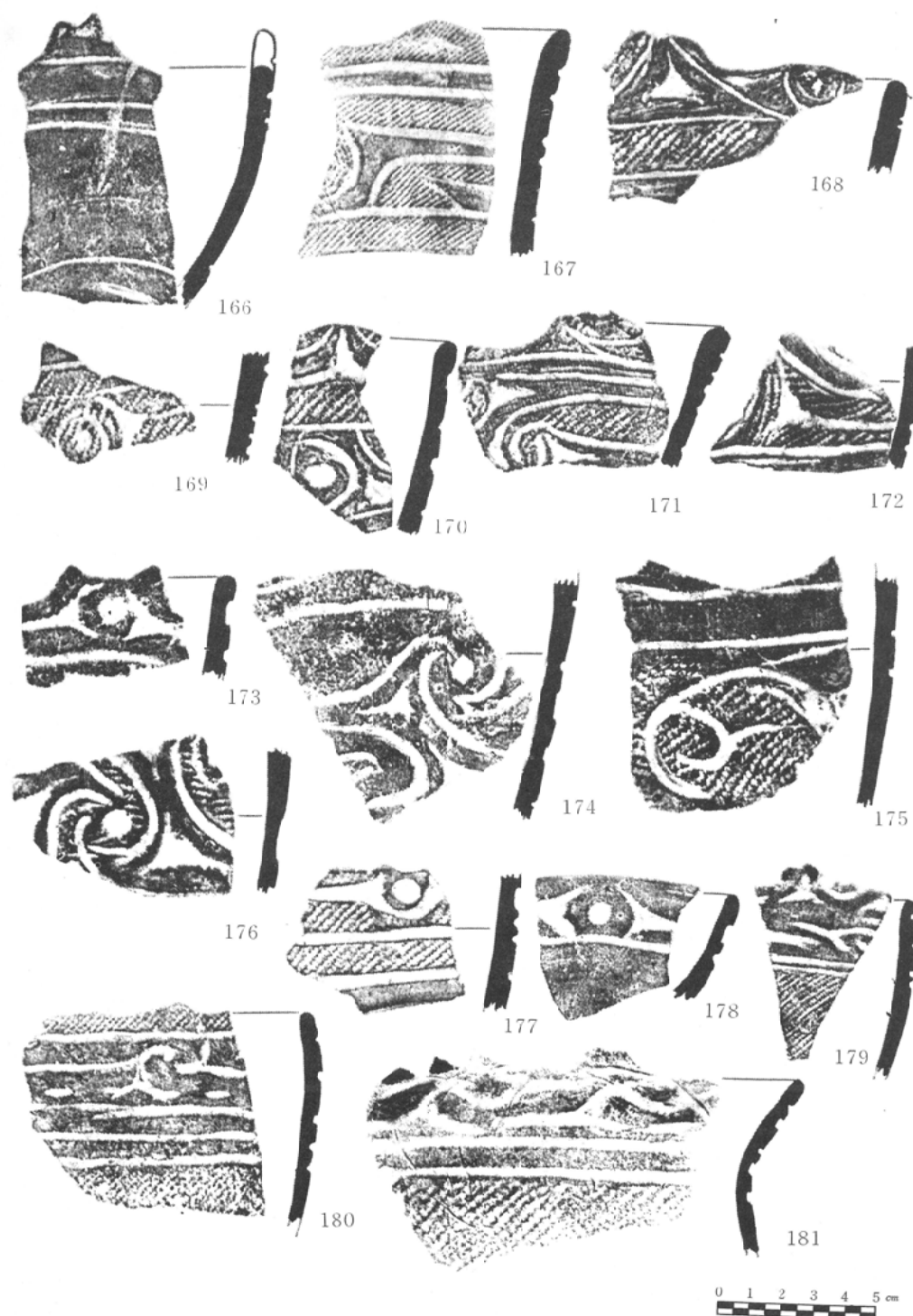
a 類土器（第15図 158～165、第16図 166、第19図 217） 器形は、口縁に疣状小突起を有する口縁の開いた、頸部で軽くしめる胴張りの深鉢である。166は台付鉢であろうか。口縁の疣状小突起は大きなものは二～三分割されるか、突起の下部に一本の沈線を加えるか、八の字沈線を加えるかなどでバラエティーに富んでいる。口縁部には縄文帯によってはさまれた口縁部文様帯があり、扁平化された磨消縄文による入組文が施される。入組文の結節部には三叉状陰刻もしくは三叉文を加えている。縄文はLRの短かな原体を横位に回転施文したものが殆んどであるが、158、159のようにRLの原体を用いたものもみられる。

b 類土器（第16図 167～172、175～176、第19図 219、220） 器形は、ゆるやかに波をうつ小波状口縁の直上もしくは外傾する、半割卵形の鉢および深鉢、全体が球を上下に圧縮したような壺や注口である。縄文帯よりなる口縁部文様帯には磨消縄文による入組文が施文されている。口縁の波頂の下部や入組文の結節部には三叉文や玉抱き三叉文が加えられている。220のように魚眼状文を加えたものもある。縄文はLR原体を回転施文したものが殆んどである。器質は良く、焼きしまっている。

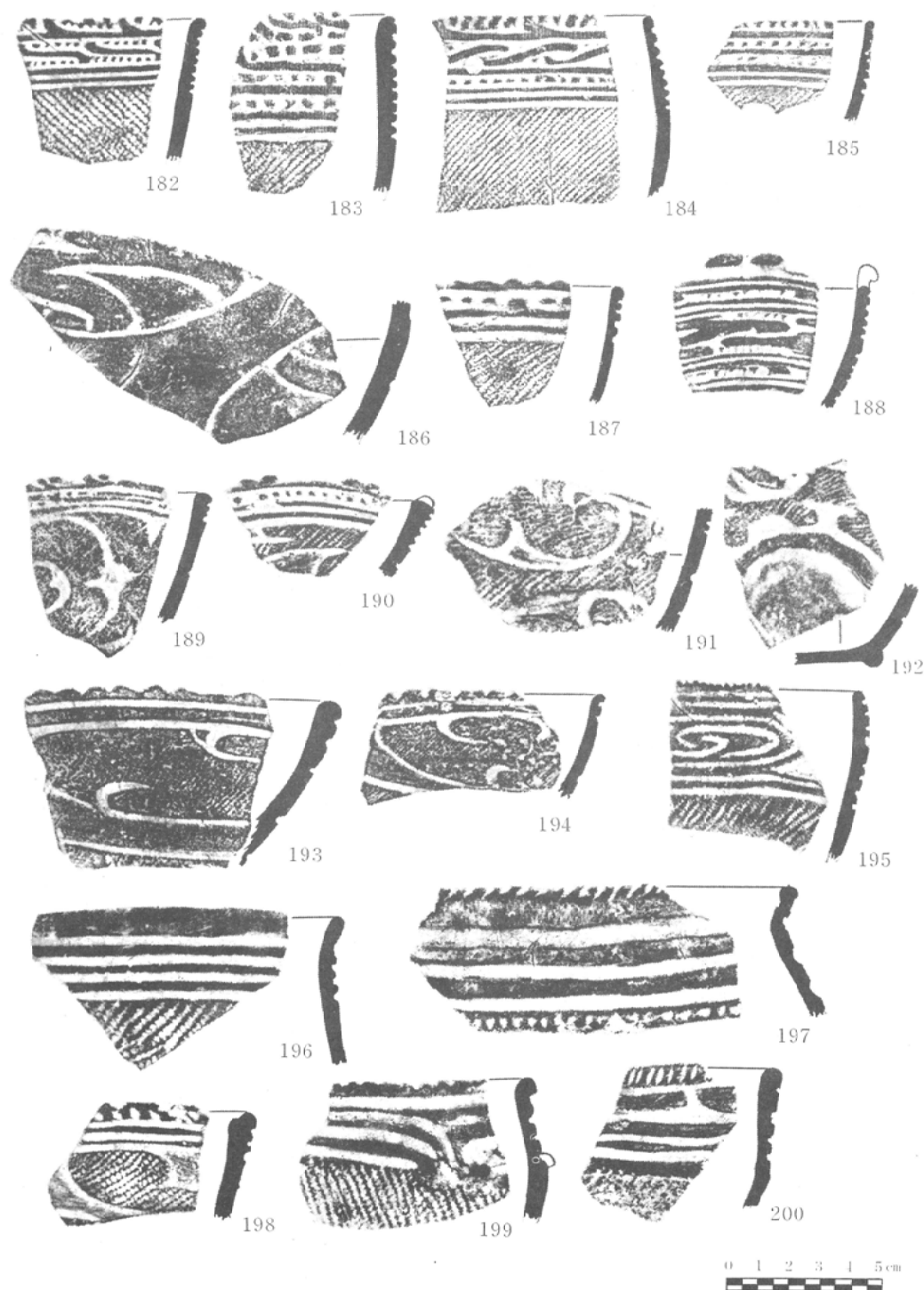
c 類土器（第16図 173、178、第19図 223） 器形はほとんど平縁の台付浅鉢、もしくは埴形に近い小形鉢である。平縁であるが、一部分だけ口縁突起をつけたような、あるいは刻みを入れたような小波状になる。全体が無文研磨化される。台付浅鉢には口縁部に玉抱き三叉文がつくものもある（174、178）。

d 類土器（第16図 179～181） 器形は口縁が内反する半割卵形の深鉢、鉢と口縁の外反し、頸部でしまり、やや肩の張る鉢がある。文様はすべて幅の狭い口縁部文様帯に集約され、三叉状入組文が施され、頸部以下の体部には横位に回転施文した斜縄文が一面に施される。縄文は殆んどLRの原体を用いたものであるが、羽状縄文を施すこともある。

e 類土器（第19図 221、222） 本群土器は他の遺跡のことも加味すれば非常にバラエティーに富んだ文様をもっているが本遺跡では、連鎖文を有する鉢（221）や小波状口縁の深鉢（222）などはa類～d類に伴ってくるものである。



第16図 土器拓影(9)―第11群土器(166～181)



第17図 土器拓影(10) — 第12群土器(182~186)、第13群土器(187~192)、
第14群土器(193~200)

第12群土器 (第17図 182~ 187、第20図 224~ 229) いわゆるシダ状文を有する土器を中心とする一群である。

a 類土器 (第17図 182~ 185、187、第20図 224、226) 口唇を刻むようにしてつくられた小波状口縁の直上または内反する、やや肩が張り出す鉢形土器である。注口土器や香炉型土器(226)もある。鉢形土器では2~3条の平行沈線によって区画された口縁部文様に様々なシダ状文を施している。左傾の末端のかみ合うものとかみあわないもの、右傾の末端のかみ合うものとかみあわないものの四種は最低あげられる。本類で多いのは、左傾の末端のかみ合うものと右傾の末端のかみあわないものである。体部には単節の斜縄文が横位に回転施文される。LRのものが多く、RLのものもある。また羽状縄文もある。撚りがきつく整然とした施文法である。結節のあるものもある。226のようなすかし彫りの香炉型土器もある。薄手で胎土も選ばれ、焼成も良好である。

b 類土器 (第17図 186、第20図 225、228、229) 器形は様々である。ソロバン玉形に近い、肩の張った注口土器、大形の壺、平縁の平べったい埴、小波状口縁のこしき形土器、などである。いずれも全体が無文化されている。注口土器や壺の場合は浮彫手法によるK字文などの文様が加えられ、研磨されている。229のこしき形土器の底部の穴が不規則であるが目立つ。他のこしき形土器では規則的に穴をあけているが多い。

c 類土器 (第20図 227) 器形は平縁の鉢、浅鉢が多い。227は皿といってもよいほどの浅鉢である。全面にいてねいに斜縄文を施すのが特徴である。LRまたはRLの横位に回転施文したものである。

第13群土器 (第17図 187~ 192、第20図 230~ 233、235) “X”字状文、を有する土器を中心とする一群である。

a 類土器 (第17図 187、第20図 233) 小波状口縁の半割卵形の鉢である。また、口縁の内彎する肩の張った鉢である。2~3条の平行沈線によって区画された口縁部文様帯には連続刻目文が施されるが、まだ第12群土器の要素が残って浮彫的である。体部にはLRの撚りのきつい原体を横位に回転施文した斜縄文がめぐっている。

b 類土器 (第17図 188~ 192、第20図 230~ 231) 口縁に二ヶ単位の小突起を配する平縁もしくは、単なる平縁の口の開いた埴形土器、皿形土器である。口縁に2条の平行沈線によって区画された口縁部文様帯には連続刻目文が施される。体部文様帯には磨消縄文によるX字状文等が施文されている。また、量的にはあまり多くないが、189や231のような鉢形土器に四つ葉のクローバーのような“四つ葉文”を施したものもある。縄文はLRの短かな原体を用いたものが多いが、施文のしかたは、第12群土器よりややくずれた方法になっているもの(230)もある。薄手で小さく精巧に仕上げられた土器が多い。

c 類土器 (第20図 232、235) 器形は球形に近い胴部をもつ細頸頸壺である。口縁は大きく開く。頸部の直径は底部の直径に比してかなり小さい。文様は全面無文研磨化され、朱を塗る(235)もの、縄文を施したもの(232)などがある。

第14群土器 (第17図 193～200、第18図201～206、213、第20図234、236～241、第21図 242～247) “平行沈線文。を有する土器を中心とする一群の土器である。

a 類土器 (第17図 193～195、198、第20図 239、第20図 240～241) 器形は平縁の口の開いた浅鉢皿、鉢である。口唇には刻みが加えられている。浅鉢形は器面いっばいに二条の平行沈線によって区画された文様帯があり、鉢形はやはり二条の平行沈線によって区画された口縁部文様帯があり、曲線に富んだ雲形文などの磨消縄文が施されている。縄文は殆んどLRの撚りのきつい短かな原体を用いて横位、斜位に施文している。198や239のように口唇に一条の溝を走らせるものもある。口縁の内側にも施文する(239)こともある。

b 類土器 (第17図 196～197、199～200、第22図 269～270) 器形は平縁の外反し、頸部でしまり肩部の張る半粗製の深鉢である。口唇部に刻目を施すものが多い。口頸部に集約された文様帯は平行沈線文でおおわれている。その平行沈線文を疣状陰刻で区切っていく文様を施すものもある(199～200、270)。体部はLRの斜縄文を横位、斜位に施文しているものが多い。

c 類土器 (第20図 236～238) 器形は平らな口縁が直立し、底部へやせて続く鉢・小型残鉢などがある。口唇には刻目を加えたり、小突起をつけて沈線を加えたりしたものが多い。また、頸部にはいく条かの平行沈線文を施し、張瘤小突起を配置したものがある(236)。体部にはLRの斜縄文を施文しているが、施文法は必ずしも一定していない。

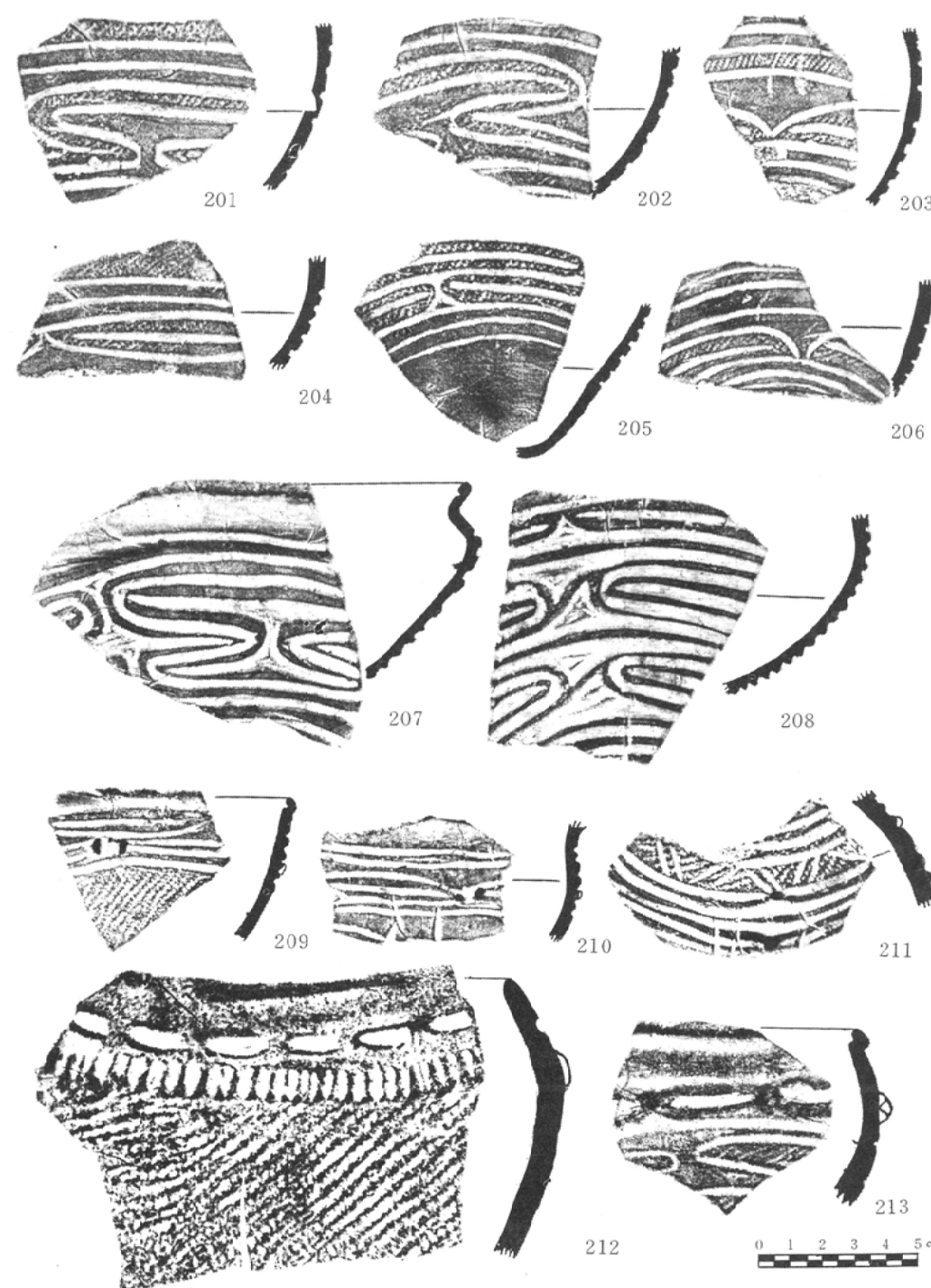
d 類土器 (第20図 240～241、第21図 247) 器形は平縁の開いた口縁を有する球形の広口壺である。文様は殆んど細かな単節の斜縄文で、LRの原体を横位、斜位に回転したものが多い。頸部や底部近くに一条の沈線を加えたものもある(247)。

e 類土器 (第18図 201～206、第21図 242～246) 器形はいくつかある。小波状口縁の台付浅鉢(243)、平縁の浅鉢(244)、口縁把手をもつ小波状口縁の鉢(242) やや頸の長い扁平球状の壺(245) などである。文様は口縁部より胴部上半にかけての主文様帯には工字文風の磨消縄文を施している。縄文は細かな短かい原体を用い、殆んどLRである。底部は、平底、あげ底、台付があるが、中には底部を内から刺突して底部外面をつきだした脚付もある(205、244)。薄手で、よく粘土を選び、焼きも固く、きれいに研磨されている。

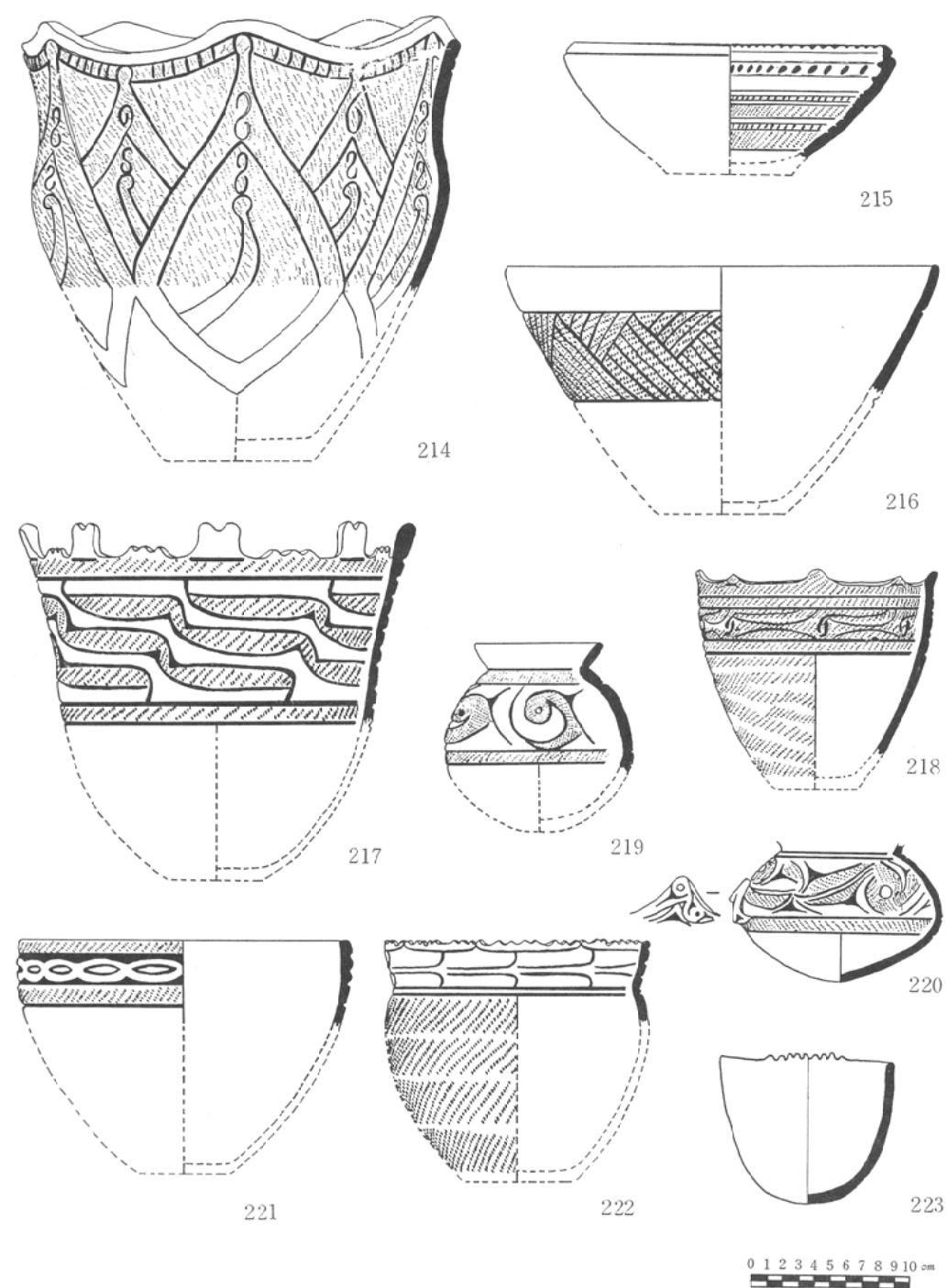
f 類土器 (第18図 213) 器形は、平らな口縁の内彎する鉢または浅鉢形の土器であろうか一片のみで不明な点がある。文様は肩部に貼付された連鎖状文、胴部に横に長い曲線的な磨消縄文がみられる。縄文はLRで、沈線は太い。あまり器質が良好とはいえない土器である。

第15群土器 (第18図 207、208、第21図 248、249、251、252、254) “工字文。を有する土器を中心とする一群である。

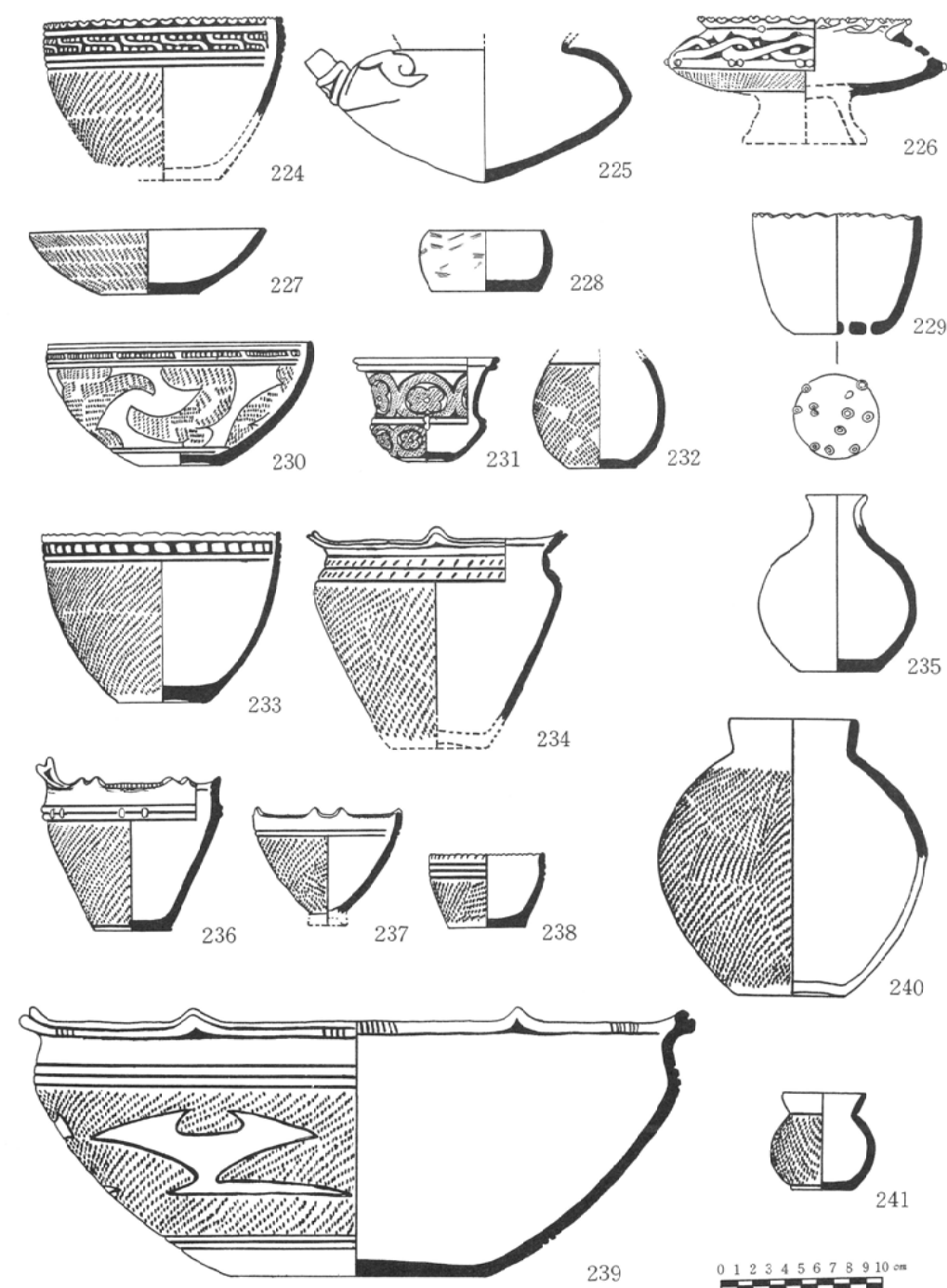
a 類土器 (第18図 207、208、第21図 249) 器形は、口縁の外反し頸部でしまり肩部で張り出す鉢・壺などである。文様は、体部を中心に平行沈線で区画された文様帯に、曲線的



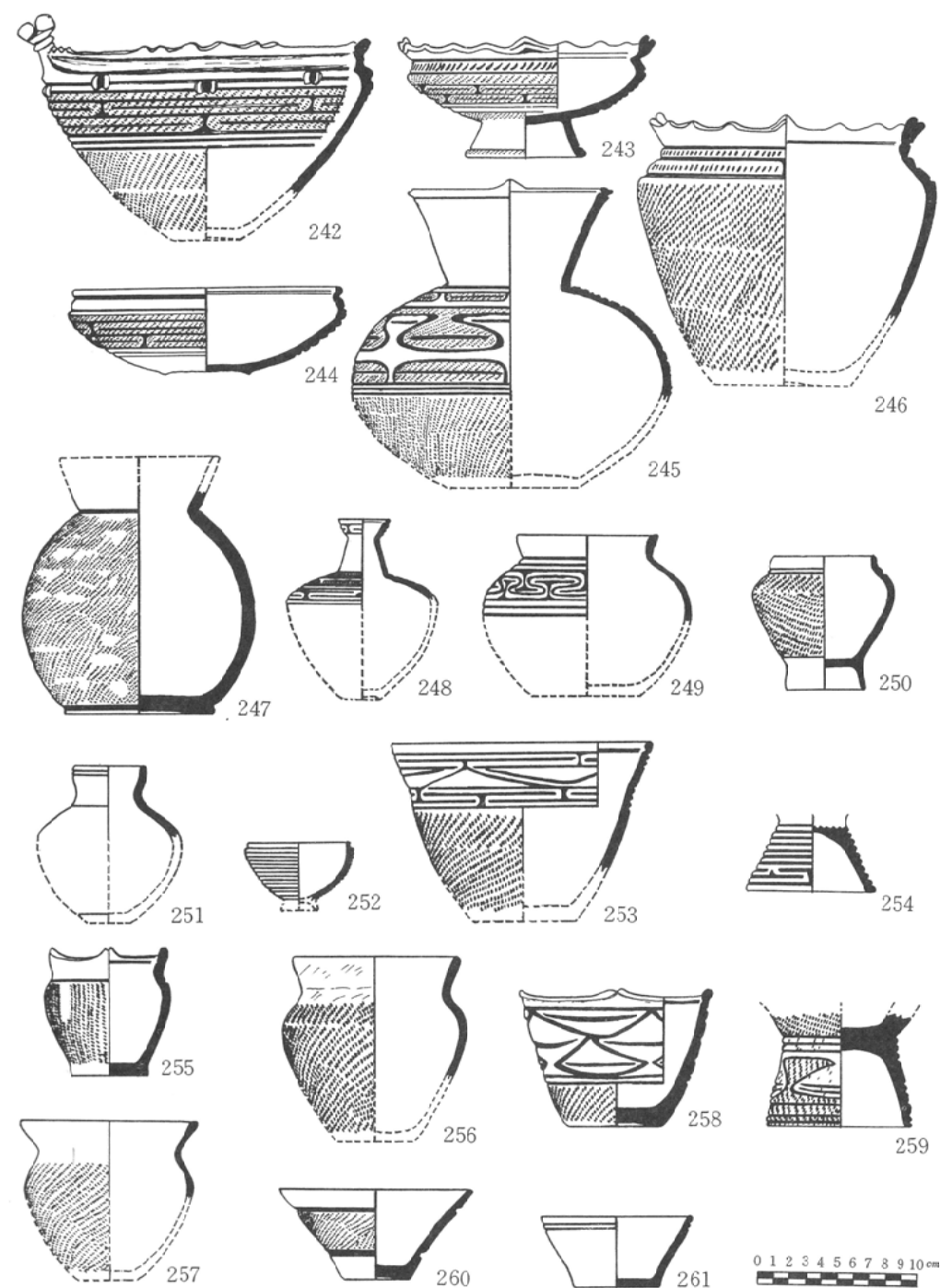
第18図 土器拓影(II) 第14群土器(201～206、213)、第15群土器(207、208)、第16群土器(209～211)



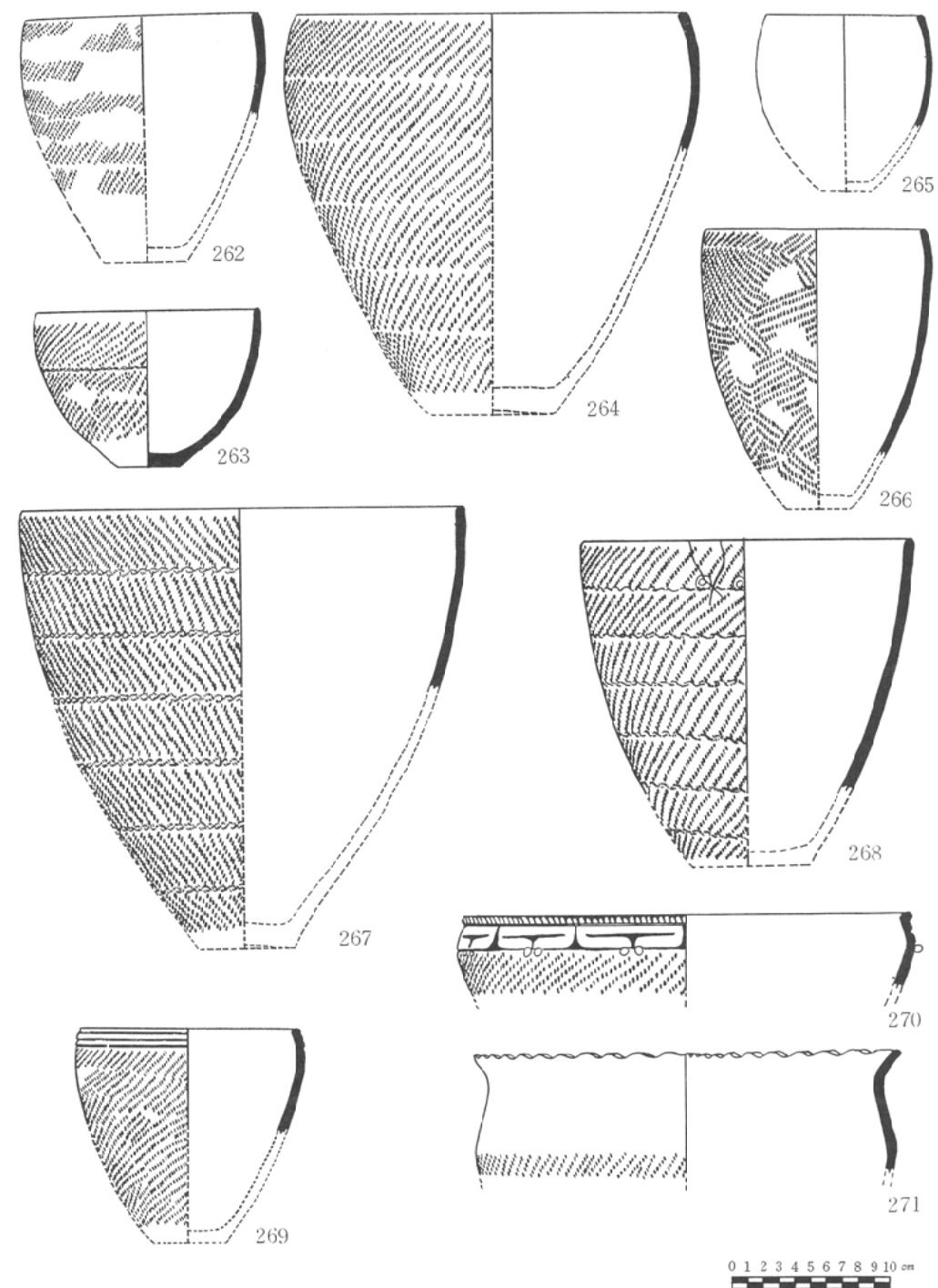
第19図 土器実測図(1) — 第3群土器(214)、第5群土器(215、216)
第10群土器(218)、第11群土器(217、219~223)



第20図 土器実測図(2) — 第12群土器(224~229)、第13群土器(230~233、
235)、第14群土器(234、236~241)



第21図 土器実測図(3) — 第14群土器 (242~247)、第15群土器 (248、249、252、254)、第16群土器 (250~251、253、255~257)、第17群土器 (258~261)



第22図 土器実測図(4) — 粗製土器

な工字文を施している。工字文は浮彫されており、文様の特色も少しずつ異なる。これも胎土、焼成ともに大変良好な薄手の土器である。

b類土器 (第21図 248、252、254) 器形は、長頸壺(248)、台付鉢(252、254)、台付浅鉢などである。殆んど肩部の張った器形である。口縁から胴部上半にかけて浮彫的な工字文を展開している。文様帯は、やはり平行沈線で区画され、内部の工字文を扁平化された典型的な工字文である。まれに平行沈線文だけで工字文とならないものもあり、浮彫的な平行沈線文に特色がある(252)。全面無文化の傾向が強く、沈線文以外のところは無文化され、きれいにみがかれ、さらに朱を塗ったもの(252)もみられる。

第16群土器 (第18図 209～211、第21図 250～251、253、255～257) 変形工字文、を有する土器を中心とする一群である。

a類土器 (第18図 209～211、第21図 251、253) 平らな口縁が多傾気味に開く鉢(209)、平らな口縁が外彎気味に開き、頸部でかるくしめる鉢(253)、口縁が外彎気味に大きく開く鉢(210)割と厚手で丸みのある壺(211)、平らな口縁が外彎し、肩部のはる壺(251)などがある。文様の主体はやはり平行沈線を基調としたもので、変形工字文が口頸部の文様帯に施される。変形工字文には小粒の張瘤小突起が貼付されることが多く、張瘤小突起は貼付されたものだけではなく、沈線を施したときにできたもり上がりを利用したものもある(211)。文様帯と文様帯の間や体部下半は斜縄文が施されることが多く、殆んどがやや細かなLRの単節斜縄文である。一般に薄手の器質の良いものが多いが、中には厚手のやや雑なものもある(211)。

b類土器 (第21図 250、255～257) 口縁のすぼまる台付鉢(250)、口縁突起を有する頸部のしめる鉢(255)全体として甕形に近い器形の鉢(256、257)がある。共通して肩部が張って胴下半部が貧弱である。また、口縁が外彎気味であるが、殆んど外傾に近い。外反しているものはない。台付鉢にしても台部が立っている(250)。口縁部は殆んど無文化され1～2条の沈線が加えられている(250、255)縄文は殆んどLRの単節斜縄文であるが、羽状を受するもの(250)や、たてになるもの(255)もわずかに認められる。器質はあまり良いとはいえないが、薄手で、ていねいに施文されている。ここにあげたものは殆んど小型である。

第17群土器 (第21図258～261) 変形工字文、が崩れたような文様を有する土器を中心とする一群である。

a類土器 (第21図 258～259) 器形は、わずかに外彎気味に開く口縁をもつ鉢、さらに台の立つ台付鉢である。文様は変形工字文がかなり崩れて、工字文の感じがあまりしない独特の沈線文を体部上半の文様帯や台に施している。鉢の場合は胴下半に、さらに台付鉢の場合は台にも斜縄文を施している。斜縄文が生文様の内部にまで加えられてくることも特徴的である(259)。縄文は単節が多く、傾きが少なく立っているものもみられる(259)。器はやや厚っぽい感じのする焼きしまりもあり良いとはいえないものである。

b類土器 (第21図 260～261) 平縁の盃形に近い、口縁の大きく開いた残鉢形である。平行沈線文が施され、中にはさらに縄文を加えたものもある(260)。縄文は細かいLRの単節斜縄文である。器質は大変良好で、焼きしまりのよい薄手の土器である。260などはフタ形土器にもあたりそうな感じで、底部が大変小さい。以上の第一群土器から第17群土器までの土器はトレンチ毎に出土量をあげれば第1表の通りである。

第1表 精製土器の分類と出土量

	第2トレンチ	第6トレンチ	第7トレンチ	第2号住居地 (1.5トレ)	計
第1群土器	18	12	8	32	70
第2 "	5	2	0	0	7
第3 "	112	13	110	104	337
第4 "	41	3	34	9	88
第5 "	14	3	58	5	80
第6 "	21	0	61	7	89
第7 "	3	0	13	5	21
第8 "	11	0	7	3	21
第9 "	28	0	20	11	59
第10 "	57	1	85	8	143
第11 "	145	8	139	58	350
第12 "	34	13	79	4	130
第13 "	49	18	76	0	143
第14 "	48	28	646	40	762
第15 "	11	42	185	9	247
第16 "	4	7	14	6	31
第17 "	2	0	5	0	7
計	603	150	1,666	299	2,718

粗製土器

粗製土器と精製土器は、小破片になると分離し難いものも多くみうけられる。また、器形や器質からみると粗製土器であるにもかかわらず、口縁に精製土器と同じような文様を施したものもあり(半粗製とでもいうべきか?)、粗製土器に含めるか否かも難しい。機能的にみて、器質や文様も考慮して分類した。即ち、煮沸容器としての深鉢・甕になり得るものを、器質も良くない、文様も精製土器の主体文様でないものを精製土器の中に入れた。さて粗製土器は、その特徴によりさらにいくつかに類別することができる。ただし、典型的なものだけで、あいまいになりやすい。完形土器が少ないためであろう。不十分な分類で問題もあるが、一応粗製土器の傾向を知っていただくためにもその結果をあげておきたい。

縄文土器

第1類土器 器形は、平縁の直立もしくはわずかに外反する筒的な長胴の深鉢とみられる。口縁がわずかに外反するものは頸部でわずかにしみるとみられる。縦位、斜位に回転施文される単節の粗い斜縄文を有する。口縁の縄文を磨り消しているものもみられる。複合口縁もみられる。厚手で大型である。全般に胎土・焼成ともに粗雑である。

第2類土器 器形は、第1類とほぼ同じで、平縁の直立もしくはわずかに外反する円筒的な長胴の深鉢とみられる。口径に対する器高の比が第1類よりも小さくなるらしい。文様は、やはり縦位、斜位に回転施文される単節の斜縄文で、口縁は殆んど磨り消しがあり、一条の沈線で区画して磨り消しを加えるものも多い。縄文は第1類より細かであるがやや粗い縄文である。厚手で胎土・焼成ともにあまり良くない。

第3類土器 器形は、平縁もしくはわずかに波うつ波状口縁がやや外反し、上に開く深鉢である。底部は口径に比べて、第1類～第2類に比べて小さくなり、着地面の縁が外へ張る傾向がある。また口径に対する器高の比が第1類～第2類よりも小さく、上下に圧縮される傾向があるようである。縦位、斜位に回転施文される、第1類～第2類よりも細かな単節の斜縄文を有する。口縁に磨り消しを加えるものが多く、口縁に一条の沈線を加えて磨り消すものもある。厚手の胎土、焼成ともに良くないものから、やや薄手で胎土、焼成ともにやや良好なものまである。

第4類土器 器形は、内側に肥厚気味の口縁が外彎気味に大きく開き、ふくらみながらやや小さな底部へ下降する深鉢とみられる。横位、斜位に短かな単節の原体を回転施文する斜縄文を施している。第1類～第3類に比べ、さらに細かな縄文が多い。また、より薄手になり、胎土、焼成ともに、やや良好である。

第5類土器 (第22図 262) 器形は、内に肥厚する平らな口縁が内反する、ふくらみつつより小さな底部の下降する、半割卵形の深鉢とみられる。文様は、撚りのきつい短かい原体を横位に回転施文する斜縄文である。施文法がやや雑で、部分的に施文しない部分を残したり、部分的に斜位に施文したりする。薄手で器質も悪くない。

第6類土器 (第22図 263、264、267、268) 器形は、平らな口縁が内反もしくは直立し、胴部上半がふくらみ、胴下半がやや貧弱に下降する、半割卵形に近い深鉢である。文様は、撚りのきつい短かな単節の原体を整然と横位に回転施文された斜縄文である。結束撚糸のあやくり文をもつものも多い。薄手で、比較的器質も粗製土器にしては良好である。

第7類土器 (第22図 266) 器形は、平らな口縁の内反する甕形に近い、やや胴上半が張る深鉢である。口縁に比して器高が高く、胴下半が貧弱(第4類～第6類に比べて)になる傾向がある。文様は、横位に施文される短かい単節の原体の斜縄文であるが、部分的に斜位に施文したりするなど不規則な放文法も多い。薄手で、胎土、焼成ともに良好なものも多い。

第8類土器 (第22図 269) 器形は、平らな口縁の内反すゆ深鉢である。口縁に対して器高が高くなる傾向をもつらしい。文様は、単節の原体を横位に回転施文する斜縄文である。口縁に数条の平行沈線文を有する。縄文は横位に施文するものが原則的であるが、部分的には斜位に施文されるなど不規則な施文法を用いたものが多い。薄手で器質もあまり悪くない。

第9類土器 (第22図 270) 器形は、口縁が外反し、頸部でしまり、肩部で張り出して下降する。甕形になるとみられる。口頸部に平行沈線文(割と太い)を有する。また、口唇に細かな刻み目を施し、270のように工字文的モチーフをもつものもある。薄手で胎土、焼成ともにあまり悪くもない。

第10類土器 (第22図 271) 小波状の口縁が外反し、頸部でしまる甕形に近い深鉢とみられる。単節の斜縄文を有し、縄文原体の撚りはきついほうであるが、目のあらいもののがかなり混じってくるようである。全般に薄手であるが、やや厚手のものもある。胎土、焼成などの器質もあまり悪くないものが多いが、かなり差があるようである。

第11類土器 (第18図 212) 平らな口縁が内口する甕形である。口縁に無文部を残し、刺突列点文を加えたり、刻目帯を加えたりする斜縄文を文様とする。縄文は単節の斜縄文であるが、施文法が不規則で、横位・斜位に回転施文する。さらに縦位に施文されるものまである。やや厚手で器質もあまり良くない。量的に少ない。

羽状縄文土器

第12類土器 器形は、平らな口縁が外彎もしくは外傾し、ややふくらみがげんに小さめの底部に下降する深鉢とみられる。縦位・斜位に回転した原体をおり返して転がした羽状縄文を有する。単節の縄文で、撚りのきつい原体を強く押して、ややあらっぱい感じの施文である。全般に薄手であり、口縁が内に肥厚するものがある。

第13類土器 器形は、内に肥厚する平らな口縁が内反し、ふくらみながらより小さめの施文下降する、半割卵形の深鉢とみられる。文様は、撚りのきつい短かい原体を横位に回転施文する羽状縄文である。施文法がやや雑で部分的に施文しない部分を残すものも少しある。薄手で器質も悪くない。

第14類土器 器形は、平らな口縁が内反もしくはほとんど直立し、胴部上半がふくらみ、胴部上半がふくらみ、胴部下半がやや貧弱に下降する。半割卵形に近い深鉢となる。文様は、撚りのきつい短かな単節の原体を整然と横位に回転施文された羽状縄文である。結束撚のあやくり文をもつものが多い。薄手で、器質も比較的良いほうである。

撚糸文土器

全体として量が少なく断片的な資料であるが、第1次～第2次調査の資料も考慮すれば、次のようなものがある。

第15類土器 平縁の直立もしくはわずかに外反する円筒的な長胴の深鉢である第1類～第2類とほぼ同じ器形になるらしいが、器形の全体はわからない。文様は縦位・斜位に回転施文された撚糸文である。比較的粗い撚糸文であり、厚手で胎土・焼成ともにあまり良くない。

この他に、網代状撚糸圧痕文、撚糸圧痕文を有する、やや厚手の小破片がわずかにあるが、全体を推察することもできないので類別には加えないでおきたい。

刷毛目文土器

中間報告書では櫛歯状沈線文としたグループのものであるが、呼称を櫛歯状沈線文とするよりも刷毛目文とするほうが適切であるように思われる。

第16類土器 器形は、平縁のわずかに外反する長胴の深鉢らしい。器面にびっしりと縦位に刷毛状工具でひっかいた、やや深く施こされたところの刷毛目文を有する。厚手で、胎土、焼成ともにあまり良くない。

第17類土器 器形は、平らな口縁がわずかに外反気味で、上に少し開く深鉢らしい。口縁部には横位に、体部には斜縦位に施される刷毛目状条痕文を有する。厚手であり、胎土、焼成ともにあまり良くない。内部に格子状沈線文を加えたものもある。

第18類土器 (第13図 111、112) 器形は、口縁が内側に肥厚し、外彎気味にやや大きく開く、全体としてふくらみかげんの深鉢らしい。文様は刷毛目文が入組文のように、あるいはやや格子状に複雑な形にめぐらされている。原体の刷毛状工具も一本一本が細いものらしく、沈線が細い。薄手で、胎土・焼成ともにあまり良くはない。

第19類土器 (第13図 118) 器形は、平縁または小波状口縁の、直立もしくはやや外傾する、ふくらみかげんに小さな底部に下降する深鉢らしい。文様は細かい刷毛目文を斜めに、あるいは格子状に施すらしい。薄手で、胎土・焼成ともに精製土器に近く悪くはない。

無文土器

量的には縄文土器の次に多く、無文といっても、胎土も焼成も精製土器と殆んど変わらないものまであり、器面調整も良いものも多く、精製土器との区別は明瞭でないものが多い。その中から少なくとも二つのグループが識別される。

第20類土器 器形は、内側に肥厚気味の平らな口縁が、外彎気味にやや大きく開く深鉢である。土器全体がふくらみかげんで、わずかに丸みをもっている。薄手でのもが多く、やや厚手のものもある。胎土・焼成ともに悪くはない。口径に対する器高の比が小さい。

第21類土器 器形は、内側に肥厚気味、もしくは板状に厚さの変化がない。平らな口縁が内反気味に直立する。半割卵形の深鉢とみられる。底部は口径に比してかなり小さいものが多い。全体として丸みのある土器であり、口径に対する器高の比は小さい。薄手で、胎土・焼成などの器質は良好なものが多い。

以上のように粗製土器は一応分類された。しかしながら前述したように、完形品の不足等から類別不可能なものも多く、テピカルなものだけの分類である。しかも器形は復原推定によるものも多く、不明確さを残していることを附記しておく。文様によって分類した粗製土器のトレンチ毎の出土量をあげれば第2表の通りである。

第2表 粗製土器（半粗製）の分類と出土量

文 様 分 類	内 訳 (分類別)	第 2 トレンチ	第 6 トレンチ	第 7 トレンチ	第1号住居 址 拡張区 (第1トレ)	第 2 号 住 居 址 (第1,5トレ)	合 計
斜 縄 文 土 器	第1類～第11類	2408	578	8004	81	786	11857
羽状縄文土器	第12類～第14類	71	26	179	5	7	288
撚 糸 文 土 器	第15類	5	1	10	0	0	16
刷毛目文土器	第16類～第19類	21	0	18	0	0	39
無 文 文 土 器	第20類～第21類	1503	127	4779	116	729	7254
分 類 不 能 他		77	0	84	0	0	161
合 計		4085	732	13,074	202	1,522	19,615

以上で土器の説明を終えるが、底部については紙面の都合もあり、ほんのわずかに精製土器や粗製土器の分類の類別にわけることができたものだけさっと触れている。実際にはたくさん底部だけの破片もあるわけなので、簡単に略記しておきたい。底部には、①平底（無文）の大きなもの、②小さなもの、③平底（無文）の縁の張っているもの、④平丸底（無文）のもの、⑤丸底（無文）のもの、⑥わずかに凹む上げ底の（無文）もの、⑦台付のものがあるが、①②と③に木葉痕をもつもの、網代底がみられる。また、繻形の底部などもわずかにある。

2 石 器

出土した石器は第3表に示した通りである。今回の第3～5次の発掘調査では422点の石器を発見している。大別すれば打製と磨製の石器であるが、打製石器の大半は硬質頁岩製であり、小形の石鏃などに特殊な石質が見られた。磨製石器は殆んど安山岩であるが磨製石斧などに硬い石材が使われていた。また石核が30点余り、石片が1,039点出土している。石片は2cmから15cmまでいろいろであるし、薄い石核に二次的な加工が施されているものもある。これらから石器製作技術上の分析はまだ行っていない。石器の時期推定は前述のように伴出土器が攪乱された状態にあって確定できなかった。第3層より下部には晩期の土器が多かったので殆んどがこの時期にあると思われるのだが断定は避けたい。以下一括して紹介してしておくこととする。なお調査による石器の総数は下表のように総計1,068点を数えるに至った。

第3表 出土石器の種類と出土数

調査次 石器名	表面採集	第1次調査	第2次調査	第3次調査	第4次調査	第5次調査	合 計
石 鋼	34	80	82	21	83	9	309
尖頭形石器				1	7	2	10
石 鏃	6	11	13	2	13	2	47
石 ヒ	3	4	16	4	19	4	50
石 ベラ	1	3	8	3	7	1	23
小形円形石器				1	2		3
打製石斧		1	1	1	2		5
不定形石器	14	105	145	36	75	13	388
円盤状石製品		1	3	1	2		7
磨製石斧	12	21	13	4	13	1	64
石 刀					1		1
石 剣		1	2	2	3	1	9
石 棒	2	4	5		3		14
石 冠					1		2
石 錘	1	4	10				15
浮子石			1		2		3
凹 石		12	17	12	28	6	75
磨 石		5	2	7	15	3	32
砥 石					2		2
石 皿		1	1	1	5	1	9
合 計	74	253	319	96	283	43	1,068

石 鏃 (第23図) 石鏃は113点出土している。これは全石器の26.6%にあたる点数で比率は高い。石質は暗灰色、明灰色、暗褐色、茶褐色などの硬質頁岩が大半を占めている。硅化の強い頁岩も多い。そのほか乳白色の石英岩、暗赤色の鉄石英、緑色の頁岩、白と赤がまだらの玉髄質、あるいは瑪瑙、黒曜石などが含まれ多種多彩である。大きさは計測可能な93点についてみると、長さが2.4cm以下の小形の石鏃は37点、2.5～3.9cmの中形の石鏃は48点、4cm以上の大形の石鏃は8点であった。頁岩以外の石質は小形に多いという傾向にあった。これは原石の大きさに関連するためと思われる。前報告では石鏃の形態によって4つに分類しておいた。今回の出土品は形態の特徴と特に基部の成形状態によって16に細分してみた。

1類(1～4) 基部を形成する際に肩部が内側に入り込んだ形の有茎石鏃である。4点出土している。2の肩先が斜め下に突き出すような形が典型で、他は傾斜が浅い。3、4は黒曜石製で左右非対称である。小形の石鏃である。

2類(5～12) 肩部が水平で直線状をなす有茎石鏃である。10点出土している。5、6などの幅広い例が特徴的である。小形が多いが、中形も少し含んでいる。

3類(14～16、20、22、25～28、31、33) 肩部が外側に傾斜をもち、肩部と基部の境界が角を形成して判別できる有茎石鏃である。14点出土し13.1%にあたる。14、16のように基部が細長いものと15、25のように基部が舌状に突出するものがある。中形が多く、小形は少ない。

4類(17～19、23、24、29、30、32、43、44、46、49) 肩端から基部先端にかけてゆるやかな内彎する曲線を描き、肩部と基部の境界点がない有茎石鏃である。22点出土し20.6%で最多数を占めている。中形が多く大形も見られる。細長のスラリとしたもので、基部は舌状に形成され全長の半分に近い例もある。

5類(13、34～37) 石鏃の先端から肩部にかけての側辺がやや内彎し、肩部が円く張り出した紡錘形に近い有茎石鏃である。5点出土している。細身で中形、下ぶくれの感じである。13は基部下端が欠失しているが、全長5.3cm、幅1.4cmの最大例である。

6類(21、38～40) 幅広い不整な四辺形の一隅に細長い基部を形成した有茎石鏃である。4点出土している。基部が全長の2分の1に達し、刺突部は鈍角である。小形である。

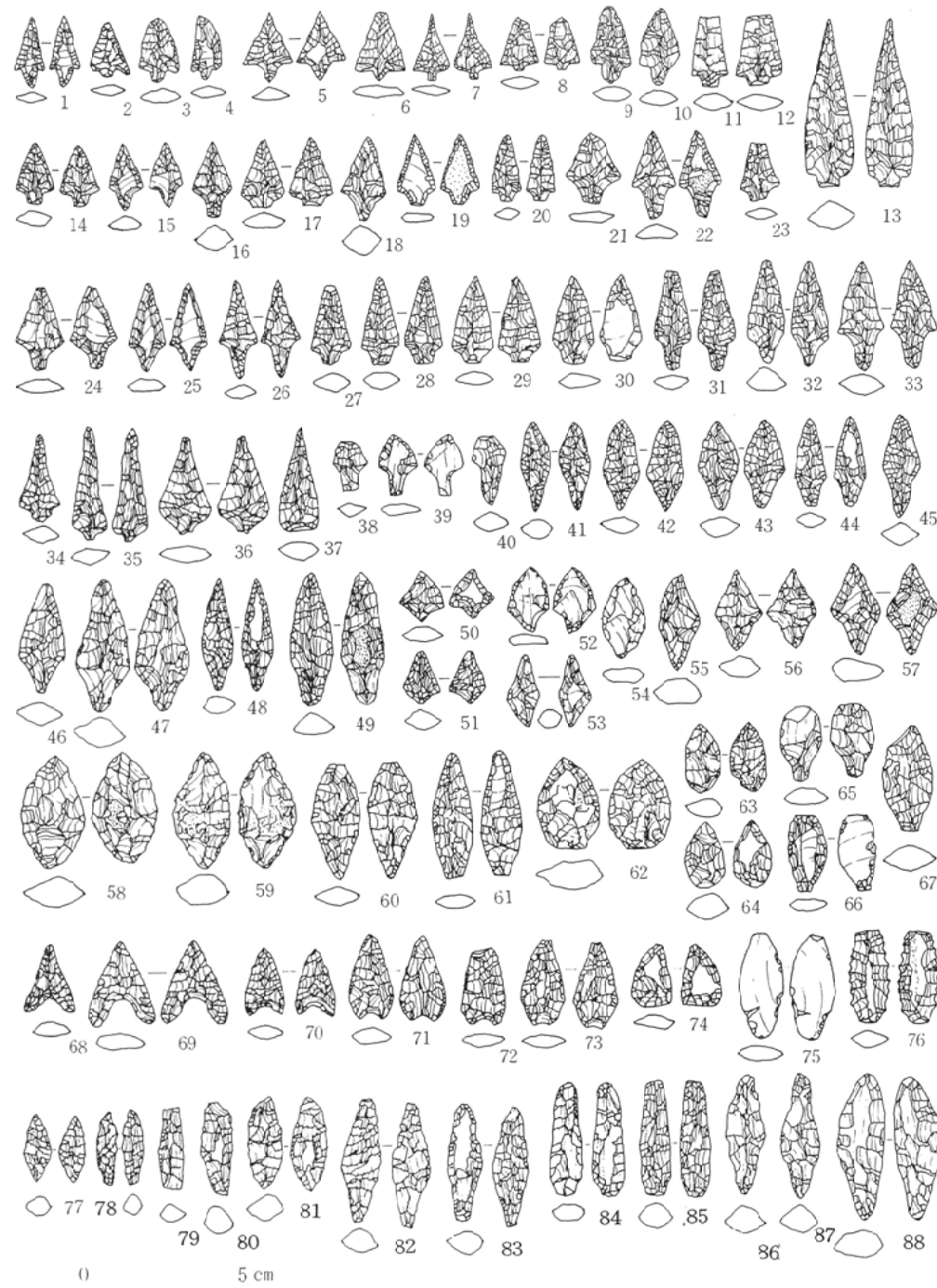
7類(65～67) 楕円状の本身の一端が尖り、一端に基部を作出した有茎石鏃である。5点出土している。

8類(76) 石鏃の両側辺が鋸歯状の凹凸をもつ有茎石鏃である。1点だけの出土で両端が欠失している。

9類(50～53、56、57) 幅広く小形で全体が菱形に近い石鏃である。6点出土している。50は長さ1.5cm、幅1.4cmの最小例である。

10類(41、42、45、55、60、61、75、82) 細身のスラリとした中形から大形の菱形をなす石鏃である。8点出土している。どちらが基部か先端か不明なものが多い。

11類(54、58、59) 幅広い菱形を呈しているが両側辺の角が円く整形され、断面が部厚



第23図 石器—石鏃

い凸レンズ状の石鏃である。3点出土している。中形が普通である。

12類(62~64) 楕円形の一端が尖り、基部はそのまま円く形成された石鏃である。5点出土している。小形と中形である。断面は部厚い。

13類(68、69) 基部にやや深い抉り(わたくり)が形成され、両脚が先端から延びる直線上に作出された無茎石鏃である。2点出土している。

14類(70~73) 最長幅が下半部の中央にあり、基部でしる抉りの浅い無茎石鏃である。5点出土している。やや細身である。

15類(74) 二等辺三角形をした小形の石鏃である。1点だけ出土している。

16類(77~81、83~88) 全形が棒状を呈する石棒である。12点出土し11.2%である。断面が円形に近い部厚いもので小形、中形、大形のいずれも出土しているが中形が多い。大半がいずれが先端部なのか判別しかねるが、84、85のように下端がくびれて基部らしく整形された例もある。やや全形が細長い菱形に近いものと全く両側辺が平行して次第に尖るものがある。

以上破片のため類別不能であった6点を除き、107点を16に分類してみた。この16類はさらに大別することが可能であるが、第1、2次調査で出土したものも含めて検討してみたい。またアスファルト附着の石鏃があるがこれも後述したい。今回の調査で2、3、4類とした有茎石鏃が合計で43%に達する。神矢田遺跡で最も普遍的な形態であったと思われる。16類も比較的多い。なお類別と石質に特別な関連する傾向をとらえることはできなかった。石鏃の加工法は両面加工が原則であるが、半両面加工や周辺だけの加工、剥片をほとんどそのまま利用したと思われるものがあった。

尖頭形石器 (第24図112~121) 石器の一端あるいは両端が尖り、刺突の機能が可能な形態をもった石器を尖頭形石器とした。10点出土している。形態的特徴と製作技術上の特徴から3つに分類できた。すべて硬質頁岩である。

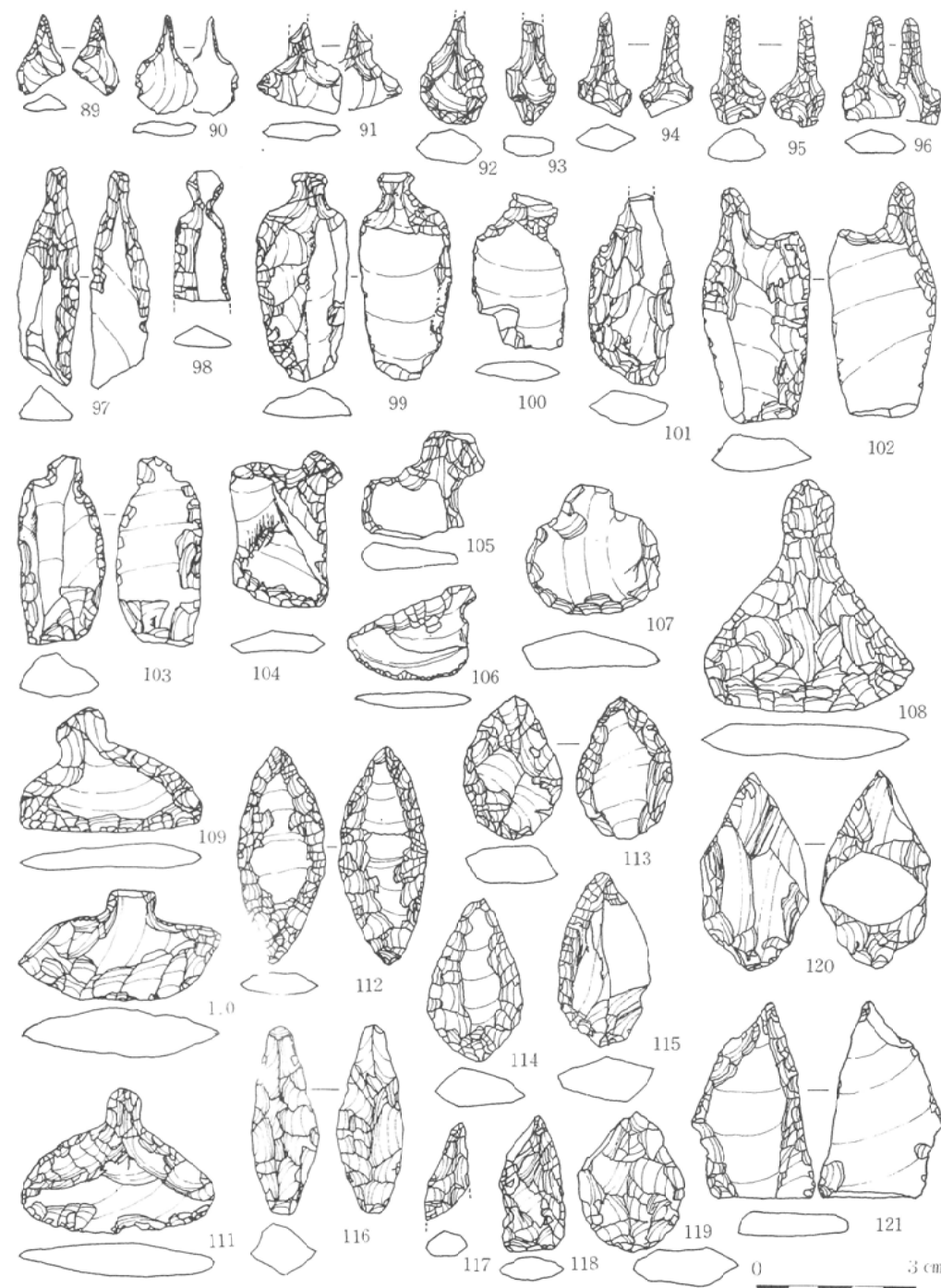
1類(112~115) 全形が楕円状で両端が鈍く尖り、やや幅広な例である。4点出土している。周辺部だけ両面に加工されている。卵形が基本らしい。

2類(116、117) 細身のスラリとした例である。両端が同じように尖る。2点出土している。両面が全面加工されている。

3類(118~121) 先端部の左肩に削ぎ取るような剥離面が走り、尖る部分を作成した例である。4点出土している。大きさは一定でない。技法が旧石器時代の影器の製作に似ている。

以上の尖頭形石器としたものは必ずしも石槍や銚のような刺突を唯一の機能とした石器とは限らないかもしれない。現在の影刻刀のようなあるいは刺し切る、刺し剥ぐような使用も考えられる。正面から見一端あるいは両端が尖るので仮りに尖頭形石器としておく。

石 鏑 (第24図89~96) 石鏑は17点出土している。このうち針部が完全なのは5点で他は欠損品である。針部の整形は89、90のように基部から自然に突出して短かく鋭利に尖るもの



第24図 石器—石錐、石ヒ、尖頭形石器

と、94、96などのようにやや太く長く断面が四辺形をなして丹念に形成されるものがある。この基部は石片の一部に整形打を施しただけのことが多いが、92、95のように全周辺に加工されている場合もある。

石ヒ (第24図97~111) 石ヒは27点出土している。一様につまみが作られ刃部とのなす角度によって縦形・横形という分類が一般に行なわれている。前報告では3つに分類しておいたが、今回は5つに分けてみた。なお105のようにつまみの部分だけ出土して、全体が不明なものが7点出土している。

1類(97~101、103) つまみと刃部が平行するいわゆる縦形の石ヒである。8点出土している。97のように細身で先端が尖る例と、99のように幅広で先端が円い例がある。

2類(107、109~111) つまみと刃部が垂直に交わるいわゆる横形の石ヒである。4点出土している。107は全体が楕円形をなす。109は刃部が直線的である。

3類(108) 全体が撥のような三角形を呈し両面に全面加工が施された石ヒである。2点出土している。横形の一種と考えられるかもしれない。

4類(102、104) 長方形の一隅につまみが作出された石ヒである。3点出土している。菜切り庖丁のような形態である。縦形の一種とも考えられる。

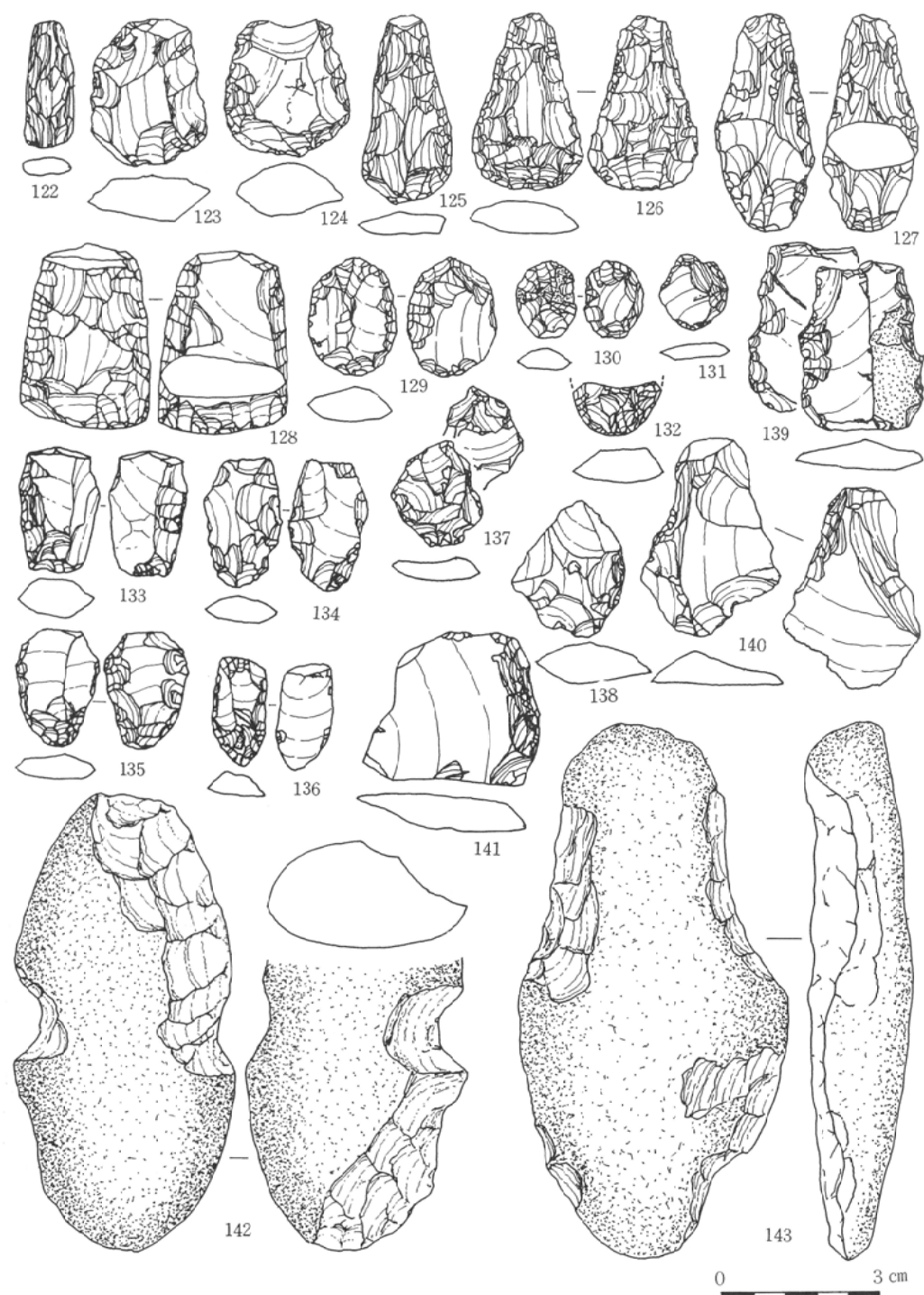
5類(106) 不整な三角形を呈し、つまみが刃部と45度で交わる石ヒである。3点出土している。いずれも小形で切出し小刀のような形である。

以上5つに分類したがつまみだけ見ると97、102、107、108、111は棒状で挟りがない。98、99、104などはつまみの挟りが顕著である。また全面加工は3類だけで他は周辺加工である場合が多い。

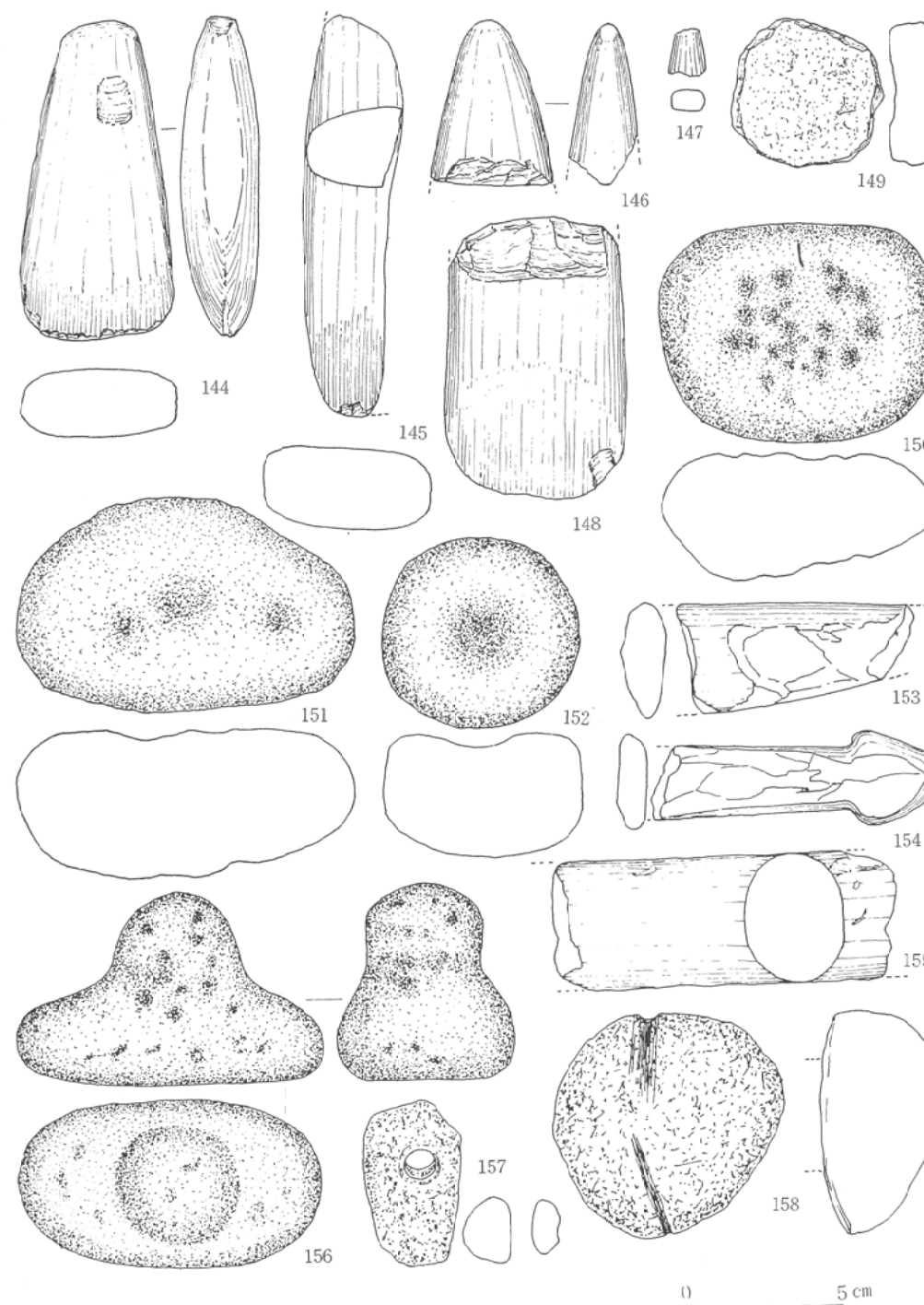
石べら (第25図122~128) 石べらは11点出土している。122は小形のもの、123、124は中形幅広のもの、125、126は紡錘形のもの、127は楕円形に近いもの、128は大形幅広のものである。いずれも両面あるいは片面加工で断面は凸レンズ形を呈している。

小形円形石器 (第25図129~131) 直径4cmに満たない小形円形に整形されている石器である。3点出土している。

不定形石器 (第25図132~141) 特定の形態をもたないが剥片の一部に再加工が施されており、石器として製作された意図がうかがわれるものを不定形石器とした。124点出土している。この中には132のように他の石器の破損品と考えられるもの、あるいは石器の未成品と考えられるものもある。石質は硬質頁岩が90%以上であるが、5cmに満たない小形のものには石鏃で示したような石質が見られる。2cm以下の小形のものから12cmに及ぶ大形まである。大半は剥片の一端に刃潰しのような加工の施されたものであるが、両面に整形打が打たれているものもある。133~135は長さ4cm前後、幅2.5cm程の大きさで再加工を施しているのであるが、これらは石鏃の製作過程にあるのではないと思われる。このような剥片が非常に多いことも事実である。このほか整形加工が挟入状に打たれているものもある。またわずかに磨滅しているものもあり、刃器として使用されたことが知られる。



第25図 石器—石べら、不定形石器、打製石斧



第26図 石器—磨製石斧、円盤状石製品、凹石、石刀、石剣、石棒、石冠、浮子石

打製石斧 (第25図142、143) 打製石斧は3点出土している。1点は石べらを大形にした両面加工の製品である。142は長さ14.6cm、幅6.9cm、厚さ3.4cmの花崗岩質の打製石斧である。正面右上と背面左下に整形打が施され、上下端は平たく尖っている。両側辺の中央部には抉りが作られている。自然面を大きく残しながら美事な石斧に仕上げられている。143は長さ16.9cm、幅8.6cm、厚さ3.3cmで142よりやや大形の石斧である。正面下半部の両側辺に整形打が見られる。上半部の側辺は基部形成の剥離面が連なっている。背面は全面が整形され、上端部は厚目に下端部は刃部として尖っている。安山岩製である。

磨製石斧 (第26図144~148) 磨製石斧は18点出土している。完形品は144の1点だけで他は欠損品である。146のような幅1.2cmの小形から、148のような幅5.7cmの大形まである。すべて両刃で断面が隅丸の長方形を呈する定角式石斧である。石質は流紋岩、緑色凝灰岩、安山岩などである。刃部の使用痕は激しい。ほとんどが使用中に欠損したものと考えられる。

円盤状石製品 (第26図149) 直径5cm前後の円盤状の石器である。3点出土している。安山岩質である。断面は長方形が台形をしており刃部はない。全周辺を円形に垂直に近い角度で欠き取っていったもので、厚さは1cm前後である。

石刀 (第26図153) 石刀の断片が1点出土している。残存する長さは7.5cmで断面は楔形を呈し、下端部は鈍い刃部である。右端は次第に上縁辺にすばまりやがて尖るものと思われる。粘板岩製のため破損している。

石剣 (第26図154) 石剣の断片が6点出土している。いずれも粘板岩製である。153は石剣の頭部である。断面は長楕円形をなし文様はない。

石棒 (第26図155) 石棒の断片が3点出土している。154は緑色凝灰岩製で両端を欠失した石棒である。残存する長さは10.8cmで断面は長軸が4cmの楕円形を呈している。

凹石 (第26図150~152) 凹石は46点出土している。安山岩製のものである。円形あるいは楕円形の扁平な河原石の両面あるいは側辺に凹みが形成されている。150は両面に無数の凹みが作られているもの、150は両面に2、3個の凹みが作られたもの、152は上面に1コだけやや大きく凹みが作られたものである。凹石は以上のような3つの類形に分けられるようである。152の例は3点だけで小形である。他は150、151のような例が相半ばしている。中には面を取ったような形跡もあり、側辺に凹みが作られている場合もある。152の直径6.2cmが最小例で、長軸13cmの楕円形が最大例であった。

石冠 (第26図156) 石冠は1点出土している。高さ6cm、長さ9.7cm、幅5.3cmである。上部は半円球状にふくれており、基底部は楕円形、底部は平らである。球頭形の石冠といえよう。安山岩製である。

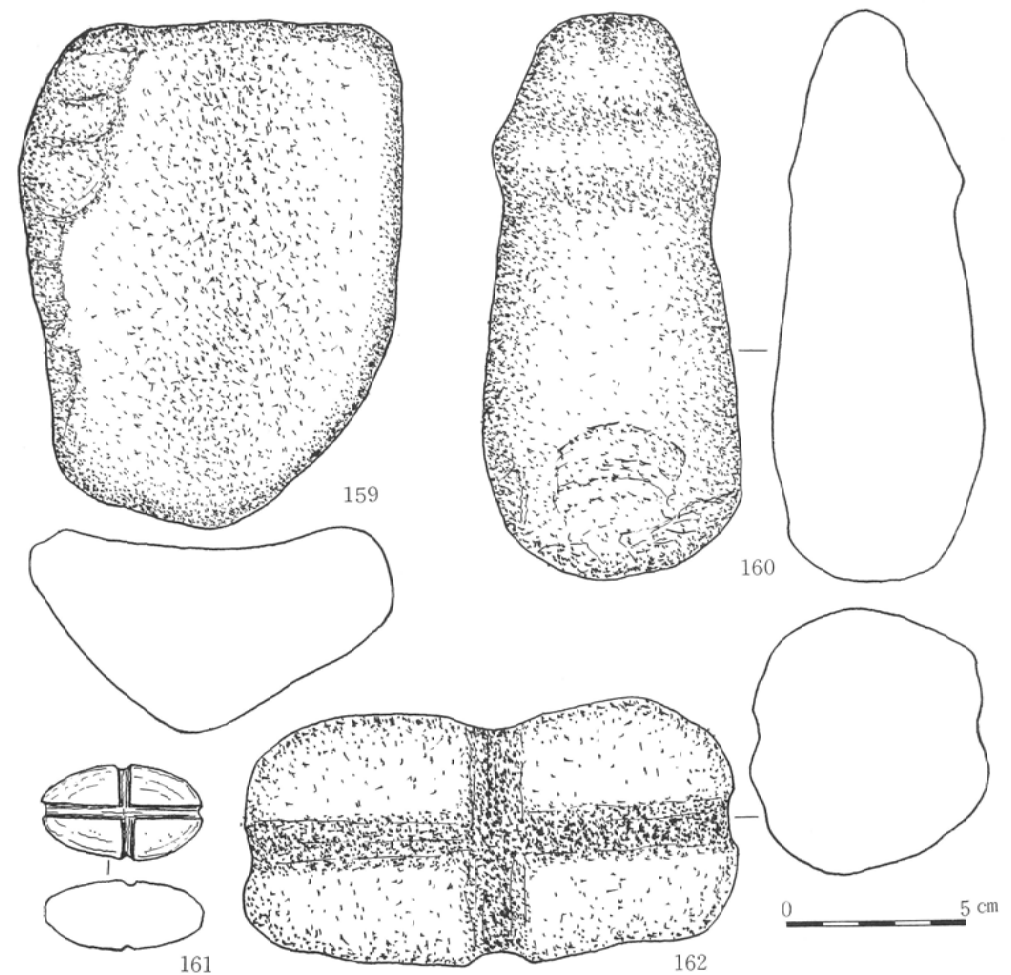
浮子石 (第26図157、158) 軽石を加工した浮子石が2点出土している。157は直径1cmの穴をあけたものである。158は直径6.5cmの半円球を呈し、紐の磨り痕のような溝が2本残っている。断面の中央部直径3.5cmの部分は欠失した様子があり、そのまわりにドーナツ状の磨り痕があるので、ヨーヨーのような形であったかと思われる。

石皿 (第27図159) 石皿は7点出土している。安山岩質の製品で158のように中央に縦に溝状の凹みが作られているのが2点である。他は比較的小形であり、中央部に円い凹みが作られている。

磨石 磨石は25点出土している。安山岩・花崗岩質のもので拳大の肩平な河原石の全面に磨った跡がある。

砥石 砥石は2点出土している。安山岩を使って1~3面の砥いだ跡が残っているものである。

その他第27図の160~162は新たな表面採集資料であるが、160は男根崇拜を思わせる石棒であり、161は土錘、162は石錘である。なお160のような石棒はもう少し大きいものももう1点採集されている。162の石錘は神矢田で最大のものであり十字形に溝が作出されている。

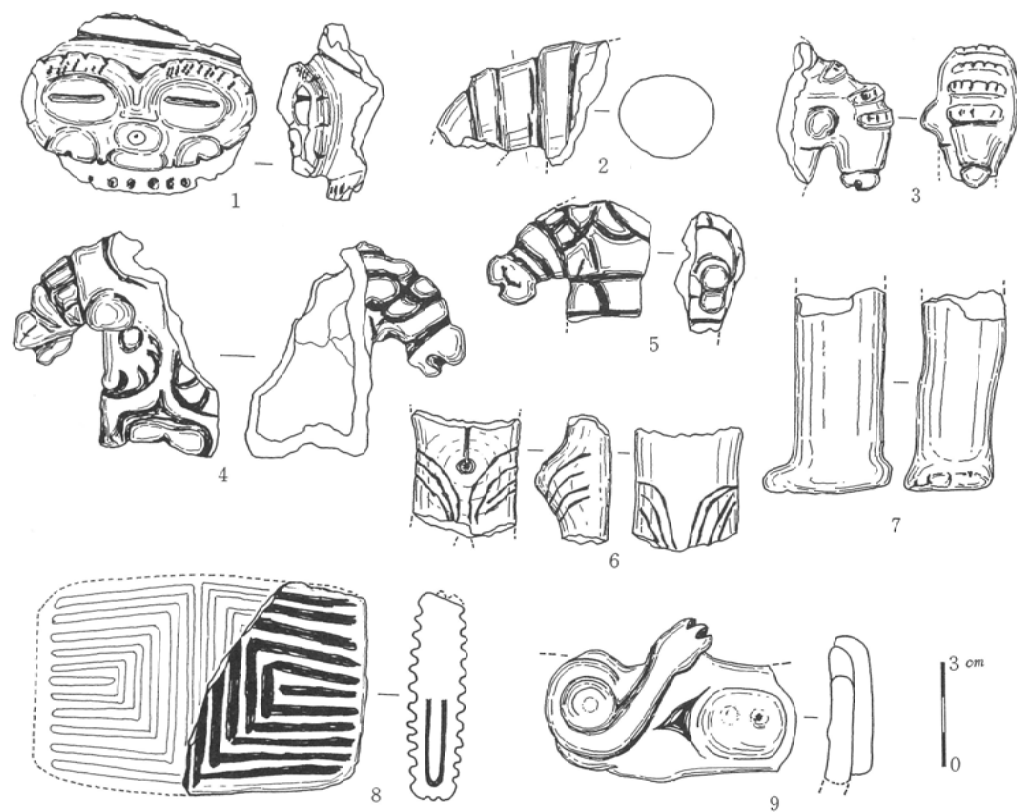


第27図 石器—石皿・石棒・石錘(石皿は土)

3 土 偶

土偶は7点出土しており第28図に示した。いずれも欠損品である。またすべて第7トレンチから発見され7は第1層下部から、他は第2～4層に出土したものである。出土した附近にはそれぞれ晩期の特徴的な土器片が伴出するのだが、攪乱状態が見られ決定的な時期推定資料とは思えない。以下簡単に説明しておきたい。

1は土偶の顔面である。残存部の高さは5.1cm、幅6.8cmである。頭部を含めて他は欠失している。遮光器土偶の顔面で頭部は中空である。黒褐色の精製された堅固な土質である。横幅の楕円形を呈した顔面が側面図のように突出している。大きな目、丸くあいた口、顎や頬にも半円状の浮き彫りがある。眉には細い縄文が打たれている。首には横に6個の刺突文がある。全長が30cm前後の立派な土偶であったと思われる。大洞C₁式の土偶と考定されているものに類似している。附近に大洞C₁、C₂式の土器が多く、縄文晩期中葉と考えられる。



第28図 土製品 土偶・土版・土器口縁部装飾

2は土偶の肩部である。上腕部に腕章のように2本の装飾がある。左右どちらの腕か判別できない。かなり大形の土偶と思われる。

3は土偶の左上半身である。黒褐色のやや荒い砂質粘土を使っている。左の乳房が残っており、肩から上腕部に肩章のような装飾が3つついている。手はこぶしを二股にしたような作り方である。肩の肩章の刻みに朱が残っている。

4は土偶の右上半身である。頭部から左胸部と背中を失っている。現存部の高さは6.3cmである。精製粘土を使った黒褐色の中空土偶である。乳房の見られる正面の腹部には波か炎を形どるような円弧状の曲線文様が描かれている。上腕部には小箱を連ねた腕章のような浮き彫りがある。手は握った時のような状態が2つにくびれた固まりとして作られている。下端部は股のように観察されるが、腰部から大腿部にかけてのふくらみは欠損している。胸部の中空部には胴部に上腕部を接着して作成した痕跡が残っている。5は土偶の左腕と背面である。乳房のある胸部が欠失しているので左腕と考えられる。4と大きさも装飾された文様も似ているが接合しない。わずかに文様や手の形に相違がある。しかし両者とも同じ時期にあったものと考えられる。大洞B式頃の土偶と思われるが晩期初頭としておきたい。

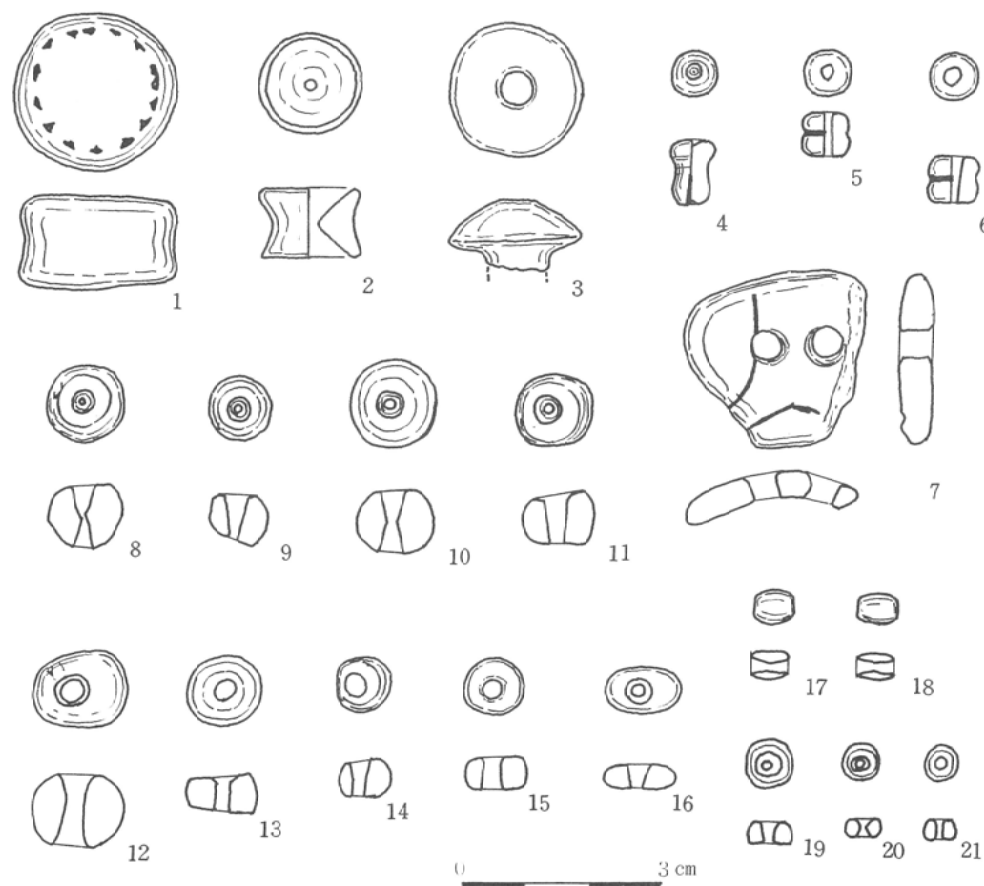
6は土偶の腹部である。赤褐色の砂質粘土である。現在部の高さ3.3cm、幅3cm、厚さ2.2cmで小形の土偶と思われる。腹部以外は失われているので上下がはっきりしない。正面と背面には両脇から中央へ3～4条の曲線が平行して描かれている。腹部の中央に臍のような凹みがあり直線の沈線が走っている。腹部が異常に突出しているので妊婦を模した土偶と思われる。なお下端部は股のように観察された。後期の土偶であろうか。

7は土偶の脚部である。砂質粘土を用い黄褐色である。高さは5.9cmで円柱のような脚部に扁平足の足がついている。足先には刻みで指をつけたらしいし、踵も作られている。このままだと立つことができる。正面図でやや内彎あるいは外彎しているが、左右どちらの脚か判別できない。足の裏側にわずかに朱が残っている。後期の土偶と思われる。

以上の7点を加えて土偶は15点出土したことになる。すべて欠損品であるが後期が7点、晩期が6点である。晩期の土偶はさらに詳細な時期を推測できるのだが、後期の土偶も不明な点が多い。今後の検討を要する。

4 装 身 具

耳 飾 (第29図1～4) 耳飾は4点出土している。いずれも土製品である。またもとは朱塗りであったと思われる。1は滑車状のもので直径2.5cm、高さ1.4cmである。上下面に三角の刺突文が円を描いて施してある。2は臼形で直径1.5cm、高さ1cmである。3は算盤玉のような欠損品であるが、栓状耳飾の一種と思われる。直径は2cmである。4は小形の栓状耳飾と思われる。穴は貫通していない。直径0.7cm、高さ1cmである。これらはすべて耳栓形式で耳朶に穿孔して挿入し使用したものと思われる。今回の出土品は晩期の土器の多出地点であるので、それに併行する時期かと考えられる。



第29図 装身具

玉 (第29図5、6、8～21) 玉は16点出土している。翡翠、流紋岩、緑色凝灰岩など硬質の緑色を好んで原料としている。5、6は粘板岩製で直径、高さともに0.7cmである。両方ともダルマのようにくびれがあり耳飾とも考えられる。6は朱塗りである。16も粘板岩である。8、10～13は直径が1cmを越える大形の丸玉である。9、14、15、19は中形の丸玉、20、21は直径0.5cm以下の小形の丸玉である。17、18は楕円形の長軸方向に穿孔しており管玉の類と考えられる。穿孔法に上、下両端から穿孔した例と、一端から穿孔した例がある。後者は上下に水平な面が形成されている。遺跡から磁鉄鉱の小片が出土しているが、これを粉粒にして金剛砂のように穿孔に使用した可能性がある。硬度が高く石錐だけで穿孔したとは考えられない。なお7は調査期間中に表採したもので、緑色凝灰岩製の垂飾品と思われる。2個の穴が穿たれており、沈線の曲線文様は意図的なかどうか不明である。

5 その他の遺物

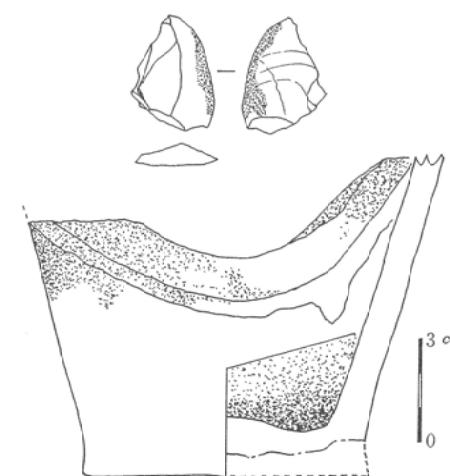
以上のほかにも人工あるいは自然の遺物が出土しており、現在同定中のものや特殊な事実を具備しているものもある。ここではそれらを紹介しておきたい。

土版が1点出土している。第28図8に示したもので半分以上が欠失しているが、復元すれば横9.6cm、縦6.4cm、厚さ1.2cmの大きさであろう。両面に沈線のコの字形文様が対称的に施されており、側面にも長楕円形の沈線がある。溝の中に朱が残っていて朱塗りの土版であったことが知られる。第28図9に示したのは土器の口縁部の破片である。黄褐色の砂質粘土で粘土帯の接着部が欠損したものである。右部分の渦巻きから口唇部に三本指の手が装飾してある。その右側に三叉状の沈刻があり、さらに右側に楕円状の隆起がある。この部分は磨滅しており明瞭ではないが、目を模したような凹みがあり顔面ではなかったかと思われる。後期前半の製品と思われる。また第20図235は朱の顔料を保存していた小壺といえる。外面も朱塗りであるが内部に朱の塊が入れてある。おそらく天然の辰砂かと思われる。第30図の土器は漆の容器と思われる。茶褐色の精製土器でへうで研磨している。底部の破損品であるがドットで示したような状態で真黒な漆が附着している。内部の底はもちろん現在の口縁から外部まで流れ出ているので、こわれた土器を使用したと考えられる。現存部の高さは9.3cm、口径11.4cm、厚さ0.8cm、底径8.2cmである、上部に横位の単節縄文がわずかに見られる。土器の上の石片は硬質頁岩であるが、ドットに示した部分が刃器として使われただけでなく、植物の汁が染み着いたように黒ずんでいる。これは自然の漆を採取するのに靱皮部を切るための器具ではなかったかと思われる。両者とも表面採集の資料である。朱を使用した土器、装身具などはかなり出土しているのだが漆の使用を明示する遺物はまだ検出されていないので問題として残る。

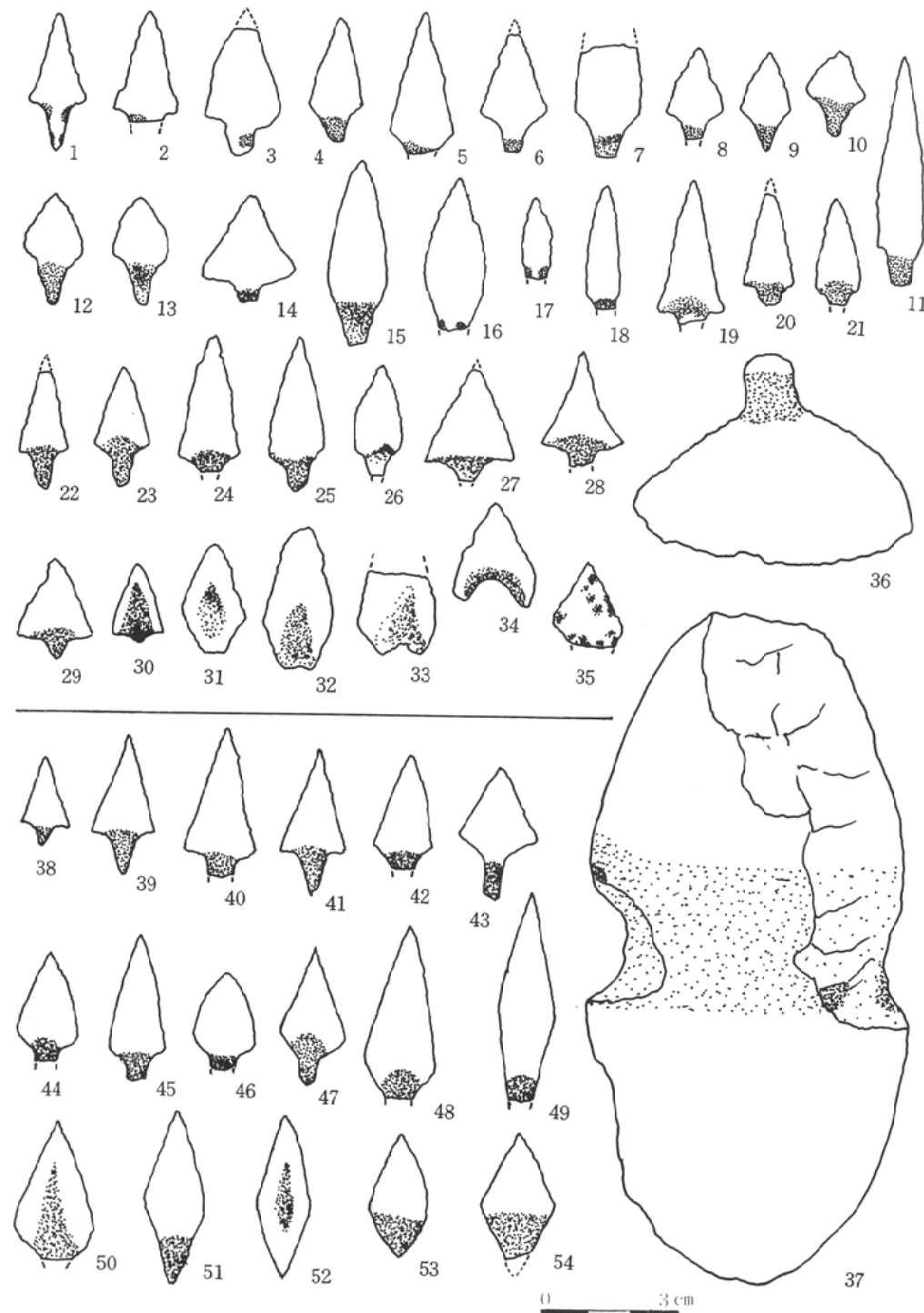
自然遺物としては木炭片や植物の種子、骨片、貝殻などがある。木炭片は床面や炉跡から出土しており量的にも多い。植物の種子はクルミが多いが現在のものよりやや小さい。また榧の実と思われるものがある。

骨片は数十点出土しているがいずれも1cmにも達しない小片が多く、磨滅したり砕れたりしていて原形をとどめていない。若干形を整えたものが表面採集されているが現在同定中である、おそらく小動物の一部と思われるが定かではない。

自然遺物は比較的発見が少なかった。また伴出土器の決定が困難な状況にあり、時期の推定もできなかった。



第30図 漆採集具



第31図 アスファルト附着の石器 (38~54遊佐町藤崎・神矢道遺跡出土)

6 アスファルトの附着した石器

アスファルトの附着した石器は前報告の段階でも気づいていたが触れておかなかった。今回さらに資料が増加しているので第1次から第5次までに出土した資料をここで一括して説明しておきたい。アスファルトの附着が観察された石器は石匕・打製石斧・石鏃の三種である。数量的には石鏃が圧倒的に多い。第31図はドット分布で附着状態を示したものである。裏面も同様の状態が観察された。1~37は神矢田出土であるが、38~54は遊佐町藤崎・神矢道遺跡で出土した例である。また作図にあたって石器に黒いかたまりが結着している場合もあったが、それが剥げ落ちても黒づんだ着色が観察されたのでその部分も図に示しておいた。また黒いかたまりを化学的に分析していないが、膠着材としてのアスファルトと考えられる。

石匕 (36) 石匕はつまみの部分に幅1.1 cmの帯状にアスファルトの附着した例が1点出土している。2類とした横形の石匕であり、着柄して使用したものと思われる。

打製石斧 (37) 打製石斧の中央挾入部を中心にして幅3.3 cmの帯状にアスファルトが附着している。やはり着柄のためと思われる。やや軟弱な安山岩質の製品であるが、両端の刃先に鋭い強靱さは乏しく、土掘り具のような用途を想定するのが妥当である。

石鏃 (1~35) アスファルトの附着した石鏃は35点であり、これは全出土品の約12%にあたる。これらを附着状態から分類すると次のようになる。

1類 (1~9、11~18) 附着が茎部だけに限られるもの。17点出土している。

2類 (10、19~29) 附着が茎部と肩部の高さよりやや上部まで及んでいるもの。12点出土している。

3類 (30~33) 附着が石鏃の両側辺と平行して三角形に入り込んでいるもの。4点出土している。

4類 (34) 無茎の石鏃のわたくりの部分に附着しているもの。1点出土している。

5類 (35) 石鏃の全面に附着しているもの。1点出土している。

以上神矢田では5つの類型を考えることができる。神矢道でも同じ傾向をとらえることができるが、53、54は菱形の石鏃の下半部に附着しており、これを6類としておきたい。

石鏃にアスファルトが附着している状態は着柄する技術や使用方法と密接な関係をもつと思われる。1、2類には有茎石鏃が多い。これらは石鏃の茎部にアスファルトを塗布し、矢柄の先端に差し込んだり、割りさいた部分にはさみ込んで緊縛したと考えられる。3~6類も同様の使用があったかもしれないが、3、6類はいわゆる燕形鏃頭の先端部に装着された可能性がある。また石鏃のその形態的な相違は時期的な差異であるかもしれない。

なお使用されているアスファルトは鳥海山麓に自然に湧出するピッチ状のものを使用したと思われる。鳥海山南西麓の湯の台附近では戦時中までバケツをもってアスファルトの採集に行き、屋根などの塗装に使用していたという。

第4章 考 察

第1節 神矢田遺跡出土の土器編年について

神矢田遺跡出土の土器は多様である。第1次～第2次調査の段階においてはその報告に述べたように16群の土器を得ている(1971、佐藤)。第3次～第5次調査においてはその内容を一部修正の上、同じ内容の16群の土器と新しい内容の1群の土器を得ることとなった。そしてこの17群の土器に伴うとみられる21類の粗製土器を得ている。この17群の土器にはいくつかの問題が横たわっているが、とくにその編年的問題は本県(または庄内地方)において大きな関心を寄せられている。とはいうものの、編年的問題にとりくむに十分な資料とはいえない。したがって、本稿は本格的な編年的考察よりも一研究者の私見の概略を記したものとしたい。これが今後の編年研究の手がかりとでもなれば幸いに思う。

1. 後期縄文式土器の諸グループの編年

東北地方における後期縄文式土器の編年研究は他に較べ立ち遅れてはいるが、ここ数年来その研究は急速に進歩している。もはや各地に存在する内容の概略が明らかにされ、その変遷の順序の大綱ができたといえる。しかし型式把握には問題があり、進展をみていない。それ故神矢田の土器の編年を行なうことは大切な意味をもっているといえる。器形・文様帯の構成・施文技法などの観点より県内の主な資料を参考にしながら神矢田の出土土器の編年的位置づけを考えてみよう。

第1群土器 曲線的なタテのモチーフをもつ磨消縄文を有するこの一群の土器の主体器形は深鉢である。口縁が直立する傾向があり、口縁が外反し、ゆるくくびれる胴長の器形が推測されるが、大木10式によくみられる器形である。口縁の外反は大木9式の仲間にも少しみられるが、主体はキャリバー形の名残りととどめる外彎(注1)であり、大木10式の深鉢形土器の仲間によくみられる。また文様は体部文様帯(Ⅱ文様帯—山内清男、1964)が主体であり、C字状・楕円状になるとみられる曲線的な磨消縄文を有する。大木10式特有の磨消縄文のタイプであり、沈線区画によるものもあるが、無文部と縄文部の境に貼付隆線文もしくは鱗状の突起(あまりないが)がみられるのである。縄文は一斜縄文もあるが一縦位回転施文の撚糸文が多用される。粗製の第1類土器は中期特有の粗大な節目の縄文であり、縦位の撚糸文土器である第15類土器や縦位の櫛目文ともいうべき粗荒な刷毛目文の第16類土器とともに共通要素が多い。他の遺跡でみると伴出する傾向性がうかがえるので、伴出するものと考えたい。

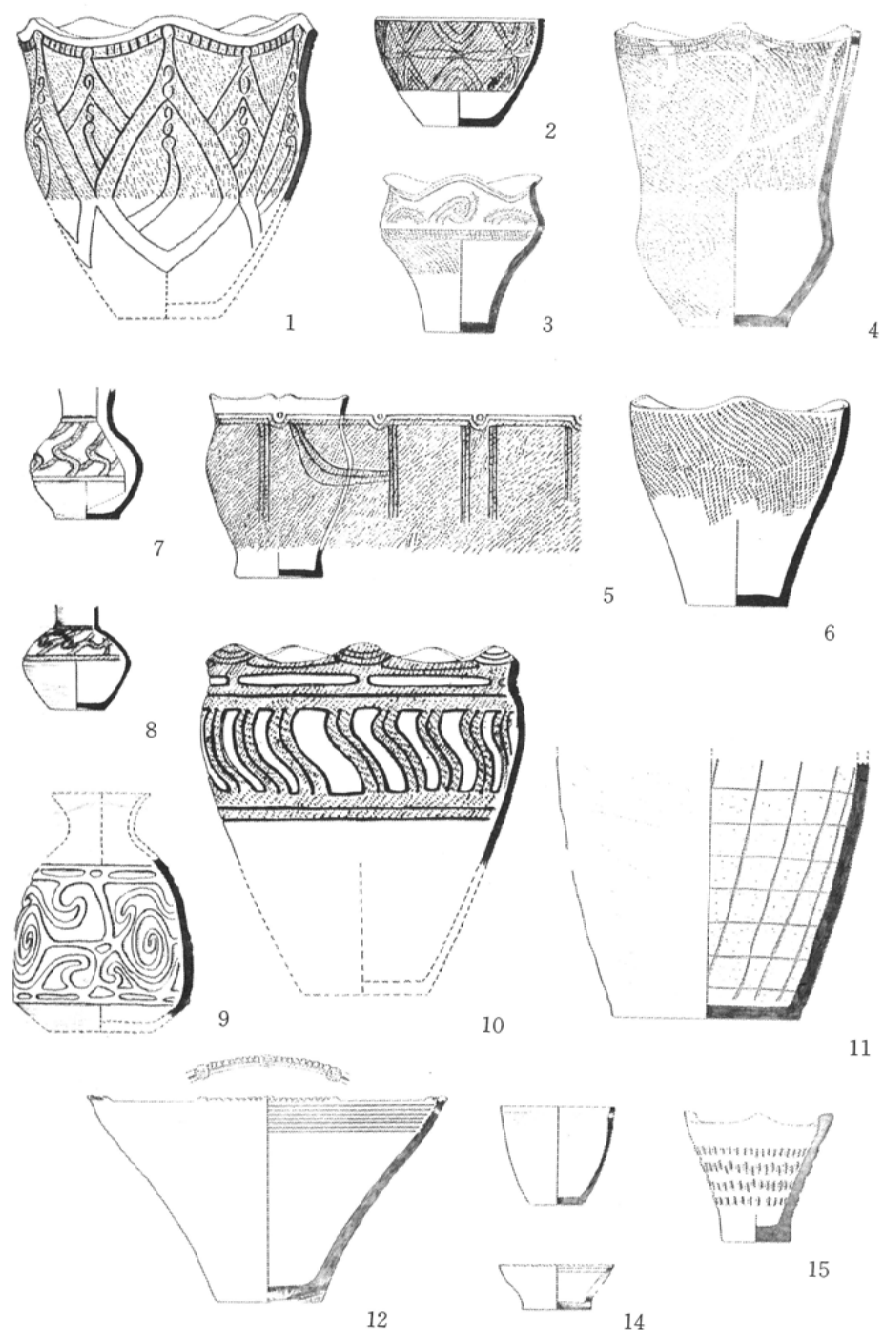
このように見てくると、大木10式の仲間といえよう。しかし、同じ大木10式の仲間であっても宮城県と山形県では少し異なる点があるとともに、大木10式の実態を実際の資料に適用する

際に研究者によって解釈の違いなどもみられるようなので、大木10式そのものという表現はさし控えたい。またそれは断片資料でもあることにもよる。ともかくも、大木10式の仲間は最上郡大蔵村白須賀遺跡(柏倉亮吉、1969)や米沢市堂森B地点(注2)において詳しいが、庄内地方では、遊佐町小山崎遺跡・三崎山遺跡・八幡町泥沢遺跡など鳥海山麓にも資料がある。

第2群土器 資料的に乏しく断片にすぎるが、無視できない。体部文様帯(Ⅱ文様帯)が主体で貼付隆線文による磨消縄文の区画稜線がみられ、垂下する部分にはタテに刻みを加付するものもある。主体となる深鉢における口縁の外彎と波状は大木10式にもみられない。宮戸Ia式(後藤勝彦、1962)や袖窪式(林謙作、1965)など宮城県の資料、門前貝塚第二類(吉田義昭、1960)など岩手県の資料などとの検討をすすめるにふさわしいまとまった資料をとり出すことが今後の問題である。そしてさらに関東の称名寺式(吉田格1960)との関連を把握しなければならない。

第3群土器 (第32図1～6) 量的にも内容的にも豊富である。主体器形の深鉢、鉢において口縁がゆるやかに波をうつものが多くなり、中期にはみられなかった新しさを感じる。口縁は外反して開き、口唇が内曲する。第1群、第2群とも大きくさがっており、壺や甕のような器形のものが多くなる。体部文様帯(Ⅱ文様帯)に主文様がタテのモチーフでもってくりかえされるが、完全に沈線化され、渦巻文や同心円文を中心にしてそれをつなぐように施こされる。地文の縦位回転施文の撚糸文の上に沈線を加えた文様であり、あまり磨消縄文が用いられない。磨消縄文は口縁部周辺にみられる。縦位の撚糸文がみられることや磨消縄文をあまり用いないことから中期的なムードをもっているが、貼付隆線文は殆んどみられず、文様が沈線化しており後期的特徴をもっている。渦巻文や同心円文はこのグループ独特のもので、同じ時期と考えられる東日本一帯の土器にみられる。関東の堀之内I式(岡本、戸沢、1965)や宮戸Ib式(後藤勝彦、1962)、南境式(伊東信雄、1956)などである。しかし、撚糸文を地文とするものはかつての大木式土器文化圏ぐらいの範囲に分布するようである。したがって東北南部の土器といえよう。それも本県一帯に濃密に分布するようにも思えるほどである。口唇部に刻みを施こしたり、溝を施工したり、貼付隆線文を垂下させたりするものがわずかに含まれる。おそらく堀之内I式にみられるものであろうか。堀之内I式は東置賜郡高畠町宮下遺跡(佐々木洋治、1971)にみられるが、本県北部では殆んどみられない。わずかに上記のような堀之内的なものが各遺跡の土器の中に混在してくるだけのものである。庄内地方では飽海郡遊佐町三崎山遺跡(柏倉亮吉、1969)(第32図2)、田川地方では鶴岡市谷定遺跡(注3)にティピカルに存在し、山形市谷柏遺跡(川崎利夫、1967)(第32図4～6)や米沢市上竹井遺跡(注4)(第32図5)なども好資料を出土している。粗製土器としては、斜縄文の第2類土器、撚糸文の第15類土器、櫛目風の刷毛目文の第16類が伴うものとみられる。宮戸Ib式または南境式の仲間である。堀之内I式に併行するとみられるこの土器グループは内容が複雑にみえるが、まだ良好な資料の発見が少ないからで、もう少し時期を待てば、内容が明確になってくるであろう。

第4群土器 (第32図7～14) 深鉢、鉢形では、第3群土器と殆んど変わらないが、口縁



第32図 県内各地の後期初頭の土器群（1. 7. 9 神矢田遺跡、2 遊佐町三崎山遺跡、3. 13. 14 村山市川口遺跡、4. 6. 12 山形市谷柏遺跡、5 米沢市上竹井遺跡、8 遊佐町丸池遺跡、10 真室川町小川内遺跡、11 村山市土生田遺跡）— 縮尺 1/6

がさらに開く傾向をもち、外彎気味のものや波状口縁の波頂部が舌状に張り出すものが多い。第5群、第6群土器への変化を想定させる。しかし、トックリ形の壺など東北北部の十腰内Ⅰ式（磯崎正彦、1964）にみられるような器形が伴ってくるようである。文様は体部文様帯（Ⅱ文様帯）に施されるが、文様帯が上下を区画されたものになり、体部上半に集約される傾向をもっている。この点で第3群土器と異なってくる。十腰内Ⅰ式も同じと見受けられる（磯崎正彦、1964）。文様は細い紐のような磨消縄文であり、渦巻文、同心円文を中心にしていろいろな方向に連結していくが、全体としてタテのモチーフでくりかえされる。この点、第3群や第5群およびその仲間とは異なる。また磨消縄文の要所には円棒状工具による刺突が加えられる。この刺突は器面に対して直角に施したもので独特なものである。

この土器グループは県内各地でみられるが、どちらかというと従来は加曾利B式併行の仲間とみられてきたようであり、その独自性を見逃しがし易い。鶴岡市谷定遺跡、飽海郡遊佐町丸池遺跡（第1図8）、村山市河島山遺跡（第32図13）、村山市土生田南沢遺跡（第32図11、14）、最上郡真室川町小川内遺跡（第32図10）、山形市谷柏遺跡（第32図12）などにみられる。この土器には内面に沈線文（平行沈線文、格子状文）を有する土器が伴っている。全般に無文化の傾向が強く、外面が研磨されるものもある。谷柏遺跡の土器は（第32図12）、堀之内Ⅱ式そのものといってよいほどである。粗製土器としては斜縄文をもつ第4類土器、刷毛目文の17類土器などが伴うと思われるこの土器は堀之内Ⅱ式に併行し、十腰内Ⅰ式の仲間であろう。

第5群土器 Aグループ（第33図1～3） この土器は、第5群a類、c類、d類をまとめて説明したい。前記の分類が複雑になってしまったので、ここで訂正させていただく。この点、お詫び申し上げる。

a類土器は、深鉢、鉢が主体であり、他に注口、壺がある。器形に大きな特色があり、口縁が大きく彎曲しながら開き、頸部でくびれ、肩の張る丸みを帯びた胴部にいたる。そして、さらに口唇内部に肥厚する。関東の加曾利B₁式（岡本、戸沢、1965）にみられる器形である。宮城県の宮戸Ⅱa式（後藤勝彦、1962）にもみられる。第4群土器までとは異なる。壺形においても第4群の長頸風のものはなく、肩部の張った壺である。文様帯も口縁部文様帯（Ⅱa文様帯）と体部文様帯（Ⅱ文様帯）に区別され、深鉢、鉢では口縁部文様帯に主体があり、帯状磨消縄文に加えられたS字状沈線文が特色ある。壺、注口では体部文様帯に平行沈線文に加えられたS字状沈線文がみられる。全般に無文化される傾向が強く、主文様帯以外の部分は磨消研磨化されるのが多い。このa類は本県ではいたる所に存在する。庄内地方では、飽海郡八幡町安宝山遺跡、鶴岡市谷定遺跡（第33図1）、山形市上野遺跡（第33図2）などである。ここで問題なのは、この“S字状沈線文土器群”の仲間が東日本一帯に分布しており、関東では加曾利B₁式、北陸北半では三仏生式（中村孝三郎、1957）、宮城県では宮戸Ⅱa式、東北北部では十腰内Ⅱ式（磯崎正彦、1964）として出現していることである。即ち、あまりに差異のない土器が分布し、土着の土器そのものなのか輸入品かということである。本遺跡の資料では区別がつかない。もっとも組成で判別しなければならないが。

c類土器は浅鉢、皿形のもので内部に帯状磨消縄文や連続刺突文を有するが、外面は無文研磨化される。口縁が大きく開くことによって現われる技法であると思われるが、加曾利B式併行期の土器によくみられることである。

d類土器は、口縁の大きく開く鉢形であり、口縁部文様帯（II a 文様帯）に帯状磨消縄文を施し、その上に格子状（網目状）または羽状の沈線を加えている。このような文様手法は加曾利B式にみられる。帯状縄文や格子状沈線のあり方から考えて加曾利B式の段階に位置づけられるようである。

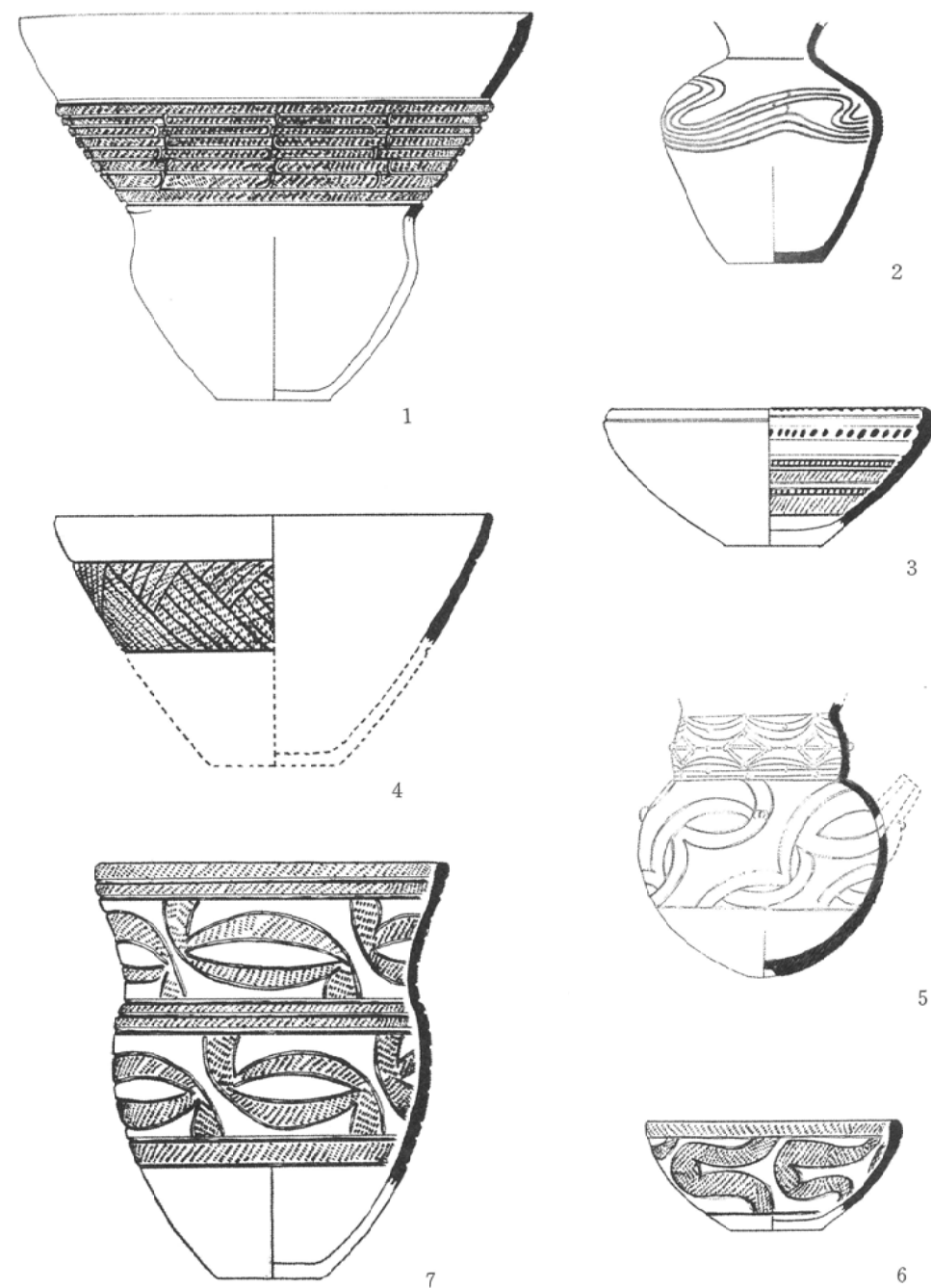
このようにみえてくると、第5群a類、c類、d類土器は極めて関東の加曾利B式的な色彩の濃い土器群であるとみられるのである。c類土器やd類土器の仲間は今のところ他の遺跡では確認されていない。さて、このグループに伴う粗製土器としては、斜縄文を有する第4類土器、刷毛目文を有する第18類土器、無文の第20類土器が考えられるが、あまりはっきりしない。

第5群土器 Bグループ 口縁が大きく開き外彎し、頸部でしまり、胸部でふくらむ深鉢、鉢である。口唇内部に肥厚し、大きく波をうつ波状口縁の上に精巧な装飾の口縁把手がつく。文様は口縁部文様帯および、体部文様帯に施される。文様は曲線に富む、のびのびと展開する磨消縄文であり、無文部分とそれを区画する沈線間に棒状工具の刺突による連続刺突文を有する。この土器は、第5群Aグループと大変共通点が多いが、県内各地ではあまり出土例を知らない。そのため、全体的に下明な点も多い。おそらく、宮戸II a 式や加曾利B式に併行するであろう。S字状沈線文土器に混じって出土するようである。しかし、東置賜群高畠町鱒ヶ越戸遺跡（佐々木洋治、1971）では単独に出土するらしい。青森県十腰内遺跡（磯崎正彦、1964）などにも少しみとめられるという。関東や新潟地方においても少量認められるらしい。おそらく東北的な、特殊な土器なのであろう。粗製土器はAグループと同じであろうか。

第6群土器 器形からみて第5群Bグループなどとほぼ同じである。口縁把手が殆んどみられず、胴部は全体に丸味を帯びてくる点で異なる。大きくゆるやかに波をうつ波状の口縁が多い。文様の主体は口縁部文様帯にあるが、胴部文様帯にも文様が施される。非常に曲線に富む磨消縄文で大きくのびのびと施される。地文となる縄文が特長的で、折りかえし施文による縦位の羽状縄文である。磨消縄文の区画部は刺突風の連続刻目文で縁どりしている。

この土器は、東北南部宮城県地方で宝ヶ峰式（伊東信雄、1956）あるいは宮戸II b 式（後藤勝彦、1962）の名で呼ばれた仲間であり、東北北部青森県地方では十腰内III式（磯崎正彦、1964）と呼ばれる土器の仲間である。関東の加曾利B₂式は、これらとやや異なる内容をもっており、東置賜群高畠町神立洞窟遺跡（佐々木洋治、1971）で発見されている。この土器群は、飽海群遊佐町三崎山遺跡、鶴岡市谷定遺跡をはじめ県内各地で発見されている。粗製土器としては、羽状縄文の第12類土器などがあるだろう。

第7群土器 （第33図5～7） 断片的であるが、器形は第6群土器に殆んど同じである。文様に特色がある。主体となる深鉢では口縁部文様帯、体部文様帯に入組磨消縄文が施される。曲線的な、先祖返り形態の「コ」の字形の入組文であり、羽状縄文や刷毛目文が地文として施



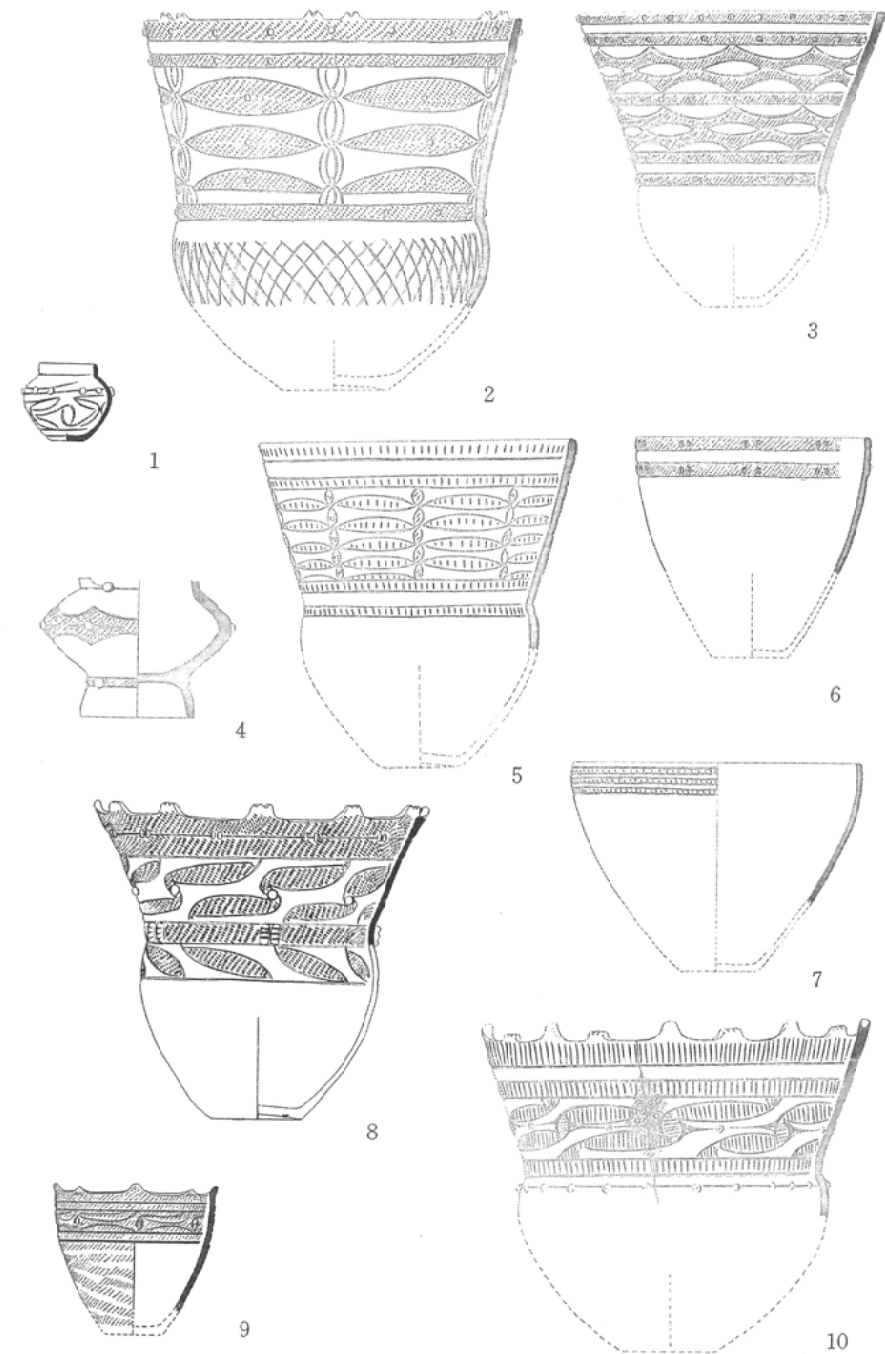
第33図 県内各地の後期中葉の土器群（1. 7 鶴岡市谷定遺跡、2 山形市上野遺跡、3～4 神矢田遺跡、5 山形市大森遺跡、6 高畠町石ヶ森遺跡）— 縮尺 1/6

される。また、あたかもテープを器面にまきつけたかのような細い帯縄文もある。注口土器はきわめて特異なもので、球状にふくれあがった丸味のある器形である。文様は細い微隆線、つまりいわゆる「みずつつ張り状文」による入組文である。ボタン状の貼瘤が口辺などの要所に貼付される。山形市大森遺跡（安孫子昭二、1964）（第33図5）のようにテピカルな資料を出土する遺跡は少ないが、各遺跡で広くみられる。庄内では、鶴岡市谷定遺跡の資料（第33図7）が良好である。この土器群は、いわゆる新地式（山内清男、1964）と呼ばれる土器の仲間であり、安孫子論文の貼瘤文土器の第1段階（安孫子昭二、1969）にあたる。宮城県（注5）の西ノ浜式（後藤勝彦、1962）とも共通するが、少し趣きがさがっている。両者の関係はわからないが、県内では西ノ浜式はみられない。東北北部の十腰内V式にもあまり見当たらないようである。粗製土器としては第5類土器があげられよう。

第8群土器（第34図1～4） 主体となる深鉢は、口縁の開いた頸部でしまる胴張りの器形で、第7群土器と殆んど同じであるが、全体的にふくらみがゆるんでくるらしい。文様は口縁部文様帯（II a 文様帯）が主体で胴部文様帯（II 文様帯）は粗略化され、無文化しているものが多い。この点第7群土器と異なる。文様は、磨消縄文による入組文であるが、「弧線連結文」の形態をとるものが多い。文様帯を区画する縄文帯や入組文の結節部に貼瘤文を施すものがあり、貼瘤が多くなってくる。体部文様帯の粗略化に伴ない、格子状沈線文を有するものがある。この第8群土器も断片的であるが、復元推定を行なうことができる。庄内地方では、鶴岡市谷定遺跡・同高田遺跡（第34図4）や飽海郡遊佐町三崎山遺跡（第34図1）に好資料がある。また県としても、上市市沼田遺跡にテピカルでよくまとまった資料（第34図2～3）がある他、東置賜郡高島町上平柳遺跡（佐々木洋治、1971）などによく見受けられる。この土器群は安孫子論文の「第II段階」に相当し、宮戸III a 式（後藤勝彦、1962）、関東の安行1式（岡本、平沢、1965）に併行するものとみられる。他の深鉢以外の器形や粗製土器についてはあまりいい資料がないが、第5類土器などは、この土器群に伴なってくるものと考えている。

第9群土器（第34図5～7） 主体となる深鉢の器形は、口縁が彎曲せずに立ってくる。文様は殆んど口縁部文様帯に集約され、胴部は無文化されるものが多い。頸部のくびれる深鉢は入組文化した弧線連結文、頸部がくびれない深鉢、鉢は磨消縄文による带状縄文もしくは沈線文が施される。縄文のかわりに刻目文を用いるものが多い。第1次～第2次調査では、縄文のものが多かったが、第3次～第5次調査では刻目文のものが多く。口縁や頸部に貼瘤小突起が多用され、二ヶ単位のものなど複数単位で施すものが多い。この土器群は第8群土器と第10群土器の中間的特色をもち、あまり多くないが、上市市沼田遺跡（第34図6～7）・山形市下宝沢遺跡（第34図5）などにテピカルな資料があるので区別した。最初に注目したのは安孫子昭二氏であり、安孫子論文の第III段階にあたる。宮城県においても一群の土器としてほぼ同じ内容の土器を把握している。（斎藤良治、1968）。庄内地方では、鶴岡市谷定遺跡で若干発見されている程度である。

第10群土器（第34図8～10） 主体となる深鉢の口縁部がやや小さくなるものが増え、



第34図 県内各地の後期後葉の土器群（1遊佐町三崎山遺跡、2～3、6～7上市市沼田遺跡、4鶴岡市高田遺跡、5山形市下宝沢遺跡、8平田町高畑遺跡、9神矢田遺跡、10鶴岡市谷定遺跡）— 縮尺1/6

口唇部、突起部の肥厚するものが多くなる。文様は口縁部文様帯に集約され、上下に扁平化された磨消縄文による入組文が施文される。地文は縄文によるものも多く、入組が2段になるものが多い。縄文の代わりに刷毛目風の刻み目を用いたものがあり、多段の入組文になるものが多い。口縁、頸部の縄文帯には比較的大き目の張瘤小突起を貼付するものが少しみられ、口縁突起の下部や入組文の結節部に三叉状の陰刻が施されるものが多い。

この土器群は本遺跡では殆んど深鉢であるが、注口や壺形土器もそれらしい破片がある。庄内地方では、鶴岡市谷定遺跡（第34図10）・飽海郡平田町高畑遺跡（第34図8）など典型的な土器を出土する遺跡がある。県内では東置賜郡高島町石ヶ森遺跡などたくさんの遺跡においてこの土器群を発見することができる。この土器群は安孫子論文の第Ⅳ段階に相当し、宮戸Ⅲb式（後藤勝彦、1962）に併行するものとみられる。東北北部では十腰内Ⅴ式（磯崎正彦、1964）に併行するであろう。粗製土器としては、斜縄文の第5類土器、羽状縄文の第13類土器、無文の第20類土器が併なうものとみられる。

以上のように第1群土器より第10群土器までその編年的な位置をみてきたが、本遺跡の出土土器は殆んど破片であるため、遺物の説明では少し繁雑であるけれども詳細にその特徴を復元して考えることができるように述べたこともあって、群としての特徴の要点を加えて述べてきた。また、本遺跡の出土土器は断片的なものも多く（量は多いが）、層位的な裏付けも不十分なので、県内、とくに庄内地方の主な土器をあげておいた。さらに他県の資料との比較も加えたかったが、紙面の都合もあり、ほぼ時間的な位置づけにとどめざるを得なかった。

2. 晩期縄文式土器グループの編年

東北地方の晩期縄文式土器は、いわゆる「亀ガ岡式土器」の範疇に入る。「亀ガ岡式土器」は山内清男博士により六型式による編年がうちたてられている（山内清男、1937）。この編年には問題がないわけではないが、一応定めた編年といえる。「亀ガ岡式土器」の仲間は本県においても多数分布しており、神矢田遺跡も同じで、第11群～第16群土器がそうである。この六群の土器の編年的位置づけを考えてみよう。

第11群土器（含、粗製第6類土器、第14類土器、第21類土器）玉抱き三叉文・三丈状陰刻・魚眼状文などが磨消縄文とあわせて用いられるグループは大洞B式に相当するが、細分して大洞B₁式とよばれている土器である。磨消縄文とあわせて用いられない、いわゆる三叉状入組文を施したグループは大洞B式に相当するも大洞B₂式とよばれている土器である。（山内清男、1964）

第12群土器（含、粗製第6類土器、第14類土器、第21類土器）いわゆるシダ状文を有する土器を中心とする土器群で、大洞B-C式に相当する。これも詳細に区分すれば分けられるであろう。粗製土器は第11群土器に伴なうものと、第12群土器に伴なうものの区別しにくい、本遺跡ではこれを区別することとすれば、層位学的方法や単純包含遺跡の資料の力を借りる必要があるであろう。

第13群土器（含、粗製第7類土器）x字状文・大腿骨文などを有する土器を中心とする土器群で、大洞C₁式に相当するものである。粗製土器として共存の可能性が確実なのは第7類土器だけである、無文土器などよ伴ないかもしれないが、現在のところ不明である。

第14群土器（含、粗製第8類土器、第9類土器）平行沈線文を有する土器を中心とする土器群で、大洞C₂式に相当するものであろう。e類土器などは、大洞C₂式の仲間でもかなり大洞A式に近いもので、大洞C式と大洞A式との中間的な特徴をもつものであろう。粗製土器にも平行沈線を口辺に有する斜縄文土器が多い。

第15群土器（含、粗製第10類土器）工字文を有する土器群であり、大洞A式に相当するものである。

第16群土器（含、粗製第10類土器）変形工字文を有する土器群であり、大洞A式に相当するものである。

以上のように本遺跡の晩期縄文式土器第11群～第16群土器の編年的位置について概括的に述べてきたが、本来ならば考察を詳細に述べるべきである。それをあえてしなかったのは、紙数の都合と、本遺跡の問題の強さ、亀ガ岡式土器の研究の状況を考えてのことである。しかし、この6群の晩期縄文式土器は、近い将来において晩期縄文式土器の研究に用いられることがあろう。そのときまでお許し願いたい。

3. 縄文式時代から弥生式時代への移行期の土器群

第17群土器は、一種の変形工字文をもつ鉢および台付鉢、帯状磨消縄文をもつ鉢などである各種器形セットの一部分であり、すべてを含むものではないが、器形の上からみても大洞A式の範疇を脱したものである。また、文様も変型工字文+縄文であり、大洞A式の範疇にない。宮城県鱈沼遺跡（1972）の出土土器とよく類似しており、縄文式時代晩期大洞A式の域を出るものである。磨消縄文を有する福浦島下層式もしくは、柵倉式に近い特徴を示すものと比較的あらっぽいタテに近い縄文を施す砂沢式に近い特徴を示すものがある。発掘においてこのような土器が出土したのは庄内地方では初めてのことであり、類例が殆んどないという状況にある。この土器群とそれに伴なうとみられる粗製土器の第11類土器についてさらに検討する必要がある。

4. まとめ

以上のように本遺跡出土の17の土器群の編年的位置を考察してまいったが、限られた範囲の中で十分に述べることができないことを残念に思う。しかし、ここで述べられなかったことは、でき得る限り近い将来において補稿の機会をとりたいと考えているので、お許し願いたい。

上述の縄文後期の9群の土器については、庄内地方を中心とする山形県において研究が立ち遅れている（その責は筆者の負うところが大きい）。現状を考えると、少なくとも庄内地方ぐらゐの範囲では、当分の間型式編年研究の指標として用いるに耐えるものと思う。即ち、庄内地方における後期縄文式土器の編年は、当分の間は、神矢田2群→神矢田3群→神矢田4群→神矢田5群→神矢田6群→神矢田7群→神矢田8群→神矢田9群→神矢田10群として用いても

よいであろう。近い将来において、鶴岡市谷定遺跡をはじめとして県内各地の資料を扱った研究が発表されるものと思う。そのときには、このふみ台は新らしい姿のものとなり、「型式」として把握されたものになるであろうと信ずる。

さて、この17群の土器を、先の報告や県内主要遺跡との関連を概括的にまとめれば第4表のようになるであろう。

また、この17群の土器を、県外の後・晩期縄文式土器と対比すれば、第5表のようになろう。この表によって神矢田の17群の土器の位置をあらためて確認しておきたい。

- 註1 「外彎」とするより、「内彎」というべきかもしれない。ここでいう「外彎」とは、口縁が開いて一たん外へ広がって内側へ彎曲する形態を意味する。
- 2 米沢市堂森地区在住の手塚孝氏の資料で大変よくまとまっている資料である。
- 3 鶴岡市谷定遺跡は、昭和43年に庄内考古学研究会で発掘を行っており、本格的な遺物研究を行なうため、筆者がその任にあたっている。筆者の力量不足からその結果を公表する段階にいたっていないが、もう少しのところでその責を果せそうである。庄内地方では神矢田遺跡以上に良好な縄文後期の遺跡である。
- 4 米沢市上竹井遺跡は、発見者手塚孝氏の採集品を拝見したところ、堀之内式併行期の良好な資料であることが判明した。堀之内併行期の土器編年研究にかかせない重要な内容をもっている。
- 5 安孫子論文の五型式四段階による把握に筆者は傾倒しているが、四段階はそれぞれ、これまで私たちが地域色ある土器の型式として考えてきたところの型式の段階をも指すものと考えたい。範型理論は本稿では複雑になるので控えてとりあげない。一方的な引用のしかたになると思うが、それは筆者のいたらなさであろう。

第4表 神矢田出土の土器分類と同タイプの土器を出土する県内各地方の代表的遺跡

神矢田表採	神矢田第1次～第2次調査		神矢田第3次～第5次調査		神 矢 田	県 内 各 地 方 別 代 表 的 遺 跡			
精製分類 _(類)	精製分類 _(類)	粗製分類 _(類)	精製分類 _(群)	粗製分類 _(類)	最終結果 _(群)	庄 内 地 方	最 上 地 方	村 山 地 方	置 賜 地 方
1	1 2	1	1	1 15 16	1	遊 佐 町 小 山 崎	大 蔵 村 白 須 賀	東 根 市 猪 野 沢	米 沢 市 堂 森 B
	3	2	2	(2 15 16)	2	(神 矢 田)		村 山 市 念 仏 壇	米 沢 市 上 竹 井
2 3	4	2	3	2 15 16	3	鶴岡市谷定 遊佐町三崎山	真室川町 小 川 内	山 形 市 谷 柏	米沢市上竹井 高 畠 町 宮 下
4 5	6	3	4	3 17	4	鶴岡市谷定 遊佐町三崎山	真室川町 小 川 内	山形市谷柏 村山市土生田	
6	5 7	4	5	4 18 20	5	鶴岡市谷定 遊佐町丸池		山 形 市 上 野	米沢市金谷 高畠町神立洞窟
	8	4	6	4 12	6	鶴岡市谷定 遊佐町三崎山			高畠町神立洞窟
	9	5 6	7	5	7	鶴 岡 市 谷 定		山 形 市 大 森	高 畠 町 石 ケ 森
7	10	6 7	8	5	8	鶴岡市谷定 鶴 岡 市 高 田		上 山 市 沼 田	高 畠 町 上 平 柳
8	11 12	6 8	9	5 13 20	9	鶴岡市谷定		上山市沼田 山形市下宝沢	高 畠 町 上 平 柳
9	13 14	9	10	5 13 20	10	鶴岡市谷定 平 田 町 高 畑		村 山 市 作 野	高 畠 町 石 ゲ 森
10	15 16	9	11	6 14 21	11	羽黒町玉川 平 田 町 高 畑	真室川町 小 川 内	村山市富並宮の前	高 畠 町 石 ゲ 森
11	17	9	12	6 14 21	12	羽黒町玉川 平 田 町 高 畑	大 蔵 村 白 須 賀	村山市湯沢ハバ	(+)
12	18	9	13	7	13	羽黒町玉川 平 田 町 高 畑	新 庄 市 宮 内	東 根 市 花 岡	高 畠 町 上 平 柳
13	19	9	14	8 9	14	羽黒町玉川 平 田 町 高 畑	新 庄 市 宮 内	東 根 市 花 岡	(+)
14	20	9	15	10	15	遊佐町三崎山 (神 矢 田)		東 根 市 蟹 沢	高畠町尼子岩蔭
15	21	9	16	10	16	(神 矢 田)	大 蔵 村 上 竹 野	東 根 市 蟹 沢	高畠町神立洞窟
		9	17	11	17	(神 矢 田)	大 蔵 村 上 竹 野	東 根 市 蟹 沢	高畠町日向洞窟

- イ 神矢田第1次～第2次調査の精製5類土器は中間報告では4群土器と考えて加えたが、むしろ5群土器の仲間に加えるべきだと考え訂正してある。
- ロ 県内地方別代表的遺跡としてあげたものには、文献を利用したものがある。
- 最上地方の晩期遺跡と村山地方と猪野沢と蟹沢遺跡は、柏倉亮吉（1970）「山形県史考古資料編」による。
 - 高畠町関係は佐々木洋治（1972）「高畠町史考古資料編」による。
 - 山形市大森遺跡は、安孫子昭二（1964）「山形県・大森発見の注口土器について」上代文化第34輯による。
 - その他は県内各地の資料保管者に拝見させていただいたものであり、お世話になった酒井忠一（玉川、高畑、三崎山、丸池の各遺跡）高畑中学校（高畑遺跡）柏倉亮吉（最上地方、村山地方）吉田茂、村山市公民館（村山市の諸遺跡）手塚孝（堂森B遺跡、上竹井遺跡）奏昭繁（金谷遺跡）の諸氏には深く感謝申し上げる次第です。